
深 谷 市

皿沼西／戸森前

社会資本整備総合交付金（河川）工事関係
埋蔵文化財発掘調査（整理）事業に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告
（第1分冊）

2 0 1 2

埼 玉 県

財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団



1 皿沼西遺跡全景



2 皿沼西遺跡出土遺物

さらぬまにし と もりまえ 皿沼西遺跡・戸森前遺跡の紹介

皿沼西遺跡・戸森前遺跡は、深谷市の北郊、妻沼低地の水田地帯に営まれた集落遺跡です。大堀川をはさんで北側に皿沼西遺跡、南側に戸森前遺跡があります。両遺跡からは、縄文、弥生、古墳、奈良、平安、江戸時代の遺構や遺物が検出されました。

古墳時代には、家にカマドが登場して間もないころの集落が、皿沼西遺跡に出現しました。しかし、大堀川が土砂で埋まってしまうほどの洪水が起こり、集落は、どこかへ移転したのです。

再び、ここに集落が営まれたのは、奈良時代になってからでした。この集落は、大形の竪穴住居や掘立柱建物などが建ち並び、井戸や灌漑用水もつくられ、比較的恵まれた集落でした。

ところが、弘仁9年(818)、大地震が襲ったのです。この地震で被災した建物の跡が、発見されました。倒壊した建物は、穴を掘り、柱を立てたものでした。また、稲を蓄えた頑丈な倉も、傾きながら地面に沈み込んでいました。

その後、たくましく復興を遂げた集落の跡が、発見されています。

序

埼玉県では、埼玉安心戦略の一つとして、災害に強い県土を目指して、浸水被害や土砂災害を未然に防ぐため、「氾濫しない河川」の整備に努めております。

深谷市におきましては、明治43年（1911）の大洪水の教訓を踏まえ、唐沢川放水路の掘削などの河川整備事業を進め、洪水の危機は減少しました。しかし、近年、都市化の波が押し寄せ、さらなる治水対策が必要となっております。

深谷市北部は、弥生時代以来、先人たちの絶え間ない努力によって、緑豊かな田園地帯となりました。その人々の暮らした跡は、遺跡として埋もれています。特に、奈良・平安時代の遺跡は多く知られており、国内有数の穀倉地帯の礎を築いたことがわかります。

福川調節池の建設予定地内には、皿沼西遺跡・戸森前遺跡が存在し、その取扱いについては、埼玉県市町村支援部生涯学習文化財課と関係諸機関とが、慎重に協議を重ねてまいりましたが、やむを得ず発掘調査を実施し、記録保存の処置を講ずることとなりました。発掘調査は、埼玉県県土整備部河川砂防課の委託を受けて、当事業団が実施いたしました。

調査の結果、縄文時代から江戸時代にかけての遺構や遺物が発見されました。なかでも平安時代の村を襲った弘仁9年（818）の大地震の傷跡は、遺跡全体に広がっていました。とくに地震で傾きながら沈んだ高床倉庫は、これまでに例のない発見となりました。

本書は、これら発掘調査の成果をまとめたものであります。埋蔵文化財の保護、普及・啓発の資料として、また学術研究の基礎資料として広く活用いただければ幸いです。

最後に本書の刊行にあたり、発掘調査に関する諸調整に御尽力いただきました埼玉県県土整備部河川砂防課、熊谷県土整備事務所、埼玉県市町村支援部生涯学習文化財課、深谷市教育委員会並びに地元関係者の皆様に厚く感謝申し上げます。

平成24年3月

財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団
理 事 長 藤 野 龍 宏

例 言

1. 本書は、深谷市に所在する皿沼西遺跡（第2～5次）及び戸森前遺跡（第3・4次）の発掘調査報告書である。

2. 遺跡の代表地番、発掘調査届に対する指示通知は、以下のとおりである。

皿沼西遺跡（第2・3次）

深谷市上敷免皿沼1203番地他

平成19年2月28日 教生文第2-008号

平成19年4月18日 教生文第2-001号

皿沼西遺跡（第4次）

深谷市上敷免皿沼1192番地他

平成20年9月30日 教生文第2-049号

皿沼西遺跡（第5次）

深谷市上敷免皿沼1177-1番地他

平成21年12月2日 教生文第2-055号

戸森前遺跡（第3・4次）

深谷市西島外谷94-1番地

平成19年2月28日 教生文第2-008号

平成19年4月18日 教生文第2-049号

3. 発掘調査は、広域河川改修工事（福川調節池）事業に伴う埋蔵文化財記録保存のための事前調査であり、埼玉県教育局市町村支援部生涯学習文化財課が調整し、埼玉県県土整備部河川砂防課の委託を受け、財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団が実施した。また、整理報告書作成事業も同課から委託を受け、当事業団が実施した。

4. 事業の委託業務名は、下記のとおりである。

発掘調査事業（平成18～21年度）

「広域河川改修工事（埋蔵文化財発掘調査業務委託）」

整理報告書作成事業（平成22・23年度）

「社会資本整備総合交付金（河川）工事関係埋蔵文化財発掘調査（整理）」

5. 発掘調査・整理報告書作成事業は、I-3の組織により実施した。

発掘調査については、平成19年2月1日から平成19年3月23日まで田中広明・渡辺清志が担当し、平成19年4月1日から平成19年7月31日まで山本慎・田中が担当した。平成20年10月1日から平成21年3月27日までは細田勝・赤熊浩一・吉田稔・山本靖・大屋道則・坂田敏行が担当し、平成21年10月1日から平成22年3月24日まで細田・田中・大和田暁・岡田勇介が担当して実施した。

整理報告書作成事業については、平成22年7月1日から平成23年3月24日まで大谷徹・田中が担当し、平成23年7月1日から平成24年3月24日まで木戸春夫・田中が担当して実施し、事業団報告書391集として印刷・刊行した。

6. 発掘調査における基準点測量及び空中写真撮影は、以下の通り委託した。

皿沼西遺跡第2・3次、戸森前遺跡第3・4次

基準点測量 株式会社東京航業研究所
空中写真撮影 中央航業株式会社

皿沼西遺跡第4次

基準点測量 中央航業株式会社
空中写真撮影 シン技術コンサル

皿沼西遺跡第5次

基準点測量 株式会社東京航業研究所
空中写真撮影 シン技術コンサル

7. 口絵用の遺物写真撮影は、小川忠博氏に委託した。

8. 自然科学分析は、花粉分析（畝間溝跡の土）について、株式会社パレオ・ラボ、テフラ分析、花粉分析（井戸跡の土）、樹種同定、炭化材同定、放射性炭素年代測定、骨同定について、パリオ・サーヴェイ株式会社に委託した。

9. 発掘調査における写真撮影は、各担当者が行い、遺物写真の撮影は、木戸が行った。

10. 出土品の整理・図版作成は、木戸・大谷・

田中が行い、宮井英一・渡辺の協力を得た。

11. 本書の執筆は、I-1を埼玉県教育局市町村支援部生涯学習文化財課、III-2・3、IV-2を渡辺、III-5を木戸、その他を田中が行った。
12. 本書の編集は、田中が行った。
13. 本書に掲載した資料は、平成24年4月以降、埼玉県教育委員会が管理・保管する。

14. 発掘調査や本書の作成にあたり、深谷市教育委員会をはじめ、関係機関の皆様から御教示・御協力を賜った。記して感謝いたします。(敬称略) 井上素子・海野芳聖・横山晋一・酒井清治・清水康守・堀口萬吉・宮本長二郎

凡 例

1. 本書におけるX・Yの数値は、世界測地系(新測地系)による国土標準平面直角座標第IX系(原点北緯36°00'00"、東経139°50'00")に基づく、座標値を示す。また、各挿図に記した方位は、すべて座標北を示す。各遺跡の基準座標は、次のとおりである。

皿沼西遺跡：K-10グリッド北西杭の座標は、 $X=23.140\text{m}$ 、 $Y=49.170\text{m}$ (北緯36°12'26"3285、東経139°17'11"4181)で、杭上の標高は、34.100mである。

2. 調査で使用したグリッドは、国土標準平面直角座標に基づく、10m×10mの範囲を基本(1グリッド)としている。
3. グリッドの名称は、北西隅を基点とし、南方向にアルファベット(A・B・C…)、東方向に数字(1・2・3…)を付し、両者を組み合わせて呼称した。
4. 本書の本文、挿図、表中に記した主な遺構の略号は、以下のとおりである。
SD…溝跡 SE…井戸跡 SJ…竪穴住居跡 SK…土壌 P…ピット(小穴・柱穴/GPはグリッドごとに番号を付けたピットの略)
5. 本書における挿図の縮尺は、原則として以下のとおりであるが、一部例外もある。縮率は、個々の図面内に示す。

全測図 1/600 全体図割図 1/250

遺構図 1/600

遺物実測図・拓本 1/3・1/4

金属製品・石製品・石器 1/2・1/3

6. 遺構断面図に表記した水準数値は、海拔標高を示す。
7. 遺物観察表については、以下のとおりである。
 - ・遺物の計測値はcm、重さはgを単位とする。
 - ・産地の限定できる土器については、略称を備考に記した。

土師器

利根川…利根川水系の粘土を用いた土器。

主に角閃石・安山岩・輝石等を含む。

小山川…小山川水系の粘土を用いた土器。

主に結晶片岩・石英等を含む。

ローム土…ローム台地内の粘土を用いた土器。主に頁岩・石英等を含む。

須恵器

南比企…南比企窯跡群の須恵器。白色針状物質・石英等を含む。

末野…末野窯跡群の須恵器。結晶片岩・石英等を含む。

8. 本書に使用した地図は、国土地理院発行1/25,000・1/50,000地形図および深谷市都市計画図(1/10,000)である。
9. 文中の引用文献等は、(著者 発行年)の順で表現し、その他の参考文献とともに巻末に一覧を掲載した。

目 次

巻頭図版

例言

凡例

目次

(第1分冊)

I 発掘調査の概要	1
1. 発掘調査に至る経過	1
2. 発掘調査・報告書作成の経過	2
3. 発掘調査・報告書作成の組織	4
II 遺跡の立地と環境	6
1. 地理的環境	6
2. 歴史的環境	8
III 皿沼西遺跡(2次～5次)の調査	15
1. 遺跡の概要	15
2. 縄文時代の遺構と遺物	17
3. 弥生時代の遺構と遺物	28
4. 古墳時代の遺構と遺物	29
(1) 竪穴住居跡	29
(2) 土壌	68
(3) 遺構外の出土遺物	76
5. 古代の遺構と遺物	80
(1) 竪穴住居跡	80
(2) 掘立柱建物跡	174
(第2分冊)	
(3) 土壌	245
(4) 井戸跡	268
(5) 溝跡	280
(6) 焼成遺構	348
(7) 土器片集積遺構	349
(8) 小穴	349
(9) 遺構外の出土遺物	352
6. 近世の遺構と遺物	359
(1) 井戸跡	359

(2) 溝跡	360
(3) 遺構外の出土遺物	370
IV 戸森前遺跡(3次・4次)の調査	371
1. 遺跡の概要	371
2. 縄文時代の遺構と遺物	372
3. 古墳時代の遺構と遺物	373
(1) 竪穴住居跡	373
(2) 土壌	380
(3) 河川跡	381
4. 古代の遺構と遺物	392
(1) 溝跡	392
(2) 水田跡	398
(3) 河川跡	400
5. 近世の遺構と遺物	400
V 科学分析	401
VI 調査のまとめ	415
1. 成果と課題	415
2. 土器と遺跡の変遷	416
(1) 古墳時代の土器	416
(2) 古代の土器	416
(3) 古代の集落の変遷	422
3. 地震で倒壊した古代の倉	425
4. 弘仁の大地震と地域社会	428
引用・参考文献	439

写真図版

抄録

挿 図 目 次

第1図	調査回数と調査区	2	第35図	4次第28号住居跡出土遺物 (4)	51
第2図	埼玉県の地形	6	第36図	4次第29号住居跡	54
第3図	陸軍測地部の汎測図と皿沼西・戸森 前遺跡	7	第37図	4次第29号住居跡出土遺物 (1)	55
第4図	周辺の遺跡	10	第38図	4次第29号住居跡出土遺物 (2)	56
第5図	標準土層図	15	第39図	4次第31号住居跡 (1)	57
第6図	遺跡位置図	16	第40図	4次第31号住居跡 (2)	58
皿沼西遺跡			第41図	4次第31号住居跡出土遺物 (1)	59
第7図	皿沼西遺跡全体図	18	第42図	4次第31号住居跡出土遺物 (2)	60
第8図	4次第11・49号土壌	20	第43図	5次第4号住居跡 (1)	61
第9図	縄文土器 (1)	21	第44図	5次第4号住居跡 (2)	62
第10図	縄文土器 (2)	23	第45図	5次第4号住居跡出土遺物 (1)	63
第11図	縄文土器 (3)	24	第46図	5次第4号住居跡出土遺物 (2)	64
第12図	石器 (1)	25	第47図	5次第41号住居跡・出土遺物	67
第13図	石器 (2)	26	第48図	5次第43号住居跡・出土遺物	68
第14図	石器 (3)	27	第49図	土壌 (1)	70
第15図	弥生土器	28	第50図	土壌 (2)	71
第16図	古墳時代の遺構分布図	29	第51図	土壌 (3)	72
第17図	4次第6号住居跡	30	第52図	土壌 (4)	73
第18図	4次第6号住居跡出土遺物 (1)	31	第53図	5次第58号土壌出土遺物	74
第19図	4次第6号住居跡出土遺物 (2)	32	第54図	5次第63号土壌出土遺物	75
第20図	4次第15号住居跡・出土遺物	33	第55図	土壌出土遺物	76
第21図	4次第18号住居跡 (1)	35	第56図	遺構外出土遺物	77
第22図	4次第18号住居跡 (2)	36	第57図	奈良・平安時代の遺構分布図	80
第23図	4次第18号住居跡出土遺物 (1)	37	第58図	4次第1号住居跡・出土遺物	81
第24図	4次第18号住居跡出土遺物 (2)	38	第59図	4次第2号住居跡・出土遺物	83
第25図	4次第24号住居跡	40	第60図	4次第3号住居跡・出土遺物	85
第26図	4次第24号住居跡出土遺物 (1)	41	第61図	4次第4号住居跡	87
第27図	4次第24号住居跡出土遺物 (2)	42	第62図	4次第4号住居跡出土遺物 (1)	88
第28図	4次第26号住居跡	43	第63図	4次第4号住居跡出土遺物 (2)	89
第29図	4次第26号住居跡出土遺物	44	第64図	4次第5号住居跡・出土遺物 (1)	91
第30図	4次第28号住居跡 (1)	46	第65図	4次第5号住居跡出土遺物 (2)	92
第31図	4次第28号住居跡 (2)	47	第66図	4次第7号住居跡	92
第32図	4次第28号住居跡出土遺物 (1)	48	第67図	4次第8号住居跡	93
第33図	4次第28号住居跡出土遺物 (2)	49	第68図	4次第8号住居跡出土遺物	94
第34図	4次第28号住居跡出土遺物 (3)	50	第69図	4次第9号住居跡	95
			第70図	4次第9号住居跡出土遺物	96

第71图	4次第10号住居跡・出土遺物	97
第72图	4次第11号住居跡	99
第73图	4次第11号住居跡出土遺物	100
第74图	4次第12号住居跡・出土遺物 (1)	102
第75图	4次第12号住居跡出土遺物 (2)	103
第76图	4次第13号住居跡・出土遺物	103
第77图	4次第14号住居跡・出土遺物	105
第78图	4次第16号住居跡・出土遺物	107
第79图	4次第17号住居跡 (1)	108
第80图	4次第17号住居跡 (2)	109
第81图	4次第17号住居跡出土遺物	111
第82图	4次第19号住居跡 (1)	112
第83图	4次第19号住居跡 (2)	113
第84图	4次第19号住居跡出土遺物	115
第85图	4次第20号住居跡・出土遺物	116
第86图	4次第21号住居跡・出土遺物	117
第87图	4次第22号住居跡	118
第88图	4次第23号住居跡	119
第89图	4次第23号住居跡出土遺物	120
第90图	4次第25号住居跡・出土遺物	121
第91图	4次第27・32号住居跡	122
第92图	4次第33号住居跡・出土遺物	123
第93图	4次第34号住居跡・出土遺物	125
第94图	5次第1号住居跡・出土遺物	127
第95图	5次第2号住居跡・出土遺物	128
第96图	5次第3号住居跡・出土遺物	129
第97图	5次第5号住居跡・出土遺物	131
第98图	5次第6号住居跡・出土遺物	132
第99图	5次第7号住居跡・出土遺物	133
第100图	5次第8号住居跡・出土遺物	134
第101图	5次第9号住居跡・出土遺物	135
第102图	5次第10号住居跡・出土遺物	136
第103图	5次第11号住居跡・出土遺物	137
第104图	5次第12号住居跡・出土遺物 (1)	139
第105图	5次第12号住居跡出土遺物 (2)	140
第106图	5次第13号住居跡・出土遺物	141
第107图	5次第14号住居跡・出土遺物	142
第108图	5次第15号住居跡・出土遺物	143

第109图	5次第17号住居跡・出土遺物	145
第110图	5次第18号住居跡・出土遺物	146
第111图	5次第19号住居跡・出土遺物	147
第112图	5次第20号住居跡・出土遺物	149
第113图	5次第21号住居跡・出土遺物	150
第114图	5次第22号住居跡・出土遺物	151
第115图	5次第23号住居跡出土遺物 (1)	153
第116图	5次第23号住居跡出土遺物 (2)	154
第117图	5次第26号住居跡・出土遺物 (1)	155
第118图	5次第26号住居跡出土遺物 (2)	156
第119图	5次第27号住居跡・出土遺物	157
第120图	5次第28号住居跡・出土遺物	159
第121图	5次第29号住居跡・出土遺物	160
第122图	5次第30号住居跡・出土遺物	161
第123图	5次第33号住居跡・出土遺物	163
第124图	5次第34号住居跡・出土遺物	164
第125图	5次第35号住居跡・出土遺物	165
第126图	5次第36号住居跡・出土遺物	167
第127图	5次第37号住居跡・出土遺物	168
第128图	5次第38号住居跡・出土遺物	169
第129图	5次第39号住居跡・出土遺物	170
第130图	5次第40号住居跡	171
第131图	5次第42号住居跡・出土遺物	173
第132图	掘立柱建物跡の柱痕跡 (1)	174
第133图	掘立柱建物跡の柱痕跡 (2)	175
第134图	掘立柱建物跡の柱痕跡 (3)	176
第135图	4次第1号掘立柱建物跡 (1)・ 出土遺物	178
第136图	4次第1号掘立柱建物跡 (2)	179
第137图	4次第2号掘立柱建物跡 (1)	180
第138图	4次第2号掘立柱建物跡 (2)	181
第139图	4次第3号掘立柱建物跡 (1)	182
第140图	4次第3号掘立柱建物跡 (2)・ 出土遺物	183
第141图	4次第4号掘立柱建物跡 (1)	184
第142图	4次第4号掘立柱建物跡 (2)	185
第143图	4次第4号掘立柱建物跡出土 遺物	186

第144图 4次第5号掘立柱建物跡・出土 遺物.....187	第172图 5次第3号掘立柱建物跡 (2)・ 出土遺物.....217
第145图 4次第6号掘立柱建物跡 (1).....188	第173图 5次第4号掘立柱建物跡.....218
第146图 4次第6号掘立柱建物跡 (2)・ 出土遺物.....189	第174图 5次第5号掘立柱建物跡・出土 遺物.....219
第147图 4次第7号掘立柱建物跡・出土 遺物.....191	第175图 5次第6号掘立柱建物跡 (1).....222
第148图 4次第8号掘立柱建物跡 (1).....192	第176图 5次第6号掘立柱建物跡 (2)・ 出土遺物.....223
第149图 4次第8号掘立柱建物跡 (2).....193	第177图 5次第7号掘立柱建物跡 (1)・ 出土遺物.....224
第150图 4次第9号掘立柱建物跡・出土 遺物.....194	第178图 5次第7号掘立柱建物跡 (2).....225
第151图 4次第10号掘立柱建物跡 (1).....195	第179图 5次第8号掘立柱建物跡 (1).....226
第152图 4次第10号掘立柱建物跡 (2).....196	第180图 5次第8号掘立柱建物跡 (2).....227
第153图 4次第11号掘立柱建物跡.....197	第181图 5次第8号掘立柱建物跡 (3).....228
第154图 4次第11号掘立柱建物跡出土 遺物.....198	第182图 5次第8号掘立柱建物跡出土 遺物.....229
第155图 4次第12号掘立柱建物跡.....199	第183图 5次第9号掘立柱建物跡 (1).....230
第156图 4次第13号掘立柱建物跡 (1)・ 出土遺物.....200	第184图 5次第9号掘立柱建物跡 (2).....231
第157图 4次第13号掘立柱建物跡 (2).....201	第185图 5次第9号掘立柱建物跡出土 遺物.....231
第158图 4次第14号掘立柱建物跡 (1).....202	第186图 5次第10号掘立柱建物跡 (1).....232
第159图 4次第14号掘立柱建物跡 (2).....203	第187图 5次第10号掘立柱建物跡 (2)・ 出土遺物.....233
第160图 4次第14号掘立柱建物跡 (3)・ 出土遺物.....204	第188图 5次第11号掘立柱建物跡 (1)・ 出土遺物.....234
第161图 4次第15号掘立柱建物跡・出土 遺物.....205	第189图 5次第11号掘立柱建物跡 (2).....235
第162图 4次第16号掘立柱建物跡.....207	第190图 5次第12号掘立柱建物跡.....236
第163图 4次第17号掘立柱建物跡.....208	第191图 5次第13号掘立柱建物跡.....237
第164图 4次第18号掘立柱建物跡.....210	第192图 5次第14号掘立柱建物跡・出土 遺物.....238
第165图 4次第19号掘立柱建物跡.....211	第193图 5次第15号掘立柱建物跡.....239
第166图 5次第1号掘立柱建物跡 (1).....212	第194图 5次第16号掘立柱建物跡・出土 遺物.....240
第167图 5次第1号掘立柱建物跡 (2).....213	第195图 5次第17号掘立柱建物跡.....241
第168图 5次第1号掘立柱建物跡出土 遺物.....213	第196图 掘立柱建物跡の柱間寸法 (1).....242
第169图 5次第2号掘立柱建物跡 (1).....214	第197图 掘立柱建物跡の柱間寸法 (2).....243
第170图 5次第2号掘立柱建物跡 (2)・ 出土遺物.....215	第198图 掘立柱建物跡の柱間寸法 (3).....244
第171图 5次第3号掘立柱建物跡 (1).....216	第199图 大型円形土坑と関連遺構 (1).....246

第200図 大型円形土壌と関連遺構 (2)・ 出土遺物 (1)	247	第232図 全体図割図 (2)	287
第201図 大型円形土壌と関連遺構出土 遺物 (2)	248	第233図 全体図割図 (3)	288
第202図 大型円形土壌と関連遺構出土 遺物 (3)	249	第234図 全体図割図 (4)	289
第203図 T字形土壌 (1)	252	第235図 全体図割図 (5)	290
第204図 T字形土壌 (2)	253	第236図 全体図割図 (6)	291
第205図 T字形土壌 (3)・出土遺物	254	第237図 全体図割図 (7)	292
第206図 T字形土壌 (4)	255	第238図 全体図割図 (8)	293
第207図 5次第16号土壌・出土遺物	257	第239図 全体図割図 (9)	294
第208図 土壌 (1)	258	第240図 溝跡土層断面図 (1)	295
第209図 土壌 (2)	259	第241図 溝跡土層断面図 (2)	296
第210図 土壌 (3)	260	第242図 溝跡土層断面図 (3)	297
第211図 土壌 (4)	261	第243図 溝跡土層断面図 (4)	298
第212図 土壌 (5)	262	第244図 溝跡土層断面図 (5)	299
第213図 土壌 (6)	263	第245図 3次第2号溝跡出土遺物 (1)	300
第214図 土壌 (7)	264	第246図 3次第2号溝跡出土遺物 (2)	301
第215図 土壌出土遺物	267	第247図 3次第2号溝跡出土遺物 (3)	302
第216図 火葬墓・出土遺物	268	第248図 3次第60号溝跡出土遺物	305
第217図 4次第5・6号井戸跡	269	第249図 4次第4号溝跡出土遺物	307
第218図 4次第5号井戸跡出土遺物	271	第250図 5次第3号溝跡出土遺物 (1)	308
第219図 4次第6号井戸跡出土遺物	273	第251図 5次第3号溝跡出土遺物 (2)	309
第220図 4次第7・8号井戸跡・5次第1号 井戸跡 (1)	274	第252図 5次第4号溝跡出土遺物	311
第221図 5次第1号井戸跡 (2)	275	第253図 5次第5号溝跡出土遺物 (1)	312
第222図 5次第1号井戸跡井戸枠 (1)	276	第254図 5次第5号溝跡出土遺物 (2)	313
第223図 5次第1号井戸跡井戸枠 (2)	277	第255図 5次第5号溝跡出土遺物 (3)	314
第224図 5次第1号井戸跡井戸枠 (3)・ 出土遺物	278	第256図 5次第5号溝跡出土遺物 (4)	315
第225図 5次第5・7・8号井戸跡・出土 遺物	279	第257図 5次第5号溝跡出土遺物 (5)	316
第226図 全体図割図の位置	281	第258図 5次第5号溝跡出土遺物 (6)	317
第227図 3次溝跡 (上層) (1)	282	第259図 枝線水路跡出土遺物	325
第228図 3次溝跡 (上層) (2)	283	第260図 水溜り状土壌付き溝跡 (1)	327
第229図 3次溝跡 (上層) (3)	284	第261図 水溜り状土壌付き溝跡 (2)	328
第230図 3次溝跡 (上層) 土層断面図	285	第262図 水溜り状土壌付き溝跡 (3)	329
第231図 全体図割図 (1)	286	第263図 水溜り状土壌付き溝跡 (4)・ 出土遺物	331
		第264図 畝間溝跡位置図	333
		第265図 畝間溝跡 (1)	334
		第266図 畝間溝跡 (2)	335
		第267図 畝間溝跡 (3)	336
		第268図 畝間溝跡 (4)	337

第269図 畝間溝跡 (5)	338	第305図 河川跡出土遺物 (1)	385
第270図 畝間溝跡 (6)	339	第306図 河川跡出土遺物 (2)	387
第271図 畝間溝跡 (7)	340	第307図 河川跡出土遺物 (3)	389
第272図 畝間溝跡 (8)	341	第308図 河川跡出土遺物 (4)	390
第273図 区画溝跡	342	第309図 河川跡出土遺物 (5)	391
第274図 焼成遺構 (1)	347	第310図 全体図割図の位置	392
第275図 焼成遺構 (2)	348	第311図 全体図割図 (1)	393
第276図 焼成遺構出土遺物	348	第312図 全体図割図 (2)	394
第277図 土器片集積遺構出土遺物	349	第313図 全体図割図 (3)	395
第278図 小穴出土遺物	351	第314図 全体図割図 (4)・溝跡出土遺物	396
第279図 遺構外出土遺物 (1)	353	第315図 溝跡土層断面図 (1)	397
第280図 遺構外出土遺物 (2)	354	第316図 溝跡土層断面図 (2)	398
第281図 遺構外出土遺物 (3)	355	第317図 水溜り状土塊付き溝跡	399
第282図 近世の全体図	359	第318図 河川跡 (古代) 出土遺物	400
第283図 井戸跡 (1)	361	第319図 河川跡出土遺物	400
第284図 井戸跡 (2)	362	第320図 畝間溝跡の主要花粉化石分布図	402
第285図 5次第2号溝跡橋脚遺構・出土 遺物	363	第321図 畝間溝跡の花粉化石	404
第286図 溝跡土層断面図 (1)・出土遺物	364	第322図 5次第4号住居跡の砂分	404
第287図 溝跡土層断面図 (2)	365	第323図 5次第4号住居跡の角閃石の屈折率	405
第288図 4次第3号溝跡出土遺物	367	第324図 5次第1号井戸跡の主要花粉化石 分布図	405
第289図 5次第32・47号溝跡出土遺物 (1)	368	第325図 5次第1号井戸跡の花粉化石	407
第290図 5次第32・47号溝跡出土遺物 (2)	369	第326図 火葬墓蔵骨器内の骨片	409
第291図 遺構外出土遺物	370	第327図 樹種同定試料の木材組織	410
戸森前遺跡		第328図 古墳時代の土器	417
第292図 戸森前遺跡全体図	371	第329図 古代の土器 (1)	419
第293図 遺構外出土縄文土器	372	第330図 古代の土器 (2)	421
第294図 3次第1号住居跡・出土遺物	373	第331図 集落の変遷 (1)	423
第295図 3次第2号住居跡	375	第332図 集落の変遷 (2)	424
第296図 3次第2号住居跡出土遺物	376	第333図 集落の変遷 (3)	425
第297図 3次第3～6号住居跡	377	第334図 高床倉庫の復元 (1)	426
第298図 3次第7号住居跡出土遺物	378	第335図 高床倉庫の復元 (2)	427
第299図 3次第8号住居跡	379	第336図 液状化現象の痕跡	428
第300図 3次第8号住居跡出土遺物	381	第337図 第V期の遺構と遺物	429
第301図 土壌	381	第338図 液状化現象の痕跡と側方流動 の発生した遺跡	431
第302図 河川跡 (1)	382	第339図 竪穴住居跡の累計数	431
第303図 河川跡 (2)	383	第340図 榛沢・幡羅郡の集落の推移 (1)	432
第304図 河川跡 (3)	384		

第341図 榛沢・幡羅郡の集落の推移 (2)433

第342図 榛沢・幡羅郡の集落の推移 (3)435

第343図 榛沢・幡羅郡の集落の推移 (4)436

第344図 「田夫冊」437

表 目 次

皿沼西遺跡

第1表 周辺遺跡一覧 9

第2表 石器観察表 28

第3表 4次第6号住居跡出土遺物観察表 32

第4表 4次第15号住居跡出土遺物観察表 33

第5表 4次第18号住居跡出土遺物観察表 39

第6表 4次第24号住居跡出土遺物観察表 42

第7表 4次第26号住居跡出土遺物観察表 45

第8表 4次第28号住居跡出土遺物観察表 52

第9表 4次第29号住居跡出土遺物観察表 56

第10表 4次第31号住居跡出土遺物観察表 60

第11表 5次第4号住居跡出土遺物観察表 65

第12表 5次第41号住居跡出土遺物観察表 66

第13表 5次第43号住居跡出土遺物観察表 69

第14表 土壌一覧表 69

第15表 5次第58号土壌出土遺物観察表 73

第16表 5次第63号土壌出土遺物観察表 76

第17表 土壌出土遺物観察表 76

第18表 遺構外出土遺物観察表 78

第19表 4次第1号住居跡出土遺物観察表 82

第20表 4次第2号住居跡出土遺物観察表 84

第21表 4次第3号住居跡出土遺物観察表 86

第22表 4次第4号住居跡出土遺物観察表 89

第23表 4次第5号住居跡出土遺物観察表 90

第24表 4次第8号住居跡出土遺物観察表 96

第25表 4次第9号住居跡出土遺物観察表 97

第26表 4次第10号住居跡出土遺物観察表 98

第27表 4次第11号住居跡出土遺物観察表 101

第28表 4次第12号住居跡出土遺物観察表 101

第29表 4次第13号住居跡出土遺物観察表 104

第30表 4次第14号住居跡出土遺物観察表 104

第31表 4次第16号住居跡出土遺物観察表 106

第32表 4次第17号住居跡出土遺物観察表 110

第33表 4次第19号住居跡出土遺物観察表 114

第34表 4次第20号住居跡出土遺物観察表 114

第35表 4次第21号住居跡出土遺物観察表 114

第36表 4次第23号住居跡出土遺物観察表 118

第37表 4次第25号住居跡出土遺物観察表 121

第38表 4次第33号住居跡出土遺物観察表 124

第39表 4次第34号住居跡出土遺物観察表 126

第40表 5次第1号住居跡出土遺物観察表 126

第41表 5次第2号住居跡出土遺物観察表 128

第42表 5次第3号住居跡出土遺物観察表 129

第43表 5次第5号住居跡出土遺物観察表 130

第44表 5次第6号住居跡出土遺物観察表 132

第45表 5次第7号住居跡出土遺物観察表 132

第46表 5次第8号住居跡出土遺物観察表 134

第47表 5次第9号住居跡出土遺物観察表 135

第48表 5次第10号住居跡出土遺物観察表 136

第49表 5次第11号住居跡出土遺物観察表 138

第50表 5次第12号住居跡出土遺物観察表 140

第51表 5次第13号住居跡出土遺物観察表 142

第52表 5次第14号住居跡出土遺物観察表 143

第53表 5次第15号住居跡出土遺物観察表 143

第54表 5次第17号住居跡出土遺物観察表 144

第55表 5次第18号住居跡出土遺物観察表 146

第56表 5次第19号住居跡出土遺物観察表 147

第57表 5次第20号住居跡出土遺物観察表 148

第58表 5次第21号住居跡出土遺物観察表 148

第59表 5次第22号住居跡出土遺物観察表 151

第60表 5次第23号住居跡出土遺物観察表 152

第61表 5次第26号住居跡出土遺物観察表 158

第62表 5次第27号住居跡出土遺物観察表 158

第63表 5次第28号住居跡出土遺物観察表 160

第64表 5次第29号住居跡出土遺物観察表 160

第65表 5次第30号住居跡出土遺物観察表 162

第66表	5次第33号住居跡出土遺物觀察表	162	第89表	5次第6号掘立柱建物跡出土遺物 觀察表	221
第67表	5次第34号住居跡出土遺物觀察表	164	第90表	5次第7号掘立柱建物跡出土遺物 觀察表	223
第68表	5次第35号住居跡出土遺物觀察表	166	第91表	5次第8号掘立柱建物跡出土遺物 觀察表	223
第69表	5次第36号住居跡出土遺物觀察表	167	第92表	5次第9号掘立柱建物跡出土遺物 觀察表	232
第70表	5次第37号住居跡出土遺物觀察表	168	第93表	5次第10号掘立柱建物跡出土遺物 觀察表	232
第71表	5次第38号住居跡出土遺物觀察表	169	第94表	5次第11号掘立柱建物跡出土遺物 觀察表	236
第72表	5次第39号住居跡出土遺物觀察表	170	第95表	5次第14号掘立柱建物跡出土遺物 觀察表	239
第73表	5次第42号住居跡出土遺物觀察表	172	第96表	5次第16号掘立柱建物跡出土遺物 觀察表	241
第74表	4次第1号掘立柱建物跡出土遺物 觀察表	177	第97表	大型円形土塙と関連遺構出土遺物 觀察表	250
第75表	4次第3号掘立柱建物跡出土遺物 觀察表	177	第98表	3次第14号土塙出土遺物觀察表	255
第76表	4次第4号掘立柱建物跡出土遺物 觀察表	186	第99表	5次第36号土塙出土遺物觀察表	255
第77表	4次第5号掘立柱建物跡出土遺物 觀察表	187	第100表	5次第16号土塙出土遺物觀察表	256
第78表	4次第6号掘立柱建物跡出土遺物 觀察表	190	第101表	土塙一覽表	265
第79表	4次第7号掘立柱建物跡出土遺物 觀察表	190	第102表	土塙出土遺物觀察表	266
第80表	4次第9号掘立柱建物跡出土遺物 觀察表	194	第103表	火葬墓出土遺物觀察表	268
第81表	4次第11号掘立柱建物跡出土遺物 觀察表	198	第104表	4次第5号井戸跡出土遺物觀察表	270
第82表	4次第13号掘立柱建物跡出土遺物 觀察表	201	第105表	4次第6号井戸跡出土遺物觀察表	272
第83表	4次第14号掘立柱建物跡出土遺物 觀察表	205	第106表	5次第1号井戸跡出土遺物觀察表	278
第84表	4次第15号掘立柱建物跡出土遺物 觀察表	205	第107表	5次第5号井戸跡出土遺物觀察表	279
第85表	5次第1号掘立柱建物跡出土遺物 觀察表	213	第108表	5次第8号井戸跡出土遺物觀察表	280
第86表	5次第2号掘立柱建物跡出土遺物 觀察表	215	第109表	3次第2号溝跡出土遺物觀察表	302
第87表	5次第3号掘立柱建物跡出土遺物 觀察表	217	第110表	3次第60号溝跡出土遺物觀察表	304
第88表	5次第5号掘立柱建物跡出土遺物 觀察表	220	第111表	4次第4号溝跡出土遺物觀察表	306
			第112表	5次第3号溝跡出土遺物觀察表	310
			第113表	5次第4号溝跡出土遺物觀察表	311
			第114表	5次第5号溝跡出土遺物觀察表	318
			第115表	枝線水路跡出土遺物觀察表	324
			第116表	水溜り状土塙付き溝跡一覽表	330
			第117表	水溜り状土塙付き溝跡出土遺物	

観察表.....	332	第129表	満跡出土遺物観察表.....	397	
第118表	満跡一覧表.....	343	第130表	水溜り状土塊付き満跡一覧表.....	398
第119表	焼成遺構出土遺物観察表.....	350	第131表	満跡一覧表.....	399
第120表	土器片集積遺構出土遺物観察表.....	350	第132表	河川跡出土遺物観察表.....	400
第121表	小穴出土遺物観察表.....	350	第133表	産出花粉化石一覧.....	403
第122表	遺構外出土遺物観察表.....	356	第134表	花粉分析結果.....	406
第123表	満跡一覧表.....	366	第135表	樹種同定結果.....	408
戸森前遺跡			第136表	骨同定結果.....	409
第124表	3次第1号住居跡出土遺物観察表.....	374	第137表	放射性炭素年代測定結果および 暦年校正結果.....	411
第125表	3次第2号住居跡出土遺物観察表.....	376	第138表	関東地方の勅旨田.....	437
第126表	3次第7号住居跡出土遺物観察表.....	378	第139表	第328～330図の土器出土遺構.....	438
第127表	3次第8号住居跡出土遺物観察表.....	380			
第128表	河川跡出土遺物観察表.....	388			

写真図版目次

図版1	1	皿沼西遺跡・戸森前遺跡空中写真	8	4次第18号住居跡	
図版2	1	皿沼西遺跡・戸森前遺跡空中写真	図版8	1	4次第18号住居跡
図版3	1	皿沼西遺跡・戸森前遺跡空中写真	2	4次第18号住居跡遺物出土状況	
	2	皿沼西遺跡・戸森前遺跡空中写真	3	4次第18号住居跡遺物出土状況	
図版4	1	皿沼西遺跡第2・3次、戸森前遺跡 第3・4次空中写真	4	4次第18号住居跡遺物出土状況	
	2	皿沼西遺跡第4次空中写真	5	4次第18号住居跡カマド	
図版5	1	皿沼西遺跡第4次空中写真	6	4次第18号住居跡カマド	
	2	皿沼西遺跡第5次空中写真	7	4次第18号住居跡カマド遺物出土 状況	
図版6	1	皿沼西遺跡第5次空中写真	8	4次第24号住居跡遺物出土状況	
	2	調査前全景（戸森前遺跡）	図版9	1	4次第24号住居跡カマド遺物出土 状況
	3	調査前全景（皿沼西遺跡）	2	4次第24号住居跡カマド遺物出土 状況	
	4	浅間山B軽石層除去全景	3	4次第24号住居跡カマド	
	5	皿沼西遺跡4次調査区遠景	4	4次第26号住居跡	
皿沼西遺跡			5	4次第26号住居跡遺物出土状況	
図版7	1	5次調査区全景	6	4次第26号住居跡カマド	
	2	5次調査区全景	7	4次第26号住居跡カマド出土石製品	
	3	5次調査区全景	8	4次第28号住居跡	
	4	5次調査区全景	図版10	1	4次第28号住居跡
	5	4次第6号住居跡	2	4次第28号住居跡	
	6	4次第6号住居跡遺物出土状況			
	7	4次第15号住居跡			

	3	4次第28号住居跡遺物出土状況
	4	4次第28号住居跡遺物出土状況
	5	4次第28号住居跡遺物出土状況
	6	4次第28号住居跡遺物出土状況
	7	4次第28号住居跡遺物出土状況
	8	4次第28号住居跡カマド
図版11	1	4次第28号住居跡カマド遺物出土状況
	2	4次第28号住居跡カマド遺物出土状況
	3	4次第29号住居跡掘り方
	4	4次第29号住居跡遺物出土状況
	5	4次第29号住居跡カマド
	6	4次第29号住居跡カマド
	7	4次第31号住居跡
	8	4次第31号住居跡遺物出土状況
図版12	1	4次第31号住居跡遺物出土状況
	2	4次第31号住居跡カマド
	3	5次第4号住居跡遺物出土状況
	4	5次第4号住居跡土層堆積状況
	5	5次第4号住居跡遺物出土状況
	6	5次第4号住居跡遺物出土状況
	7	5次第4号住居跡カマド
	8	5次第4号住居跡カマド
図版13	1	5次第41号住居跡
	2	5次第41号住居跡
	3	5次第43号住居跡掘り方
	4	5次第58号土壇
	5	5次第63号土壇
	6	5次第63号土壇遺物出土状況
	7	5次第63号土壇遺物出土状況
	8	4次第1号住居跡
図版14	1	4次第1号住居跡カマド
	2	4次第2号住居跡
	3	4次第3・33号住居跡
	4	4次第4・13号住居跡
	5	4次第5号住居跡
	6	4次第5号住居跡カマド
	7	4次第7号住居跡
	8	4次第8号住居跡

図版15	1	4次第9号住居跡
	2	4次第9号住居跡カマド
	3	4次第10号住居跡
	4	4次第10号住居跡遺物出土状況
	5	4次第11号住居跡
	6	4次第11号住居跡カマド
	7	4次第12号住居跡
	8	4次第12号住居跡カマド
図版16	1	4次第14号住居跡
	2	4次第16号住居跡カマド
	3	4次第17号住居跡
	4	4次第19・20号住居跡
	5	4次第19号住居跡カマド
	6	4次第23号住居跡
	7	4次第25号住居跡
	8	4次第27号住居跡
図版17	1	5次第1号住居跡
	2	5次第2号住居跡
	3	5次第3号住居跡
	4	5次第5号住居跡
	5	5次第5号住居跡カマド
	6	5次第6号住居跡
	7	5次第7号住居跡
	8	5次第8号住居跡
図版18	1	5次第8号住居跡カマド
	2	5次第9号住居跡
	3	5次第10号住居跡
	4	5次第11号住居跡
	5	5次第12号住居跡
	6	5次第12号住居跡カマド
	7	5次第13号住居跡
	8	5次第13号住居跡カマド
図版19	1	5次第14号住居跡
	2	5次第15号住居跡
	3	5次第17号住居跡
	4	5次第18号住居跡
	5	5次第19号住居跡
	6	5次第20号住居跡

- 7 5次第20号住居跡カマド
8 5次第21号住居跡
図版20 1 5次第22号住居跡
2 5次第23号住居跡
3 5次第27・28号住居跡
4 5次第27号住居跡内焼成土壌
5 5次第30号住居跡
6 5次第33号住居跡
7 5次第34・39・40号住居跡
8 5次第34号住居跡カマド
図版21 1 5次第37号住居跡
2 5次第40号住居跡
3 4次第1号掘立柱建物跡
4 4次第2・17号掘立柱建物跡
5 4次第3・5号掘立柱建物跡
6 4次第4号掘立柱建物跡
7 4次第6号掘立柱建物跡
8 4次第7号掘立柱建物跡
図版22 1 4次第8号掘立柱建物跡
2 4次第9号掘立柱建物跡
3 4次第11・12号掘立柱建物跡
4 4次第13号掘立柱建物跡
5 4次第15号掘立柱建物跡
6 4次第16号掘立柱建物跡
7 4次第17号掘立柱建物跡
8 5次第1号掘立柱建物跡
図版23 1 5次第2号掘立柱建物跡
2 5次第3号掘立柱建物跡
3 5次第5号掘立柱建物跡
4 5次第6号掘立柱建物跡
5 5次第7号掘立柱建物跡
6 5次第8号掘立柱建物跡
7 5次第8号掘立柱建物跡柱穴1
8 5次第8号掘立柱建物跡柱穴2
図版24 1 5次第8号掘立柱建物跡柱穴3
2 5次第8号掘立柱建物跡柱穴3
3 5次第8号掘立柱建物跡柱穴4
4 5次第8号掘立柱建物跡柱穴5
5 5次第8号掘立柱建物跡柱穴6
6 5次第8号掘立柱建物跡柱穴7
7 5次第8号掘立柱建物跡柱穴8
8 5次第8号掘立柱建物跡柱穴10
図版25 1 5次第8号掘立柱建物跡柱穴11
2 5次第8号掘立柱建物跡柱穴12
3 5次第9号掘立柱建物跡
4 5次第9号掘立柱建物跡柱穴2
土層断面
5 5次第9号掘立柱建物跡柱穴7
土層断面
6 5次第9号掘立柱建物跡柱穴9
土層断面
7 5次第10号掘立柱建物跡
8 5次第10号掘立柱建物跡
図版26 1 5次第12号掘立柱建物跡
2 5次第13号掘立柱建物跡
3 5次第14号掘立柱建物跡
4 5次第15号掘立柱建物跡
5 大型円形土壌
6 大型円形土壌遺物出土状況
7 大型円形土壌
8 3次第14号土壌遺物出土状況
図版27 1 5次第16号土壌遺物出土状況
2 火葬墓
3 火葬墓
4 4次第3号井戸跡
5 4次第5号井戸跡
6 4次第5号井戸跡
7 4次第5号井戸跡
8 4次第6号井戸跡
図版28 1 4次第6号井戸跡遺物出土状況
2 4次第6号井戸枠出土状況
3 4次第6号井戸枠出土状況
4 5次第1号井戸跡
5 5次第1号井戸枠出土状況
6 5次第1号井戸枠(外側)出土状況
7 5次第1号井戸枠(外側)出土状況

	8	5次第1号井戸内枠(一段目)出土状況	図版35	1	縄文土器(5)(第11図45)
				2	縄文土器(6)(第11図47)
図版29	1	5次第1号井戸枠出土状況		3	縄文土器(7)(第11図48)
	2	5次第1号井戸枠出土状況		4	縄文土器(8)(第11図46)
	3	5次第3号井戸跡曲物出土状況		5	石鏃(第12図1)
	4	浅間山B軽石層下全景	図版36	1	縄文時代の石器
	5	3次調査区全景	図版37	1	4次第6号住居跡(第18図1)
	6	3次東側全景		2	4次第6号住居跡(第18図2)
	7	5次3・5号溝跡		3	4次第6号住居跡(第18図3)
	8	5次第33・34号溝跡		4	4次第6号住居跡(第18図4)
図版30	1	5次第5号溝跡遺物出土状況		5	4次第6号住居跡(第18図6)
	2	5次第5号溝跡大甕出土状況		6	4次第6号住居跡(第18図7)
	3	5次第5号溝跡大甕出土状況		7	4次第6号住居跡(第18図5)
	4	5次第5号溝跡大甕出土状況	図版38	1	4次第6号住居跡(第18図8)
	5	第1畝間溝跡群		2	4次第6号住居跡(第18図9)
	6	水溜り状土壌付き溝跡		3	4次第6号住居跡(第18図10)
	7	第6畝間溝跡群		4	4次第6号住居跡(第19図11)
	8	第8畝間溝跡群		5	4次第6号住居跡(第19図12)
図版31	1	第9畝間溝跡群		6	4次第15号住居跡(第20図2)
	2	水田跡全景		7	4次第15号住居跡(第20図4)
	3	5次第13号焼成土壌遺物出土状況	図版39	1	4次第15号住居跡(第20図8)
	4	5次第20号焼成土壌		2	4次第18号住居跡(第23図2)
	5	5次第23号焼成土壌		3	4次第18号住居跡(第23図4)
	6	5次第23号焼成土壌		4	4次第18号住居跡(第23図5)
	7	5次第24・35号焼成土壌		5	4次第18号住居跡(第23図8)
	8	5次第25号焼成土壌遺物出土状況		6	4次第18号住居跡(第23図9)
図版32	1	5次第1号溝跡		7	4次第18号住居跡(第23図12)
	2	5次第2号溝跡		8	4次第18号住居跡(第23図13)
	3	5次第2号溝跡		9	4次第18号住居跡(第23図14)
	4	5次第2号溝跡橋脚栗石		10	4次第18号住居跡(第23図21)
	5	5次土層断面	図版40	1	4次第18号住居跡(第23図16)
	6	5次液状化現象の痕跡		2	4次第18号住居跡(第23図17)
	7	5次調査区南東部液状化現象の痕跡		3	4次第18号住居跡(第23図18)
	8	5次液状化現象の痕跡		4	4次第18号住居跡(第23図19)
図版33	1	縄文土器(1)(第9図)		5	4次第18号住居跡(第23図20)
	2	縄文土器(2)(第9図)		6	4次第18号住居跡(第23図24)
図版34	1	縄文土器(3)(第10・15図)	図版41	1	4次第18号住居跡(第23図22)
	2	縄文土器(4)(第10図5)		2	4次第18号住居跡(第24図25)

	3	4次第18号住居跡(第24図27)		7	4次第28号住居跡(第32図13)
	4	4次第18号住居跡(第24図26)	図版46	1	4次第28号住居跡(第32図14)
	5	4次第24号住居跡(第26図1)		2	4次第28号住居跡(第32図15)
	6	4次第24号住居跡(第26図2)		3	4次第28号住居跡(第32図16)
	7	4次第24号住居跡(第26図4)		4	4次第28号住居跡(第32図17)
図版42	1	4次第24号住居跡(第26図5)		5	4次第28号住居跡(第32図18)
	2	4次第24号住居跡(第26図6)		6	4次第28号住居跡(第33図32)
	3	4次第24号住居跡(第26図9)		7	4次第28号住居跡(第33図33)
	4	4次第24号住居跡(第26図7)	図版47	1	4次第28号住居跡(第33図34)
	5	4次第24号住居跡(第26図10)		2	4次第28号住居跡(第33図38)
	6	4次第24号住居跡(第26図11)		3	4次第28号住居跡(第33図40)
	7	4次第24号住居跡(第26図15)		4	4次第28号住居跡(第33図42)
	8	4次第24号住居跡(第26図12)		5	4次第28号住居跡(第33図43)
	9	4次第24号住居跡(第26図14)		6	4次第28号住居跡(第34図47)
図版43	1	4次第24号住居跡(第26図19)	図版48	1	4次第28号住居跡(第34図44)
	2	4次第24号住居跡(第26図21)		2	4次第28号住居跡(第34図48)
	3	4次第24号住居跡(第27図22)		3	4次第28号住居跡(第34図49)
	4	4次第26号住居跡(第29図1)		4	4次第28号住居跡(第34図50)
	5	4次第26号住居跡(第29図2)	図版49	1	4次第29号住居跡(第37図1)
	6	4次第26号住居跡(第29図3)		2	4次第29号住居跡(第37図2)
	7	4次第26号住居跡(第29図4)		3	4次第29号住居跡(第37図3)
	8	4次第26号住居跡(第29図10)		4	4次第29号住居跡(第37図5)
図版44	1	4次第26号住居跡(第29図11)		5	4次第29号住居跡(第37図6)
	2	4次第26号住居跡(第29図12)		6	4次第29号住居跡(第37図7)
	3	4次第28号住居跡(第32図2)		7	4次第29号住居跡(第37図11)
	4	4次第28号住居跡(第32図3)		8	4次第29号住居跡(第37図14)
	5	4次第28号住居跡(第32図1)		9	4次第29号住居跡(第37図15)
	6	4次第28号住居跡(第32図4)		10	4次第29号住居跡(第37図16)
	7	4次第28号住居跡(第32図5)		11	4次第29号住居跡(第37図21)
	8	4次第28号住居跡(第32図7)	図版50	1	4次第29号住居跡(第37図17)
	9	4次第28号住居跡(第32図8)		2	4次第29号住居跡(第37図18)
	10	4次第28号住居跡(第32図9)		3	4次第29号住居跡(第37図23)
図版45	1	4次第28号住居跡(第33図21)		4	4次第29号住居跡(第37図22)
	2	4次第28号住居跡(第33図22)		5	4次第29号住居跡(第38図26)
	3	4次第28号住居跡(第33図23)		6	4次第29号住居跡(第38図27)
	4	4次第28号住居跡(第32図10)		7	4次第31号住居跡(第41図2)
	5	4次第28号住居跡(第32図11)		8	4次第31号住居跡(第41図3)
	6	4次第28号住居跡(第32図12)	図版51	1	4次第29号住居跡(第37図24)

	2	4次第31号住居跡(第41図5)	図版56	1	5次第43号住居跡(第48図7)
	3	4次第31号住居跡(第41図4)		2	5次第58号住居跡(第53図1)
	4	4次第31号住居跡(第41図6)		3	5次第58号住居跡(第53図5)
	5	4次第31号住居跡(第41図7)		4	5次第58号住居跡(第53図2)
	6	4次第31号住居跡(第41図9)		5	5次第58号住居跡(第53図7)
	7	4次第31号住居跡(第41図11)		6	5次第58号住居跡(第53図8)
	8	4次第31号住居跡(第41図18)	図版57	1	5次第58号住居跡(第53図11)
図版52	1	4次第31号住居跡(第41図8)		2	5次第58号住居跡(第53図9)
	2	4次第31号住居跡(第41図10)		3	5次第58号住居跡(第53図10)
	3	4次第31号住居跡(第41図12)		4	5次第63号土壌(第54図10)
	4	4次第31号住居跡(第41図16)		5	5次第63号土壌(第54図1)
	5	4次第31号住居跡(第41図17)		6	5次第63号土壌(第54図5)
	6	4次第31号住居跡(第42図22)	図版58	1	5次第63号土壌(第54図2)
	7	4次第31号住居跡(第42図24)		2	5次第63号土壌(第54図3)
	8	5次第4号住居跡(第45図1)		3	5次第63号土壌(第54図9)
	9	5次第4号住居跡(第45図2)		4	5次第63号土壌(第54図11)
図版53	1	5次第4号住居跡(第45図5)		5	5次第63号土壌(第54図12)
	2	5次第4号住居跡(第45図6)		6	3次第8号土壌(第55図1)
	3	5次第4号住居跡(第45図9)	図版59	1	4次遺構外(第56図1)
	4	5次第4号住居跡(第45図7)		2	5次遺構外(第56図4)
	5	5次第4号住居跡(第45図8)		3	5次遺構外(第56図15)
	6	5次第4号住居跡(第45図11)		4	4次遺構外(第56図17)
	7	5次第4号住居跡(第45図12)		5	4次遺構外(第56図18)
	8	5次第4号住居跡(第45図13)		6	4次遺構外(第56図19)
	9	5次第4号住居跡(第45図16)		7	5次遺構外(第56図10)
図版54	1	5次第4号住居跡(第45図14)		8	4次遺構外(第56図21)
	2	5次第4号住居跡(第45図18)		9	4次遺構外(第56図22)
	3	5次第4号住居跡(第45図19)	図版60	1	4次第1号住居跡(第58図3)
	4	5次第4号住居跡(第45図20)		2	4次第1号住居跡(第58図11)
	5	5次第4号住居跡(第45図21)		3	4次第2号住居跡(第59図2)
	6	5次第4号住居跡(第45図22)		4	4次第2号住居跡(第59図5)
	7	5次第4号住居跡(第46図23)		5	4次第3号住居跡(第60図3)
	8	5次第4号住居跡(第46図24)		6	4次第3号住居跡(第60図4)
図版55	1	5次第4号住居跡(第46図25)		7	4次第3号住居跡(第60図6)
	2	5次第4号住居跡(第46図26)		8	4次第4号住居跡(第62図18)
	3	5次第41号住居跡(第47図1)	図版61	1	4次第4号住居跡(第62図1)
	4	5次第41号住居跡(第47図3)		2	4次第4号住居跡(第62図13)
	5	5次第43号住居跡(第48図5)		3	4次第4号住居跡(第62図14)

- 4 4次第4号住居跡(第62図15)
 5 4次第5号住居跡(第64図5)
 6 4次第5号住居跡(第64図6)
 7 4次第5号住居跡(第64図7)
 図版62 1 4次第8号住居跡(第68図1)
 2 4次第8号住居跡(第68図2)
 3 4次第8号住居跡(第68図11)
 4 4次第8号住居跡(第68図16)
 5 4次第9号住居跡(第70図1)
 6 4次第10号住居跡(第71図8)
 7 4次第11号住居跡(第73図7)
 8 4次第11号住居跡(第73図8)
 9 4次第11号住居跡(第73図9)
 10 4次第11号住居跡(第73図17)
 図版63 1 4次第12号住居跡(第74図3)
 2 4次第12号住居跡(第74図4)
 3 4次第12号住居跡(第74図5)
 4 4次第12号住居跡(第74図6)
 5 4次第12号住居跡(第74図7)
 6 4次第12号住居跡(第75図11)
 7 4次第12号住居跡(第75図12)
 8 4次第13号住居跡(第76図1)
 9 4次第14号住居跡(第77図3)
 10 4次第16号住居跡(第78図7)
 図版64 1 4次第16号住居跡(第78図3)
 2 4次第17号住居跡(第81図1)
 3 4次第17号住居跡掘り方(第81図2)
 4 4次第17号住居跡(第81図3)
 5 4次第17号住居跡(第81図4)
 6 4次第17号住居跡(第81図5)
 7 4次第17号住居跡(第81図14)
 8 4次第17号住居跡(第81図15)
 9 4次第17号住居跡(第81図19)
 10 4次第8・17号住居跡(第81図23)
 図版65 1 4次第17号住居跡(第81図24)
 2 4次第17号住居跡(第81図33)
 3 4次第19号住居跡(第84図3)
 4 4次第19号住居跡(第84図4)

- 5 4次第19号住居跡(第84図5)
 6 4次第19号住居跡(第84図8)
 7 4次第21号住居跡(第86図1)
 8 4次第23号住居跡(第89図1)
 図版66 1 4次第23号住居跡(第89図5)
 2 4次第23号住居跡(第89図7)
 3 4次第23号住居跡(第89図8)
 4 4次第23号住居跡(第89図9)
 5 4次第23号住居跡(第89図11)
 6 4次第23号住居跡(第89図14)
 7 4次第25号住居跡(第90図1)
 8 4次第33号住居跡(第92図6)
 9 4次第34号住居跡(第93図1)
 図版67 1 4次第34号住居跡(第93図3)
 2 4次第34号住居跡(第93図7)
 3 5次第1号住居跡(第94図1)
 4 5次第5号住居跡(第97図1)
 5 5次第5号住居跡(第97図3)
 6 5次第5号住居跡(第97図8)
 7 5次第9号住居跡(第101図2)
 8 5次第10号住居跡(第102図1)
 9 5次第10号住居跡(第102図2)
 10 5次第11号住居跡(第103図2)
 図版68 1 5次第11号住居跡(第103図6)
 2 5次第11号住居跡(第103図7)
 3 5次第12号住居跡(第104図1)
 4 5次第12号住居跡(第104図5)
 5 5次第12号住居跡(第104図6)
 6 5次第12号住居跡(第105図9)
 7 5次第13号住居跡(第106図10)
 8 5次第13号住居跡(第106図14)
 図版69 1 5次第17号住居跡(第109図2)
 2 5次第18号住居跡(第110図2)
 3 5次第18号住居跡(第110図3)
 4 5次第19号住居跡(第111図1)
 5 5次第19号住居跡(第111図2)
 6 5次第20号住居跡(第112図1)
 7 5次第20号住居跡(第112図3)

- | | | | | | |
|------|----|--------------------|------|----|---------------------|
| | 8 | 5次第20号住居跡(第112図7) | | 3 | 5次第8号掘立柱建物跡(第182図1) |
| | 9 | 5次第22号住居跡(第114図1) | | 4 | 5次第8号掘立柱建物跡(第182図2) |
| 図版70 | 1 | 5次第22号住居跡(第114図2) | | 5 | 大型円形土壌(第200図14) |
| | 2 | 5次第22号住居跡(第114図3) | | 6 | 大型円形土壌(第200図5) |
| | 3 | 5次第22号住居跡(第114図6) | | 7 | 大型円形土壌(第200図18) |
| | 4 | 5次第22号住居跡(第114図7) | | 8 | 大型円形土壌(第200図19) |
| | 5 | 5次第23号住居跡(第115図1) | | 9 | 大型円形土壌(第200図20) |
| | 6 | 5次第23号住居跡(第115図4) | 図版75 | 1 | 大型円形土壌(第200図23) |
| | 7 | 5次第23号住居跡(第115図7) | | 2 | 大型円形土壌(第200図25) |
| | 8 | 5次第23号住居跡(第115図17) | | 3 | 大型円形土壌(第200図26) |
| | 9 | 5次第23号住居跡(第115図18) | | 4 | 大型円形土壌(第200図27) |
| | 10 | 5次第23号住居跡(第115図19) | | 5 | 大型円形土壌(第200図29) |
| 図版71 | 1 | 5次第26号住居跡(第117図2) | | 6 | 大型円形土壌(第201図30) |
| | 2 | 5次第26号住居跡(第117図6) | | 7 | 大型円形土壌(第201図41) |
| | 3 | 5次第26号住居跡(第117図8) | | 8 | 大型円形土壌(第201図42) |
| | 4 | 5次第26号住居跡(第117図10) | | 9 | 大型円形土壌(第201図43) |
| | 5 | 5次第26号住居跡(第117図13) | | 10 | 大型円形土壌(第201図48) |
| | 6 | 5次第26号住居跡(第117図16) | 図版76 | 1 | 大型円形土壌(第201図50) |
| | 7 | 5次第26号住居跡(第118図20) | | 2 | 大型円形土壌(第201図52) |
| | 8 | 5次第26号住居跡(第118図23) | | 3 | 大型円形土壌(第201図59) |
| 図版72 | 1 | 5次第26号住居跡(第118図25) | | 4 | 大型円形土壌(第201図60) |
| | 2 | 5次第27号住居跡(第119図1) | | 5 | 大型円形土壌(第201図61) |
| | 3 | 5次第27号住居跡(第119図2) | | 6 | 大型円形土壌(第201図62) |
| | 4 | 5次第27号住居跡(第119図5) | | 7 | 大型円形土壌(第201図64) |
| | 5 | 5次第33号住居跡(第123図3) | | 8 | 大型円形土壌(第201図65) |
| | 6 | 5次第33号住居跡(第123図4) | | 9 | 大型円形土壌(第201図66) |
| 図版73 | 1 | 5次第33号住居跡(第123図7) | | 10 | 大型円形土壌(第202図73) |
| | 2 | 5次第35号住居跡(第125図4) | 図版77 | 1 | 大型円形土壌(第202図81) |
| | 3 | 5次第36号住居跡(第126図1) | | 2 | 大型円形土壌(第202図84) |
| | 4 | 5次第38号住居跡(第128図3) | | 3 | 大型円形土壌(第202図89) |
| | 5 | 5次第38号住居跡(第128図4) | | 4 | 大型円形土壌(第202図83) |
| | 6 | 5次第42号住居跡(第131図5) | | 5 | 5次第36号土壌(第205図4) |
| | 7 | 5次第42号住居跡(第131図6) | | 6 | 4次第12号土壌(第215図5) |
| | 8 | 5次第42号住居跡(第131図7) | | 7 | 5次第16号土壌(第207図7) |
| | 9 | 5次第42号住居跡(第131図8) | | 8 | 5次第16号土壌(第207図8) |
| | 10 | 5次第42号住居跡(第131図14) | | 9 | 5次第16号土壌(第207図14) |
| 図版74 | 1 | 5次第42号住居跡(第131図11) | | 10 | 5次第16号土壌(第207図15) |
| | 2 | 5次第42号住居跡(第131図15) | 図版78 | 1 | 5次第16号土壌(第207図17) |

	2	5次第16号土壤(第207图19)		2	3次第2号清淤(第246图65)
	3	4次第28号土壤(第215图6)		3	3次第2号清淤(第246图68)
	4	5次第62号土壤(第215图14)		4	3次第2号清淤(第246图69)
	5	4次第5号井戸跡(第218图23)		5	3次第2号清淤(第246图72)
	6	4次第5号井戸跡(第218图16)		6	3次第2号清淤(第247图79)
	7	火葬墓(第216图1)		7	3次第60号清淤(第248图1)
	8	4次第6号井戸跡(第219图13)		8	3次第60号清淤(第248图2)
図版79	1	4次第6号井戸跡(第219图14)		9	3次第60号清淤(第248图4)
	2	5次第1号井戸跡(第222图1)		10	3次第60号清淤(第248图8)
	3	5次第1号井戸跡(第222图2)	図版84	1	3次第60号清淤(第248图9)
	4	5次第1号井戸跡(第222图3)		2	3次第60号清淤(第248图11)
図版80	1	5次第1号井戸跡(第222图4)		3	3次第60号清淤(第248图12)
	2	5次第1号井戸跡(第223图5)		4	3次第60号清淤(第248图13)
	3	5次第1号井戸跡(第223图7)		5	3次第60号清淤(第248图14)
	4	5次第1号井戸跡(第223图6)		6	3次第60号清淤(第248图15)
	5	5次第1号井戸跡(第223图8)		7	3次第60号清淤(第248图16)
	6	5次第1号井戸跡(第224图9)		8	3次第60号清淤(第248图19)
	7	5次第1号井戸跡(第224图10)		9	4次第4号清淤(第249图1)
図版81	1	5次第1号井戸跡(第224图12)		10	4次第4号清淤(第249图2)
	2	5次第1号井戸跡(第224图13)	図版85	1	4次第4号清淤(第249图3)
	3	5次第1号井戸跡(第224图14)		2	4次第4号清淤(第249图5)
	4	5次第1号井戸跡(第224图15)		3	4次第4号清淤(第249图10)
	5	5次第1号井戸跡(第224图11)		4	4次第4号清淤(第249图13)
	6	5次第1号井戸跡(第224图17)		5	4次第4号清淤(第249图14)
	7	5次第1号井戸跡(第224图20)		6	4次第4号清淤(第249图18)
	8	3次第2号清淤(第245图7)		7	4次第4号清淤(第249图19)
	9	3次第2号清淤(第245图19)		8	4次第4号清淤(第249图15)
図版82	1	3次第2号清淤(第245图22)		9	4次第4号清淤(第249图22)
	2	3次第2号清淤(第245图26)		10	4次第4号清淤(第249图25)
	3	3次第2号清淤(第245图35)	図版86	1	4次第4号清淤(第249图20)
	4	3次第2号清淤(第245图37)		2	5次第3号清淤(第250图11)
	5	3次第2号清淤(第246图47)		3	5次第3号清淤(第250图18)
	6	3次第2号清淤(第246图48)		4	5次第3号清淤(第250图21)
	7	3次第2号清淤(第246图50)		5	5次第3号清淤(第250图22)
	8	3次第2号清淤(第246图54)		6	5次第3号清淤(第251图35)
	9	3次第2号清淤(第246图56)		7	5次第3号清淤(第251图46)
	10	3次第2号清淤(第246图57)		8	5次第3号清淤(第251图51)
図版83	1	3次第2号清淤(第246图58)		9	5次第3号清淤(第251图56)

- 10 5次第5号溝跡(第253図7)
 11 5次第5号溝跡(第253図8)
 図版87 1 5次第5号溝跡(第253図10)
 2 5次第5号溝跡(第253図15)
 3 5次第5号溝跡(第253図20)
 4 5次第5号溝跡(第253図22)
 5 5次第5号溝跡(第253図24)
 6 5次第5号溝跡(第253図28)
 7 5次第5号溝跡(第253図39)
 8 5次第5号溝跡(第254図41)
 9 5次第5号溝跡(第254図46)
 10 5次第5号溝跡(第254図65)
 図版88 1 5次第5号溝跡(第254図71)
 2 5次第5号溝跡(第255図108)
 3 5次第5号溝跡(第255図109)
 4 5次第5号溝跡(第255図80)
 5 5次第5号溝跡(第256図121)
 6 5次第5号溝跡(第255図82)
 7 5次第5号溝跡(第257図133)
 8 5次第5号溝跡(第257図146)
 9 5次第5号溝跡(第258図149)
 10 5次第9号溝跡(第259図13)
 図版89 1 5次第5号溝跡(第258図150)
 2 5次第27号溝跡(第259図14)
 3 5次第101号溝跡(第259図19)
 4 3次第12号溝跡(第263図3)
 5 3次第74号溝跡(第263図22)
 6 3次第65号溝跡(第263図20)
 7 4次第19号溝跡(第263図26)
 図版90 1 土器片集積遺構(第277図10)
 2 土器片集積遺構(第277図11)
 3 4次H-9グリッドP11(第278図6)
 4 4次I-7グリッドP10(第278図7)
 5 4次J-8グリッドP7(第278図19)
 6 遺構外(第281図85)
 7 遺構外(第279図1)
 8 遺構外(第279図13)
 9 遺構外(第279図15)

- 10 遺構外(第279図16)
 11 遺構外(第279図24)
 図版91 1 灰釉陶器
 2 墨書土器
 図版92 1 墨書土器
 2 金属製品
 図版93 1 石製品・土埴
 2 紡錘車
 3 石製品
 4 石製品接合写真
 5 カマド支脚
 6 編物石(1)
 7 編物石(2)
 8 埴輪・瓦・石製品
 図版94 1 近世遺物
 2 近世遺物
 図版95 1 石臼(第290図8～10)
 2 石臼(第290図11)
 3 石臼(第290図12)
 4 近世石製品(第289図1)
 5 近世石製品(第289図2・3・6・7)
 6 石臼(第289図4)
 7 石臼(第289図5)

戸森前遺跡

- 図版96 1 3次調査区全景
 2 3次調査区全景
 3 3次調査区西端全景
 4 3次第1号住居跡
 5 3次第2号住居跡
 6 3次第7号住居跡
 7 5次第8号住居跡
 8 浅間山B軽石層降下面
 図版97 1 3次西端土層断面
 2 河川跡
 3 河川跡
 4 河川跡木製品出土状況
 5 河川跡木製品出土状況
 6 河川跡木製品出土状況

- | | | | | | |
|------|---|-------------------|-------|---|--------------|
| | 7 | 河川跡木製品出土状況 | | 6 | 河川跡(第305図14) |
| | 8 | 河川跡流木出土状況 | | 7 | 河川跡(第305図6) |
| 図版98 | 1 | 縄文土器(第293図1~3) | | 8 | 河川跡(第305図13) |
| | 2 | 3次第1号住居跡(第294図1) | 図版100 | 1 | 河川跡(第305図15) |
| | 3 | 3次第2号住居跡(第296図1) | | 2 | 河川跡(第305図17) |
| | 4 | 3次第7号住居跡(第298図3) | | 3 | 河川跡(第305図18) |
| | 5 | 3次第7号住居跡(第298図1) | | 4 | 河川跡(第305図19) |
| | 6 | 3次第7号住居跡(第298図4) | | 5 | 河川跡(第306図33) |
| | 7 | 3次第8号住居跡(第300図9) | | 6 | 河川跡(第305図21) |
| | 8 | 3次第8号住居跡(第300図13) | | 7 | 河川跡(第305図22) |
| 図版99 | 1 | 3次第8号住居跡(第300図1) | | 8 | 河川跡(第305図27) |
| | 2 | 3次第8号住居跡(第300図5) | | 9 | 河川跡(第306図34) |
| | 3 | 河川跡(第305図4) | 図版101 | | 河川跡出土木製品 |
| | 4 | 河川跡(第305図7) | 図版102 | | 河川跡出土木製品 |
| | 5 | 河川跡(第305図5) | | | |

I 発掘調査の概要

1. 発掘調査に至る経過

埼玉県では、洪水による水害防止や近年の想定を超える集中豪雨による都市部での水害・土砂災害等を軽減し、誰もが安心・安全に暮らせる県土を実現するため、河川改修や下水道雨水幹線、調整池の整備等を進めている。

埼玉県教育局市町村支援部生涯学習文化財課では、こうした公共開発事業に係る埋蔵文化財の保護について、従前より関係部局と事前協議を重ね、調整を図ってきたところである。

当該事業の実施に先立ち、埼玉県県土整備部熊谷県土整備事務所長から平成18年11月10日付け熊整第1083号で、文化財の所在及び取扱いについて、生涯学習文化財課長あてに照会があった。

これに対して生涯学習文化財課では、平成18年11月13～17日・20日に試掘調査を実施した。その結果、埋蔵文化財の所在が明確になったことから、平成18年12月13日付け教生文第2004号で次の内容の回答を行った。

1 埋蔵文化財の所在

工事予定地内には、次の埋蔵文化財が存在します。

名称 (NO)	種 別	時代	所在地	員数
皿沼西遺跡 (No 60—143)	集落跡	縄文 古墳 奈良 平安	深谷市上敷免 地内	1
戸森前遺跡 (No 60—144)	集落跡	古墳 奈良 平安	深谷市西島地 内	1

2 法手続

工事予定地内には上記の埋蔵文化財包蔵地が存在しますので、工事着手に先立ち、文化財保護法第94条の規定による発掘通知を提出してください。

3 取扱い

別図（省略）の赤塗範囲については、工事計画上やむを得ず現状を変更する場合には、事前に記録保存のための発掘調査を実施してください。

また、青塗範囲については、工事に着手して差し支えありませんが、工事中新たに埋蔵文化財を発見した場合には、その取扱いについて当課と別途協議してください。

熊谷県土整備事務所と生涯学習文化財課は、その取扱いについて協議を重ねたが、現状保存が困難であることから記録保存の措置を講ずることになった。

記録保存のための発掘調査については、熊谷県土整備事務所、生涯学習文化財課の二者で調査計画等について協議し、財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団が記録保存のための発掘調査を実施した。

文化財保護法第94第1項の規定による埋蔵文化財発掘通知に対する勧告、文化財保護法第92条1項の規定による発掘調査届に対する指示通知は次のとおりである。

発掘通知に対する勧告：

平成19年2月5日付け 教生文第4—1148号

発掘調査届に対する指示通知：

平成19年4月18日付け 教生文第2—1号

平成19年4月18日付け 教生文第2—2号

平成20年9月29日付け 教生文第2—49号

平成21年12月2日付け 教生文第2—55号

(生涯学習文化財課)

2. 発掘調査・報告書作成の経過

(1) 発掘調査

皿沼西遺跡・戸森前遺跡の発掘調査は、平成18年度から22年度にかけて行った。平成18年度は、皿沼西遺跡第2次調査と戸森前遺跡第3次調査、平成19年度は、皿沼西遺跡第3次調査と戸森前遺跡第4次調査、平成20年度は、皿沼西遺跡第4次調査、平成21年度は、皿沼西遺跡第5次調査を行った。

年度ごとの調査期間は、平成18年度が、平成19年2月1日から19年3月24日までの2か月間、平成19年度が、平成19年4月1日から19年7月31日までの4か月間、平成20年度が、平成20年10月1日から平成21年3月27日までの6か月間、平成21年度が、平成21年9月28日から平成22年3月24日までの6か月間であり、延べ18か月間実施した。調査面積は、皿沼西遺跡・戸森前遺跡あわせて28,920㎡である。

皿沼西遺跡 (第2・3次調査)

戸森前遺跡 (第3・4次調査)

平成18年度から平成19年度にかけて行った。皿沼西遺跡と戸森前遺跡は、隣接する調査区のため、同時に進めた。1月から事務手続き等の準備を開始し、2月から順次碎石敷設工事および事務所設置工事を行った。発掘調査事務所は、皿沼西

遺跡第5次調査区に設置した。また、調査区の保護と安全確保のため、囲柵工事を実施し、重機による表土除去作業を開始した。

遺構実測作業のための基準点測量、およびグリッド杭打設作業は、2月23日から実施した。

表土除去後、人力による遺構確認作業を行ったところ、天仁元年(1108年)に浅間山から噴出した火山灰(浅間山B軽石)層が存在していることがわかった。そこで、この火山灰層を除去すると、その下に島の畝間溝跡が広がっていた。遺構の精査が終わると、直ちに土層断面図、平面図等を作成し、写真撮影等の記録作業を行った。

つぎに、重機でこの旧耕作土を削り、人力で遺構確認を行うと、調査区の北側に溝や大型円形土壕、火葬墓、土壕等を検出した。さっそく土層断面図、平面図等を作成した。大型円形土壕の周囲は、遺物が多数出土したので詳細な遺物分布図を作成した。

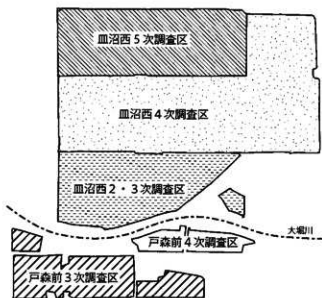
航空機による空中写真撮影は、平成19年3月19日と6月8日に実施した。記録作業は、平成19年7月30日までに終了し、31日には事務所の撤去、および事務手続きを行い、すべての作業を完了した。

皿沼西遺跡 (第4次調査)

平成20年10月から重機による表土除去作業を開始した。基準点測量、グリッド杭打設作業は、10月16日から実施した。

表土除去後、人力による遺構確認作業を行ったところ、調査区の中央から西側にかけて、竪穴住居跡、掘立柱建物跡、土壕、井戸跡、溝跡等を検出し、東側は、溝跡のほか、島の畝間溝跡群を検出した。遺構については精査を行い、土層断面図、平面図、写真撮影等の記録を行った。なお、出土遺物の豊富な遺構については、出土状態図の作成も行った。

また、古墳時代の遺構は、遺構確認面がさらに



第1図 調査回数と調査区

深いため、平成21年1月から再び掘削作業を行い、その後、人力による遺構確認作業を行った。竪穴住居跡、小穴などを検出し、精査を行った後、同様の記録作業を行った。

航空機による写真撮影を平成20年12月12日と、平成21年2月26日に実施した。記録作業は、3月23日までに終了し、24日には事務所の撤去、および事務手続き等を行い、すべての作業を完了した。

皿沼西遺跡（第5次調査）

平成21年9月28日から重機による表土掘削作業を開始した。基準点測量、グリッド杭打設作業は、10月20日から実施した。

表土除去後、人力による遺構確認作業を行ったところ、調査区の全体に竪穴住居跡、掘立柱建物跡、土城、井戸跡、溝跡等を検出した。そこで、遺構について精査を行い、土層断面図、平面図、遺物出土状態図、写真撮影等の記録を行った。また、平安時代の遺構については、液状化現象の痕跡との前後関係がわかるような記録を残した。

さらに、第4次調査同様、古墳時代の遺構を調査するため、平成22年1月から再び掘削作業を行い、その後、人力による遺構確認作業を行った。竪穴住居跡を検出し、精査を行った後、同様の記録を残した。

航空機による写真撮影を平成22年1月27日と、3月3日に実施した。

第5次調査の記録作業は、3月23日までに終了し、24日には事務所の撤去および事務手続き等を行い、すべての作業を完了した。

(2) 整理・報告書の作成

皿沼西遺跡・戸森前遺跡の整理作業は、平成22年度（平成22年7月1日～平成23年3月31日）、平成23年度（平成23年7月1日～平成24年3月31日）の1年6ヶ月実施した。

平成22年度

作業はまず、出土遺物の水洗い、出土地点の注記作業の後、遺構ごとに接合、欠損部分を石膏で補填する作業を行った。接合、復元作業の終了した遺構から順次実測用遺物や拓本用遺物を分類・抽出し、遺物実測を開始した。遺物実測には、オルソ・イメージャー（正距離投影機）と3スペース（三次元計測機）を用い、作業の迅速化を図った。また、あわせて選別した土器の断面実測や拓本作業を行い、終了した遺物から順次トレース作業を行った。

遺構図面の整理作業は、遺物作業に並行して行った。まず、各種図面を整理した後、平面図と土層断面図を組み合わせた第二原図を作成し、それをもとに遺構図版の版下作成作業に着手した。3月から第二原図をスキャナーでコンピューターに取り込み、専用ソフトを用いて電子トレースを行った後、土層説明等の入力データと組み合わせて版下データを作成した。

平成23年度

7月から接合・復元作業、遺物実測作業、遺構図のトレース作業を再開した。実測遺物のトレース作業は8月から開始し、完成した遺構ごとにトレース図をスキャナーで取り込み、遺構図とともにコンピューターで編集して挿図とした。

また、抽出した資料は写真撮影し、発掘調査時の遺構写真とともに写真図版の版下とした。なお、口絵用の高精度の写真は、委託して行った。

12月半ばから図面・写真・本文の割り付け作業と原稿執筆を進め、1月半ばに印刷業者を選定して入稿した。また、遺物や図版・写真等の記録類を分類整理し、報告書との対照が可能な状態で収納作業を行った。

印刷原稿の校成は3回行い、平成24年3月末に報告書を刊行した。

3. 発掘調査・報告書作成の組織

平成18年度（発掘調査）

理 事 長	福 田 陽 充	調 査 部	
常務理事兼総務部長	保 永 清 光	調 査 部 長	今 泉 泰 之
総務部		調 査 部 副 部 長	小 野 美代子
総 務 部 副 部 長	昼 間 孝 志	調 査 第 二 課 長	細 田 勝
総 務 課 長	高 橋 義 和	主 査	田 中 広 明
		主 任	渡 辺 清 志

平成19年度（発掘調査）

理 事 長	刈 部 博	調 査 部	
常務理事兼総務部長	岸 本 洋 一	調 査 部 長	村 田 健 二
総務部		調 査 部 副 部 長	磯 崎 一
総 務 部 副 部 長	昼 間 孝 志	調 査 第 二 課 長	細 田 勝
総 務 課 長	松 盛 孝	主 査	山 本 禎 明
		主 査	田 中 広 明

平成20年度（発掘調査）

理 事 長	刈 部 博	調 査 部	
常務理事兼総務部長	萩 元 信 隆	調 査 部 長	村 田 健 二
総務部		調 査 部 副 部 長	磯 崎 一
総 務 部 副 部 長	昼 間 孝 志	調 査 第 二 課 長	細 田 勝
総 務 課 長	松 盛 孝	主 査	赤 熊 浩 一
		主 査	山 本 靖
		主 査	大 屋 道 則
		主 事	坂 田 敏 行

平成21年度（発掘調査）

理 事 長	刈 部 博	調 査 部	
常務理事兼総務部長	萩 元 信 隆	調 査 部 長	小 野 美代子
総務部		調 査 部 副 部 長	磯 崎 一
総 務 部 副 部 長	昼 間 孝 志	調 査 第 二 課 長	細 田 勝
総 務 課 長	田 中 雅 人	主 査	田 中 広 明
		主 事	大 和 田 瞳 介
		主 事	岡 田 勇 介

平成22年度（報告書作成）

理 事 長 藤 野 龍 宏
 常務理事兼総務部長 萩 元 信 隆
 総務部
 総 務 部 副 部 長 金 子 直 行
 総 務 課 長 田 中 雅 人

調査部

調 査 部 長 小 野 美代子
 調 査 部 副 部 長 昼 間 孝 志
 整 理 第 二 課 長 宮 井 英 一
 主 査 大 谷 徹
 主 査 田 中 広 明

平成23年度（報告書作成）

理 事 長 藤 野 龍 宏
 常務理事兼総務部長 根 本 勝
 総務部
 総 務 部 副 部 長 金 子 直 行
 総 務 課 長 矢 島 将 和

調査部

調 査 部 長 小 野 美代子
 調 査 部 副 部 長 鯛 持 和 夫
 整 理 第 二 課 長 赤 熊 浩 一
 主 査 木 戸 春 夫
 主 査 田 中 広 明

II 遺跡の立地と環境

1. 地理的環境

皿沼西遺跡(1)は(以下、カッコ孤付番号は、第4図の番号と一致)埼玉県深谷市上敷免皿沼、戸森前遺跡(2)は同県同市西島字外谷田に所在する。

深谷市は、埼玉県の北部中央に位置し、東と南は熊谷市、西は本庄市、北は利根川を隔てて群馬県伊勢崎市と接している。近年、岡部町、花園町、川本町と合併し、市域が広がり、面積138.41km²人口147,383人となった。市の中央を東西にJR高崎線が走り、国道17号や同深谷バイパスも並走する。

こうした交通網は、首都東京への通勤、流通の大動脈であり、近年、富にその付加価値が高まってきた。かつての深谷市は、城山三郎が、「関東平野のふところ深く、ところどころ木立があるだけの広々とした農村で、遠く赤城、榛名、妙義の山々や、晴れた日には浅間や日光の男体山も見渡せる。武蔵国というより、上州に近い感じで、秋

から冬にかけては、名物のからっ風も強い。」「(『雄気堂々』)と表現した土地柄であったが、一面の桑畑と水田は消え、かわりに工場や住宅が増え、都市化の波が急速に押し寄せている。

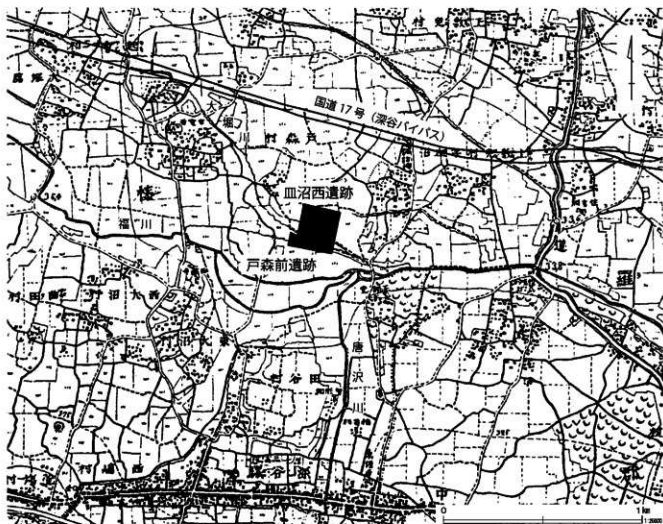
養蚕農家が桑を摘み、春には稲を植え、秋には麦を植えていた水田は、野菜を中心とした商品作物にかわった。「深谷ネギ」は、この地域の特産品である。

さて、皿沼西遺跡と戸森前遺跡は、JR高崎線深谷駅の北方1kmに位置し、大堀川を挟んで北に皿沼西遺跡、南に戸森前遺跡が存在する。両遺跡は、小山川や福川、利根川が形成した自然堤防上に立地する遺跡である。標高は、35mである。

ところで、深谷市の地形は、南側に北武蔵台地から続く櫛挽^{くしびき}台地、北側に利根川、小山川、福川、唐沢川等の形成した妻沼低地^{めぬま}が広がる。櫛引台地は、荒川によって作られた古い扇状地が、浸食作用を受けてできた沖積台地である。また、妻沼低



第2図 埼玉の地形



第3図 陸軍測地部の退潮図と血沼西・戸森前遺跡

地は、利根川の形成した自然堤防と沖積低地からなり、加須低地、中川低地とともに埼玉平野を形成している。

櫛引台地と妻沼低地の間には、深谷崖線と呼ばれる比高差5～10mの崖線がある。崖下には、いわゆる「先端湧水」が湧き出る。

現在では、平坦な妻沼低地ではあるが、かつては、三日月湖や後背湿地などが、複雑に入り組む地形であった。熊谷市の別府沼は、最近まで残っていたし、湖沼にかかわる地名も熊谷市妻沼、男沼、柿沼、深谷市の蓮沼、東大沼などがある。血沼西遺跡の東にあった「血沼」もその一つである。

また、自然堤防は、高島、血洗島、内ヶ島、大塚島、矢島など「〇〇島」という地名である。田植えの季節には、あたかも海に浮かぶ島のように見える。

ところで、血沼西遺跡と戸森前遺跡を分ける大堀川は、深谷市矢島付近で小山川から分水し、戸森前遺跡の東端で福川と合流する。大堀川は、小山川の旧流路である。なぜならば、大堀川の旧河床や、血沼西遺跡の自然堤防を構成する基盤層には、小山川水系から運ばれた結晶片岩系鉱物が、堆積しているからである。

しかし、6世紀初め頃、利根川水系の河川が運ぶ安山岩系鉱物が堆積し、旧大堀川を埋没させた。つまり、大堀川は、6世紀初めまで小山川水系の河川、それ以降は利根川水系の河川となる。

なお、現在、血沼西遺跡・戸森前遺跡の東を南から北に向かって一直線に流れる唐沢川は、明治43年(1911)の大洪水を契機として、昭和3年(1927)に開削された放水路である。この川は、櫛

挽台地から湧き出た数条の河川が、高崎線をわたるあたりで合流し、そこから北に向かって流れ、上敷免字東本郷で小山川と合流する。

明治17年(1885)、陸軍測地部が作成した迅速図の「深谷驛」(第3図)によると、福川、大堀川、唐沢川が合流して東へ向かって流れていた。合流地点付近は、大沼や皿沼と呼ばれる湖沼であり、起伏にとんだ地形であったことがわかる。

2. 歴史的環境

ここでは、皿沼西遺跡・戸森前遺跡にかかわる縄文時代、弥生時代、古墳時代、奈良・平安時代、江戸時代について、深谷市を中心とした歴史的環境を概観する。

(1) 縄文時代

妻沼低地では、縄文時代前期以降、集落遺跡がみられる。堀南遺跡から縄文時代前期の諸磯b式土器の出土があるからである。このことは、縄文時代前期までに自然堤防の形成が安定し、人々の居住域が、低地域へ拡大したと考えられる。

縄文時代中期の集落は、明確ではないが、後期から晩期にかけては、多数の集落遺跡が、営まれた。新屋敷東遺跡(52)や堀東遺跡(10)では、竪穴住居跡や土壇を檢出し、翡翠製の玉類をはじめとする石器、石製品が出土した。また、滝下遺跡(87)では、大量の土器とともに土偶や石棒が出土した。

さらに、深谷町遺跡(23)では、縄文時代中・後期の河川跡が発見され、漆塗りの柄杓が出土した。さらに、上敷免遺跡(54)では、河川跡から出土した縄文時代後・晩期の土器の中に、東海系条痕文系土器や北部九州とかかわる遠賀川系土器の壺が発見されている。

(2) 弥生時代

縄文時代後・晩期の遺跡と比べると、弥生時代の遺跡は乏しい。しかし近年、わずかながら、その資料は増加している。上敷免遺跡(54)では、弥

生時代中期の再葬墓とやや時期の下る竪穴住居跡が、同一の自然堤防上に確認された。弥生時代の再葬墓は、四十坂遺跡(82)、熊谷市飯塚南遺跡(144)・横間栗遺跡(132)などでも発見された。

(3) 古墳時代

古墳時代に入ると、遺跡は増加する。とくに古墳時代前期、東海系の「S」字状口縁台付甕を伴った集落の出現は甚だしい。戸森前遺跡でも古墳時代前期の竪穴住居跡がみられ、河川跡の川底からも「S」字状口縁台付甕を含む古墳時代前期の土器や木器が出土している。

妻沼低地の古墳時代前期の遺跡を列挙すると、深谷市本郷前東遺跡(53)・上敷免遺跡(54)・根絡遺跡(43)・清水上遺跡(44)・明戸東遺跡(49)・戸森松原遺跡(28)・矢島南遺跡(7)・東川端遺跡(47)等である。

ところで、古墳時代前期に遡る大型古墳は、妻沼低地ではみられない。わずかに上敷免遺跡(54)や東川端遺跡(47)で、底部穿孔甕を出土した円墳や方形周溝墓がみられるだけである。

古墳時代前期には、小山川や福川、利根川の流れがさらに安定し、後背湿地や湖沼の周辺が、耕地として開発され、生活の基盤を自然堤防上に求めた集団が、農耕集落を形成したと考えられる。とくに熊谷市北島遺跡では、川底に堰堤を築き、大規模な灌漑水路を構築していた。

その堰堤の骨組みには、自然木が巧みに利用されており、その技術の高さを知ることができる。

古墳時代後期になると、竪穴住居跡にカマドが登場する。カマドは、それまでの炉を遥かに超える燃焼効率で調理が行えた。出現期のカマドを設置した竪穴住居跡が、皿沼西遺跡でも発見された。

出現期のカマドを設けた竪穴住居跡は、他にも深谷市上敷免遺跡(54)や新屋敷東遺跡(52)・城北遺跡(40)・柳町遺跡(36)・起会遺跡(9)・一本木前遺跡(136)等で発見されている。その特徴は、壁外に長い煙道が伸び、クランク状に煙出しが続く。

こうした形状のカマドは、時代とともに変化して、11世紀までみられる。

このカマドの急速な普及は、低地開発の推進とともに古墳時代後期の集落が、飛躍的な展開を遂げることとなった。古墳時代後期の集落跡を水系ごとに上流から列挙するならば、小山川水系は、矢島南遺跡(7)・戸森松原遺跡(28)・上敷免遺跡(54)・上敷免北遺跡(55)・本郷前東遺跡(53)・新屋敷東遺跡(52)・ウツギ内遺跡(33)・砂田遺跡(35)・柳町遺跡(36)・原遺跡(38)などがある。

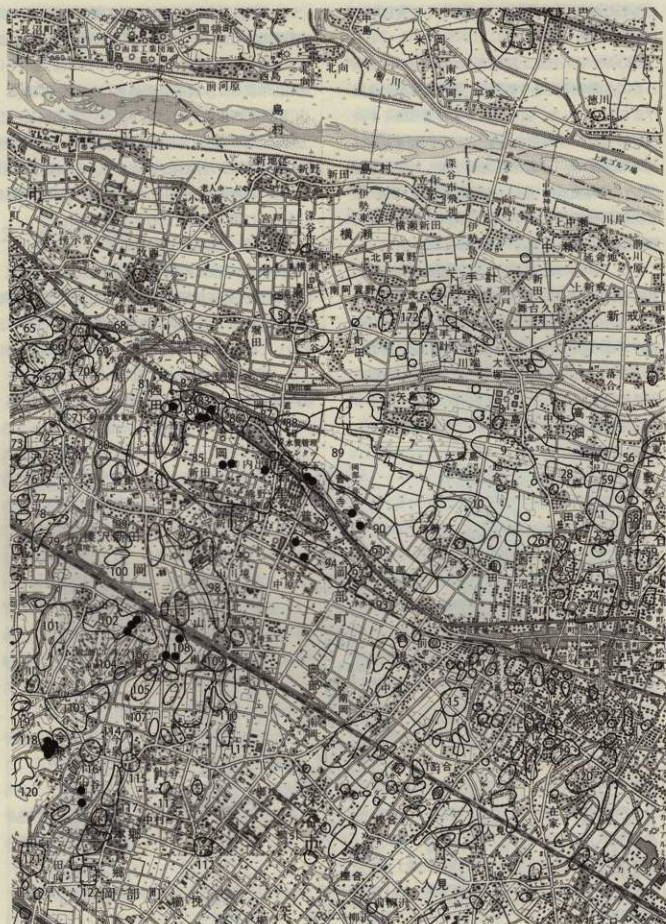
また、福川水系の集落は、城北遺跡(40)・居立遺跡(41)・前遺跡(42)・根結遺跡(43)・東川端遺跡(47)・宮ヶ谷戸遺跡(48)・明戸東遺跡(49)・八日市遺跡(61)・根岸遺跡(64)・砂田前遺跡(88)・関下遺跡(133)・一本木前遺跡(136)・江原遺跡(146)・飯塚北遺跡(148)・妻沼西南遺跡群(143)・妻沼小学校内遺跡(151)・上江袋遺跡(140)などがある。

いっぽう、古墳は、櫛挽台地の縁辺と妻沼低地の自然堤防上に築かれた。櫛挽台地の縁辺では、西から四十坂古墳群(82)・木の本古墳群(62)・別府古墳群(171)・在家(籠原裏)古墳群(170)など、自然堤防上では、西から下手計古墳群(172)・上増田古墳群(49)・飯塚南古墳群(144)・奈良古墳群(168)などの群集墳が築かれた。その埋葬主体部には、利根川や小山川、または荒川水系の川原石を巧みに用いた横穴式石室が構築された。

この地域に大型前方後円墳は少ないが、横ハケの円筒埴輪が出土した横塚山古墳(169)は、5世紀の古墳である。6世紀になると、小山川と福川が沖積地へ開放される深谷市岡付附近に大型古墳が、集中して築かれた。その系譜は、西から東に向かって、寅稻荷塚古墳(84)・浅間山古墳(81)と前方後円墳が続き、最後に方墳の愛宕山古墳(173)が築かれた。

第1表 周辺遺跡一覧

1 里沼西遺跡	38 原遺跡	72 西浦北遺跡	106 西谷遺跡	142 道ヶ谷戸条里遺跡
2 戸森前遺跡	39 増田氏館跡	73 大寄遺跡	107 水久保遺跡	143 妻沼西南遺跡群
3 牧西堀の内遺跡	40 城北遺跡	74 沖田Ⅱ遺跡	108 櫛挽塚古墳	144 飯塚南遺跡・飯塚南古墳群
4 横瀬氏館跡	41 居立遺跡	75 沖田Ⅰ遺跡	109 上杉館跡	145 堀内遺跡
5 滝瀬氏館跡	42 前遺跡	76 宮西遺跡	110 東谷遺跡	146 江原遺跡
6 陣屋跡	43 根結遺跡	77 河辺遺跡	111 北東原遺跡	147 荏原氏館跡
7 矢島南遺跡	44 清水上遺跡	78 東光寺裏遺跡	112 百間堀館跡	148 飯塚北遺跡
8 内ヶ島氏館跡	45 横塚・下郷遺跡	79 伊勢塚遺跡	113 新井館跡	149 飯塚遺跡
9 起合遺跡	46 東方城遺跡	80 新井遺跡	114 堀家添遺跡	150 飯塚古墳群
10 堀家遺跡	47 東川端遺跡	81 浅間山古墳	115 針ヶ谷館跡	151 妻沼小学校内遺跡
11 曲田城跡	48 宮ヶ谷戸遺跡	82 旗ヶ谷Ⅰ・Ⅱ	116 今泉館跡	152 戸永城遺跡
12 島之上遺跡	49 明戸東遺跡・上増田古墳群	83 岡部城跡	117 中村遺跡	153 東久島遺跡
13 前島遺跡	50 新田基遺跡	84 寅稻荷塚古墳	118 長坂聖天塚古墳	154 東久島古墳群
14 人見館跡	51 妻沼遺跡	85 熊野・中宿遺跡	119 川輪聖天塚古墳	155 高林内野遺跡
15 萱場松原遺跡	52 新屋敷東遺跡	86 岡崎寺	120 西河原遺跡	156 高林表場遺跡
16 飯塚遺跡	53 本郷前東遺跡	87 上宿遺跡	121 赤城南遺跡	157 五塚遺跡
17 湖山遺跡	54 上敷免遺跡	88 滝下遺跡	122 本郷聖堂跡	158 高林不動古墳群
18 湖山西遺跡	55 上敷免北遺跡	89 砂田前遺跡	123 在家遺跡	159 高林西原・鶴巻古墳群
19 湖山墳輪郭跡群	56 上敷免森下遺跡	90 岡部六弥太史道館跡	124 五反畑遺跡	160 高林遺跡
20 小台遺跡	57 森下遺跡	91 菅原遺跡	125 玉井陣屋跡	161 下田遺跡
21 松元氏館跡	58 鹿沼東遺跡・鹿沼城跡	92 別府氏館跡	126 別府城遺跡	162 小谷場古墳群
22 深谷町遺跡	59 城西遺跡	93 阿部津津寺陣屋跡	127 堤島遺跡	163 富沢古墳群
23 深谷城遺跡	60 伝幡羅太郎館跡	94 新田・上原遺跡	128 西別府館跡	164 石田川遺跡
24 坂田馬場遺跡	61 八日市遺跡	95 上原古墳	129 西別府祭祀遺跡	165 西田島遺跡
25 花小路遺跡	62 木の本古墳群	96 上原古墳	130 西別府祭祀遺跡	166 安養寺遺跡
26 大沼澤正定館跡	63 戸森松原遺跡	97 新田遺跡	131 横間栗遺跡	167 長楽寺遺跡
27 戸森松原遺跡	64 根岸遺跡	98 下道南遺跡	132 関下遺跡	168 奈良古墳群
28 高森遺跡	65 西五十子大塚遺跡	99 西竜ヶ谷遺跡	133 石田遺跡	169 横塚山古墳
29 新開次郎館跡	66 東五十子赤坂遺跡	100 中宿遺跡	134 別府条里遺跡	170 籠原裏古墳群
30 前前製陶遺跡	67 東五十子遺跡	101 地蔵院遺跡	135 一本木前遺跡	171 別府古墳群
31 陣跡遺跡	68 東五十子城跡遺跡	102 西山古墳群	136 中峠地遺跡	172 下手計古墳群
32 ウツギ内遺跡	69 赤坂墳輪郭跡	103 光寺古墳群	137 西通遺跡	173 愛宕山古墳
33 妻沼氏館跡	70 東五十子	104 岩山瓦窯跡	138 東通遺跡	
34 砂田遺跡	71 北町中遺跡	105 柳原遺跡	139 上江袋遺跡	
35 柳町遺跡			140 勢崎新田遺跡	
36 村東遺跡				



第4図 周辺の遺跡



また、行田市埼玉には・武蔵最大の埼玉古墳群が築かれた。5世紀は・皿沼西遺跡に集落が形成された段階である。

(4) 奈良・平安時代

皿沼西遺跡に再び集落が出現するのは、8世紀第I四半期である。律令制に基づいた地方行政制度が、始動して間もないころである。

深谷市岡に武蔵国榛澤郡、深谷市東方と熊谷市別府に同国幡羅郡の役所(郡家)が整備され、周囲に寺院や祭祀跡・関連集落などが、集中的に設置された。

榛沢郡家には、中宿遺跡(85)〈正倉院〉・熊野遺跡(85)〈館・曹司〉・岡庵寺(85)〈寺院〉・滝下遺跡(87)〈祭祀跡〉・新田・上原遺跡(93)〈関連集落〉、幡羅郡家には、幡羅遺跡(45)〈正倉院・館・曹司〉・西別府祭祀遺跡(131)〈祭祀跡〉・西別府廃寺(130)〈寺院〉・下郷遺跡(45)〈関連集落〉などがある。また、郡家の機能の拡充とともに・郡内の集落の再編成や耕地の班田化が進み、皿沼西遺跡のように新たに出現した集落も少なくない。

水系ごとに列挙するならば、小山川水系では、矢島南遺跡(7)・戸森松原遺跡(28)・上敷免森下遺跡(56)・上敷免遺跡(54)・上敷免北遺跡(55)・本郷前東遺跡(53)・新屋敷東遺跡(52)・砂田遺跡(35)・柳町遺跡(36)などがある。

また、福川水系は、居立遺跡(41)・前遺跡(42)・根絡遺跡(43)・清水上遺跡(44)・東川端遺跡(47)・宮ヶ谷戸遺跡(48)・八日市遺跡(61)・根岸遺跡(64)・滝下遺跡(87)・砂田前遺跡(88)・一本木前遺跡(136)・飯塚北遺跡(148)・妻沼西南遺跡群(143)・道ヶ谷戸条里遺跡(142)・別府条里遺跡(135)などがある。

さらに、撫坂台地の北縁にも集落遺跡が出現した。上宿遺跡(86)・新田遺跡(96)・中南遺跡(99)・新田・上原遺跡(94)・白山遺跡(95)・花小路遺跡(26)・下郷遺跡(45)などがある。

ところで、現在の深谷市域は、榛沢郡・幡羅

郡・男衆郡にまたがり、皿沼西遺跡は、榛沢郡と幡羅郡の境界付近にあたる。『和名類聚抄』高山寺本によると、榛澤郡は、新居・榛澤・膳形・藤田の四郷が記され、東急本では、余戸郷が加わる。また、幡羅郡は、高山寺本に上秦・下秦・廣澤・荏原・幡羅・那珂・霜見の七郷が記され、余戸郷が加わる。

皿沼西遺跡のある深谷市上敷免は、かつての榛澤郡上鋪免村である。同村は、中世の末には、榛澤郡の藤田荘に属していた。『和名類聚抄』段階では、榛澤郡新居郷と幡羅郡幡羅郷のどちらかに属していたと考えられる。現在でも幡羅郷や荏原郷は、深谷市原郷・江原として地名が残る。

つぎに、幡羅郡にかかわる歴史上の出来事をいくつかあげておく。まず、霊龜2年(778)、武蔵国が、東山道から東海道に所管替えとなる。それまで上野国新田郡(太田市)から武蔵国府(東京都府中市)へ向かって、南北に郡内を通っていた東山道武蔵路が廃止された。これによって、沿線住民の役務負担は軽減され、そのエネルギーは、地域開発へと向けられた。

また、大同4年(809)には、陸奥国多賀城へ幡羅郡の米五斗が輸送された。その責任者は、刑部古□(乙)□(正)であった。

その10年後、弘仁9年(818)、坂東諸国を揺るがす大地震が発生した。弘仁の大地震である。その被害は、上野・武蔵・下野・常陸・下総・相模に及び、多数の死者が出たという。とくに「上野境」(埼玉県北部)では、被害が大きく、地震で「水潦」と呼ばれた液状化現象が起こり、人や物に甚大な被害が出た。この地震による液状化現象の痕跡は、遺跡に砂脈となっており、西は滝下遺跡(87)から東は、行田市野の築道下遺跡まで及んだ。

この災害の復興は、なかなか進まなかったらしい。承和元年(834)幡羅郡の「荒苑田」123町が、冷然院に充てられた。国家による復興のテコ入れ

が行われたのである。これとかわるのか、「田夫卅」と書かれた9世紀後半の須恵器が、上敷免遺跡(54)から出土した。田夫は、雇用された農夫であり、かれら30人にかかわる食器という意味かもしれない。

また、幡羅郡の奈良神社(熊谷市奈良)には、日照りのときも枯れない泉があり、数々の霊驗を讃えられ、嘉祥2年(849)官社となった。

9世紀後半、復興が急速に進んだ。施釉陶器を豊富に所有した集落遺跡が、幡羅郡を中心とした地域に登場したのである。熊谷市内の飯塚北遺跡(148)・北島遺跡・諏訪木遺跡・宮町遺跡・下田町遺跡などであり、これらの遺跡には、四面廂付建物と方形区画遺構がみられる。

その後、10世紀まで続くが、11世紀に入ると、熊谷市一本木前遺跡(136)や深谷市宮西遺跡(76)などを除いて、急速に規模が縮小、あるいは途絶した。

なお、深谷市上敷免の地名の由来は、①深谷上杉氏の雑色にかかわる給人免田とする説と、②荘園の負担の一つである雑職を免じた田である雑職免田に由来する説がある。幡羅郡に設置された冷然院領(御院勅旨田)と不可分の関わりがあるとすると、②が相応しい。

(5) 戦国・江戸時代

皿沼西遺跡と戸森前遺跡では、江戸時代の溝や井戸を検出し、また、陶磁器や石造物などが出土した。

まず、皿沼西遺跡のある旧上鋪免村は、戦国期に深谷上杉氏の支配下となる。その重臣、岡谷加賀守香丹の所領となった。香丹は、延徳3年(1491)に皿沼城を築き、後に長子の清秀に城を譲り、曲田城に退老した。徳川家康の江戸入府以降、皿沼城は、酒井讃岐守へ下され、寛文5年(1665)には大久保上野介、貞享年間(1684～1688)には木下某、元禄11年(1698)には前田五右衛門の所領となる。

『新編武蔵風土記稿』の榛澤郡上鋪免村の頃には、小名として「皿沼」があげられる。その註には、「村の南をいふ、當所に古城蹟あり、土居の跡残りて其内は、陸田なり、廣さ七八反、岡谷加賀守の居住せし所と云」と、皿沼城跡(58)のことが記されている。この皿沼城跡は、唐沢川を挟んだ東側、諏訪神社の西側にあたる。現状でもやや高い場所や堀跡を確認できる。

次に、戸森前遺跡のある戸森字外谷戸は、戸森村である。戸森村は、やはり戦国時代、深谷上杉氏の支配下となり、永禄6年(1563)には、岡田五郎左衛門が、越後衆の「あかた某」を取り調べ、具足大小を差し押さえるという事件をおこす。戸森村は、家康の江戸入府以降、幕府領となる。「元禄郷帳」(『国立史料館本』)では、旗本天野領とある。明和7年(1770)、一部が川越藩領となったという(『松平藩日記』)。

深谷市は、関東管領山内上杉氏が、庁鼻和城(深谷城)(24)を居城とし、康応2年(1390)に国済寺を創建した場所である。その後、康正2年(1458)には、深谷城が築かれ、永禄4年(1561)以降、越後の長尾景虎と小田原の後北条氏との間で、帰属が目まぐるしく変わった。そして、天正2年(1574)から北条氏政に帰属した。

皿沼西遺跡や戸森前遺跡の周辺では、皿沼城跡や深谷城跡をはじめとして、横瀬氏館跡(4)・滝瀬氏館跡(5)・内ヶ島氏館跡(8)・曲田城跡(11)・人見館跡(14)・秋元氏館跡(21)・深谷城遺跡(24)・大沼弾正忠館跡(27)・新開荒次郎館跡(30)・蓮沼氏館跡(34)・増田氏館跡(39)・東方城遺跡(46)・伝幡羅太郎館跡(60)・東五十子城跡遺跡(68)・岡部城跡(83)・岡部六弥太志澄館跡(89)・源勝院館跡(91)・阿部摂津寺陣屋跡(92)・上杉館跡(109)・百聞堀館跡(112)・新井館跡(113)・針ヶ谷館跡(115)・今泉館跡(116)・本郷陣屋跡(122)・玉井陣屋跡(125)・別府氏館跡(126)・別府城遺跡(127)・西別府館跡(129)・荏原氏館跡(147)など

多数の城館跡が残されている。

豊臣秀吉が、小田原攻めを行った天正18年(1590)、深谷城は、北条氏邦の鉢形城の支城であった。小田原落城後、徳川家康の江戸入府にあっては、松平康直が深谷城、松平康長が東方城に入府した。その後、酒井忠勝が一万石で入城して深谷藩の成立となる。しかし、寛永4年(1627)、忠勝の転封とともに廃藩となり、以後、複雑に入り組んだ藩領、幕府領、旗本領となった。

江戸時代には、中山道に深谷宿が置かれ、活気にあふれた。また、利根川沿いの中瀬村と高島村に公認の河岸が設けられ、遠くは秩父、信濃方面

から荷駄が集まった。瓦生産は江戸時代から盛んであった。「享保二十年(1735)八月吉日」銘のある新井村瓦屋善左衛門作という鬼瓦が残されている。明治16年(1884)、日本鉄道会社高崎線が開通し、深谷瓦と呼ばれるようになった。

そして明治20年(1888)、血洗島出身の渋沢栄一らによって、上敷免に日本初の洋式レンガ工場である日本煉瓦製造株式会社が設立された。ここで生産されたレンガが、東京駅の駅舎に利用されたことは、あまりにも有名である。

(各遺跡の関連文献は、巻末に記した。)

Ⅲ 皿沼西遺跡（2次～5次）の調査

1. 遺跡の概要

皿沼西遺跡は、深谷市北部に位置する上敷免字皿沼に所在し、JR高崎線深谷駅の北2kmである。

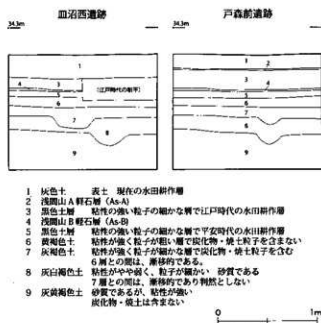
地形的には、妻沼低地の自然堤防上に形成された遺跡である。南には、大堀川が東流し、東には、北流する唐沢川の堤防が迫っているが、北と西には、平地が広がる。もちろん、唐沢川の堤防は、遺跡の形成期には存在しなかった。この堤防は、明治43年（1911）の大洪水をふまえ、昭和3年（1927）、櫛引台地から深谷市街地へ集まる水を小山川へ導水する掘削工事に伴い設置された。

元来、福川、大堀川、唐沢川は、皿沼西遺跡の東南にあった皿沼で合流し、さらに櫛引台地縁辺を東に流れていた。皿沼は、唐沢川の放水路開削、浄水場やグラウンドの建設によって埋め立てられ、現在はみられない。

これまでに皿沼西遺跡は、深谷市教育委員会によって、個人専用住宅（第1次）に伴って、発掘調査が行われている。奈良・平安時代の竪穴住居跡、土壌等が検出された。

隣接する戸森松原遺跡や森下遺跡では、国道17号深谷バイパスに伴う発掘調査によって、奈良・平安時代の水田跡や竪穴住居跡、掘立柱建物跡、古墳等が検出された。また、森下遺跡は、深谷消防署の建設に伴い（深谷市教育委員会第1次）、さらにカントリー・エレベーターの設置に伴い（同第2次）発掘調査されており、竪穴住居跡や掘立柱建物跡が検出されている。

さて、発掘調査は、福川調整池の建設に伴うもので、平成19年2月1日から6ヶ月間、平成20年10月1日から6ヶ月間、平成21年9月28日から6ヶ月間のあわせて18ヶ月間実施した。一辺200mの調整池として開発される範囲の23,170㎡を調査した。調査区は、自然堤防から低地にかけて扇形に広がる。

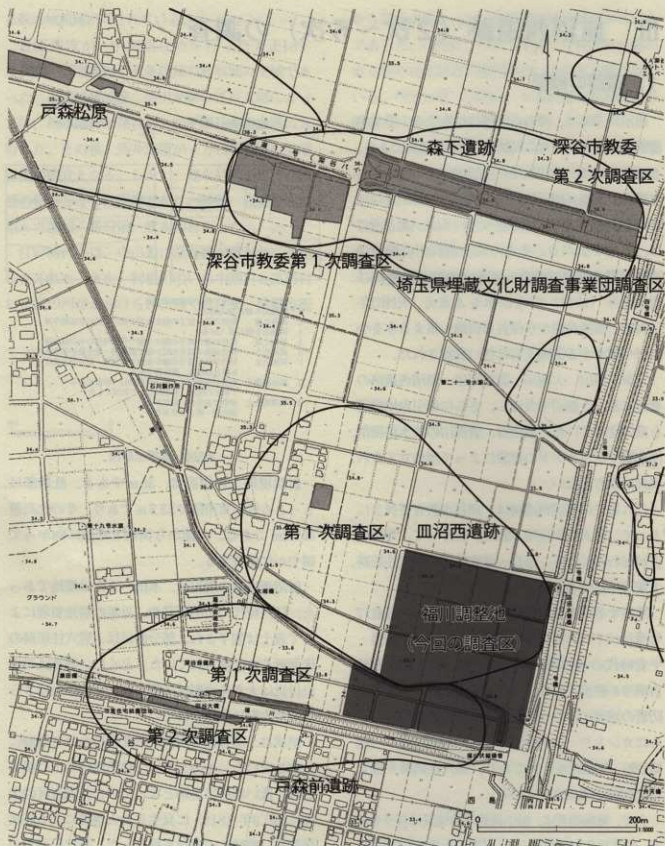


第5図 標準土層図

自然堤防上の標高は、35mである。低地部は、もっとも低い東南隅で33.8mであり、その比高差は1.2mである。北側から南側と東側に向かって緩やかに傾斜する。

皿沼西遺跡の現況は、水田、または畑地であった。江戸時代の新田開発や、近年の耕地整理によって表土は削平され、部分的には、竪穴住居跡の床面近くまで削られていた。とくに、調査区の中央付近は大きく台形状に削られ、その中央はさらに、長方形に掘削されていた。

遺構は、調査区の西側から北側にかけて扇形に分布していた。その大半は、自然堤防の上に構築され、低い場所は畠跡となっていた。調査区の全体に弘仁9年（818）に発生した大地震による液状化現象（噴砂）の痕跡を検出した。液状化現象の痕跡は、平面的には、樹枝状の亀裂に細かい砂や礫が詰まった砂脈となってみられる。また、土層断面では、噴砂の供給源となる砂層から上部の粘土層を切り裂いて、地表に噴出した状態を観察で



第6図 遺跡位置図

きた。

発見された遺構は、古墳時代の竪穴住居跡11軒、土壌42基、奈良・平安時代の竪穴住居跡59軒、掘立柱建物跡36棟、土壌102基、井戸跡8基、溝342条、火葬墓1基、焼成遺構8基、畠跡10ヶ所、水田跡1ヶ所、土器片集積遺構3ヶ所、小穴多数、江戸時代の井戸跡9基、溝跡24条である。

古墳時代の皿沼西遺跡は、カマドが竪穴住居跡に設置された初期の集落跡が、発見された。カマドには、長い煙道が付く。煙道は、カマドで発生した煙を屋外へ排出する装置である。出土した遺物も豊富である。とくに口絵写真(下)にあげた一括の土器は、一軒の竪穴住居跡から出土した土器である。また、酒を注いだ須恵器の甕も出土した。

ところが、この集落は、5世紀末以降、突然途絶えた。旧大堀川の堆積物にみるように大量の白色粘土層が低地を覆ったのである。大きな洪水があったと考えられる。その後、しばらく、竪穴住居はおろか、一片の土器すらみえなくなる。

再び集落が現れるのは、8世紀に入ってからである。竪穴住居や掘立柱建物が構築され、土壌や溝が開削された。順調に奈良時代を過ごした皿沼西遺跡であったが、平安時代の始めに突然、地震が襲う。弘仁の大地震である。

この大地震に遭遇した建物を3棟検出した。総柱建物(倉)と側柱建物(屋)である。倉は、振動と液状化現象で柱が地中に沈み込み、屋は、柱が転倒した。しかし、地震に遭遇した竪穴住居跡を発見することはできなかった。集落は、早期に復興を遂げ、10世紀後半まで続いたのである。

その後、人々の足跡は失われるが、江戸時代になってから、調査区の西北に屋敷が営まれた。また遺跡の中央に幹線水路が走り、周囲は畑や水田として利用されたようである。

2. 縄文時代の遺構と遺物

縄文時代の遺構は、土壌2基を検出した。また、古代や近世の遺構の埋土、遺構確認面から縄文土器と石器が出土した。遺構外の出土遺物とする。

(1) 土壌

4次第11号土壌(第8図)

M-13グリッドに位置する。4次第29号溝跡と重複し、それより古い。円形の土壌である。直径1.18m、短径1.05m、深さ24cmである。長軸方向は、N-40°-Eである。小型の土壌で底面はU字型である。

第11図48の晩期前葉の粗製深鉢が出土した。輪積み痕を残した2段の折り返し口縁を持つ。段上には指頭による圧着痕が観察される。胴部は無文で、縦方向の篋磨きが施される。最大径33.0cm・現在高17.0cmで、胎土に多量の砂と小礫を含み、焼成はやや不良である。

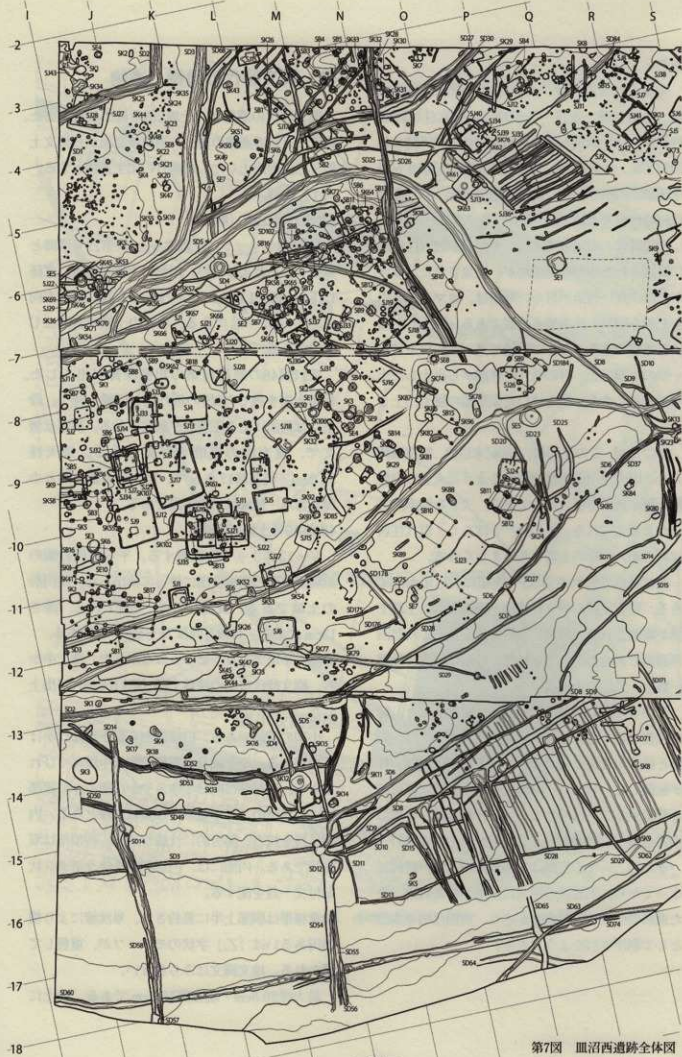
4次第49号土壌(第8図)

V-13グリッドに位置する。平安時代の畑の畝間溝跡群の遺構検出に伴って検出した。楕円形の土壌である。長径1.75m、短径1.10m、深さ13cmである。長軸方向はN-58°-Wである。底面は平坦であり、ピットはなかった。埋土中から、縄文時代後期の深鉢土器(第11図45)が出土した。

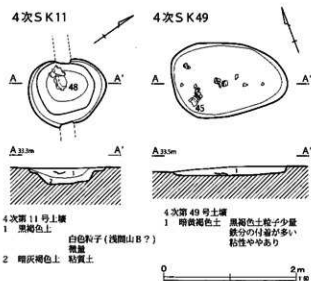
小型の深鉢である。口縁部から胴下半部にかけて残存する。やや細身の器形で胴部中段にくびれをもち、口縁部に向けてゆるやかに開く。口縁部は、二単位のごくゆるやかな波状口縁となる。内面に稜を持ち、部分的に沈線が巡る。波頂部は双頭状である。内面には、円形刺突を伴うボタン状貼付文一対を配する。

文様帯は胴部上半に集約され、単沈線により横楕円あるいは「乙」字状のモチーフが、重畳して描かれる。地文縄文はみられない。

最大径20.8cm・現在高19.1cmである。胎土に



第7図 血沼西遺跡全体図



第8図 4次第11・49号土壌

多量の砂とシルトを含み、焼成は不良である。

表面の風化が著しい。

(2) 遺構外の出土遺物

縄文土器 (第9～11図)

1～16は、堀之内1式の深鉢型土器である。

1～5は、地文縄文を持つ土器である。1～4は反外する口縁部で、いずれも口縁部直下に無文帯を持ち、1条の沈線が巡る。1・2では、沈線の末端に盲孔を配し、1ではこれに接して弧状の短沈線を描く。2・3では、胴部中段に平行沈線による区画が巡り、沈線間の縄文を磨り消す。地文は、LR単節の縄文で右上がりに施文する。

5は、2本隆帯による直線的なモチーフの末端で、幅広の沈線によるなぞりが加えられる。地文はLR単節の縄文である。

6～16は、縄文を持たない。6は波状口縁で、外面に扁平な8の字状の突起を配し、両側に沈線を巡らせる。突起裏面には、円形刺突文を配する。7は水平口縁である。口唇部は、肥厚して外面に段を形成し、この段上に平行沈線による区画が巡る。この区画の一部は、渦巻状に立ち上がり、半円形の小突起を形成する。頸部は無文であり、胴部との境に1条の沈線が巡る。胴部には、単沈線による紡錘文ないしは、J字文が描かれる。

8は、水平口縁である。口端部が、内屈して外面に段を形成し、1条の沈線が巡る。9・10は、水平口縁である。指頭による円形刺突文が1段巡る。11・12は、無文の水平口縁である。

13～16は、沈線文の描かれる胴部破片である。一部が堀之内2式に下る可能性がある。13・15は、単沈線による直線文様である。14は、縦位の集合沈線が垂下する。16は、櫛歯状工具による条線が交差する。

17～19は、堀之内2式である。17は小型精製深鉢の口縁部である。朝顔形の深鉢で水平口縁である。口唇内面に1条の沈線が巡る。胴部には、平行沈線による文様帯が巡り、内部にLR単節横位回転の縄文が施文される。

18は、胴部文様帯の一部である。平行沈線により菱形のモチーフが描かれる。19は、横位の集合沈線である。やはり胴部文様帯の一部である。

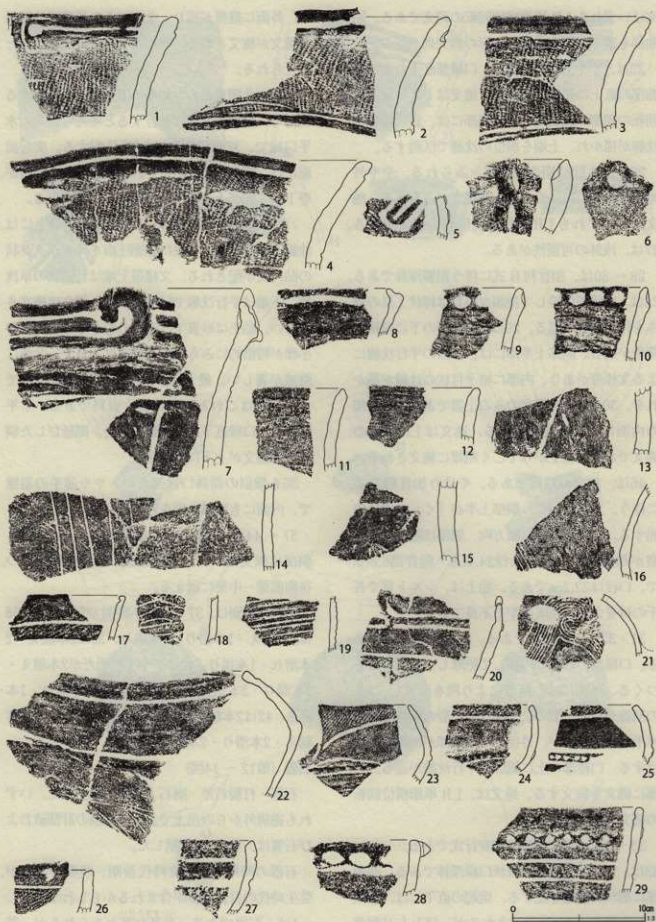
20・21は、加曾利B1式である。20は、精製深鉢である。口縁直下に隆帯が巡り、末端が逆「ノ」の字状に立ち上がり、鐮状の小突起を形成する。隆帯上には縄文が施文される。

胴部には、直線的な区切り文を持つ平行沈線文が重畳し、内部に縄文が施文される。地文は、LR単節横位回転の縄文である。内面は良好に研磨されるが、外面は風化が著しい。

21は、球胴状の注口土器である。無文地に集合沈線による入り組み文が描かれ、縄文は施文されない。入り組み文の直下に、注口部の剥落痕跡がみえる。外面は、研磨されて光沢を持つが、風化による剥落が著しい。

22～25は、加曾利B2式である。胴部上段が「く」の字に張り出す算盤玉状の深鉢である。最大径の部分に隆帯が巡り、文様帯を上下に区画する。23は、横位に弧状の磨り消しモチーフが描かれ、間隙に対弧状の沈線が挿入される。地文は、LR単節横位回転の縄文である。

24・25は、口縁部の直下に帯縄文が巡る。地



第9図 縄文土器 (1)

文はいずれも LR 単節横位回転の縄文である。屈曲部を巡る隆帯^{りゅうたい}上には、円形の刺突列が並ぶ。

22は、やや大型の器体で、口縁部直下および屈曲部の直上に帯縄文が巡る。地文は LR 単節横位回転の細密な縄文である。胴部には、斜位の集合沈線が描かれ、上端を横位の沈線で区画する。

26・27も同時期の口縁部とみられる。やや外傾する水平口縁に沿って、帯縄文がみられる。地文は、いずれも LR 単節横位回転の縄文である。27は、浅鉢の可能性はある。

28～30は、加曾利 B 式に伴う粗製深鉢である。28は、口縁部に接して指頭ないしは棒状工具の刻みを伴う隆帯が巡る。29は、口縁部の下に同様の隆帯が巡る。胴部上半部には、多段の平行沈線による文様帯があり、内部に格子目状の沈線が描かれる。30は、地文縄文のみの土器である。口縁部の内面に 1 条の沈線が巡る。地文は LR 単節の縄文である。右上がりでごく粗雑に施文される。

46は、無文の浅鉢である。やはり加曾利 B 式に伴う。水平口縁で、胴部上半が「く」の字に内屈する。口縁部では、横方向、胴部は縦方向の研磨が徹底される。最大径 24.4cm・現存高 6.8cm で、口径は 22.2cm である。胎土は、シルト質で若干の砂を含む。焼成はやや不良である。

31・32は、曾谷式である。31は波状口縁である。口縁部の直下で内屈して肥厚し、内面に稜をつくる。外面には、隆帯により段を形成し、2条の凹線が巡る。32は、キャリパー形の深鉢である。水平口縁で頸部が、外反して口縁部が、屈曲し直立する。口縁部の上に幅広の平行沈線が巡る。内部に縄文を施文する。地文は、LR 単節横位回転の縄文である。

33～36・47・48は晩期安行式である。

33は、安行Ⅲ b 式の大波状口縁深鉢である。波頂部に扇状の突起を配する。突起の直下には、形骸化した豚鼻突起が 2 段配されるが、ほとんど剥落している。34は、瓢形深鉢であろう。口縁肥厚し

て、外面に隆帯が巡り、全面に LR 単節横位回転の縄文が施文される。安行Ⅲ a～Ⅲ b 式に伴うと考えられる。

47は、北関東系のいわゆる天神原式に類似する土器で、安行Ⅲ c 式に並行すると考えられる。水平口縁で、双頭状の突起を 5 単位配する。突起前面には、豚鼻状突起が付され、刻みを伴う隆帯が、垂下して胴部上半の文様帯を縦位に分割する。

パネル状に区画された文様帯の対角線上には、沈線文が描かれ、中央に指頭瓦痕を伴うボタン状の貼付文が配される。文様帯上端は、弧状の単沈線、下端は平行沈線で区画される。縄文は施文されない。胎土は砂質で、白色の粒子と暗赤褐色の小礫が特徴的にみられる。焼成は不良で、全面に磨滅が著しい。最大径 27.8cm・現存高 23.0cm である。35はこれと同種の破片資料である。水平口縁で、口縁直下に文様帯を持ち、間延びした横位の弧線文が上下に対向する。

36も類似の深鉢口縁部だが、やや薄手の器壁で、内面にも輪積み痕を残している。

37～44は、深鉢に伴う底部である。いずれも胴部は無文だが、大半が底面に網代圧痕をもつ。後期前葉～中葉に属する。

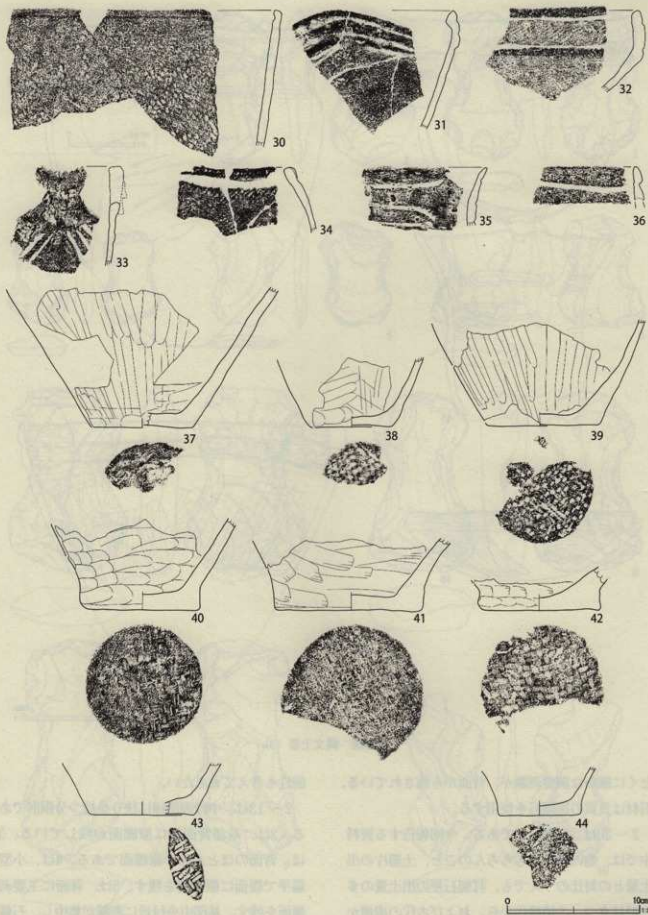
網代の種別は、37・44は不鮮明で判別不能、38は 2 本越え・1 本潜り・1 本送り、39は 2 本越え・2 本潜り・1 本送り、40はやや不鮮明だが 2 本越え・2 本潜り・2 本送り、41は 2 本越え・1 本潜り・1 本送り、42は 2 本越え・2 本潜り・1 本送り、43は 2 本越え・2 本潜り・2 本送りである。

石器 (第 12～14 図)

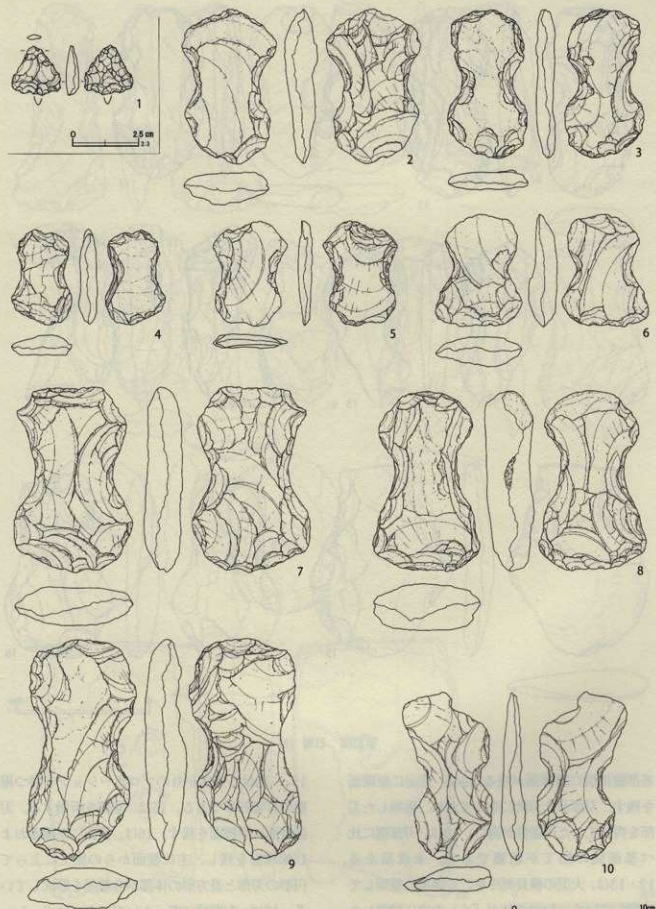
石鏃・打製石斧・磨石・凹石が出土した。いずれも遺構外からの出土である。個別の計測値および石質は、第 2 表に一括した。

石器の時期は、縄文時代後期～晩期であるが、弥生時代の打製石斧が含まれるかもしれない。

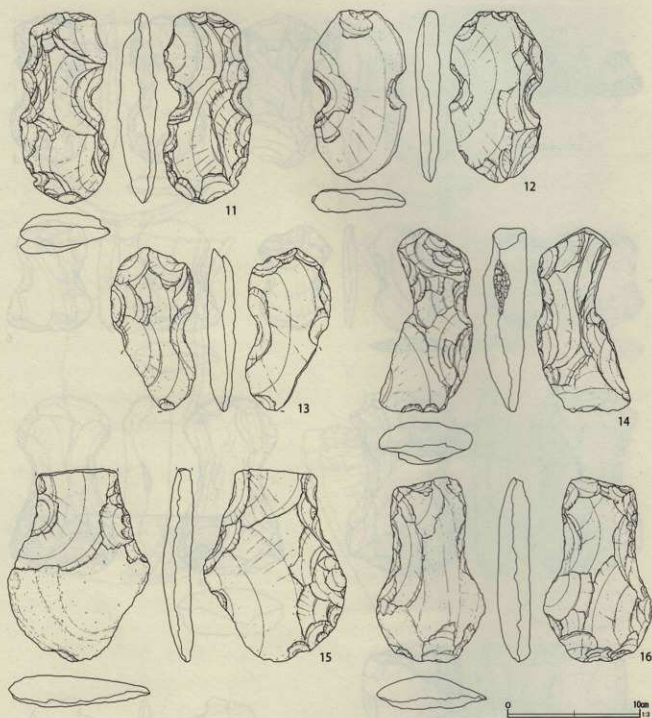
1は、石鏃である。平基有茎とみられるが、茎部を折損している。体部はほぼ正三角形である。



第10図 縄文土器 (2)



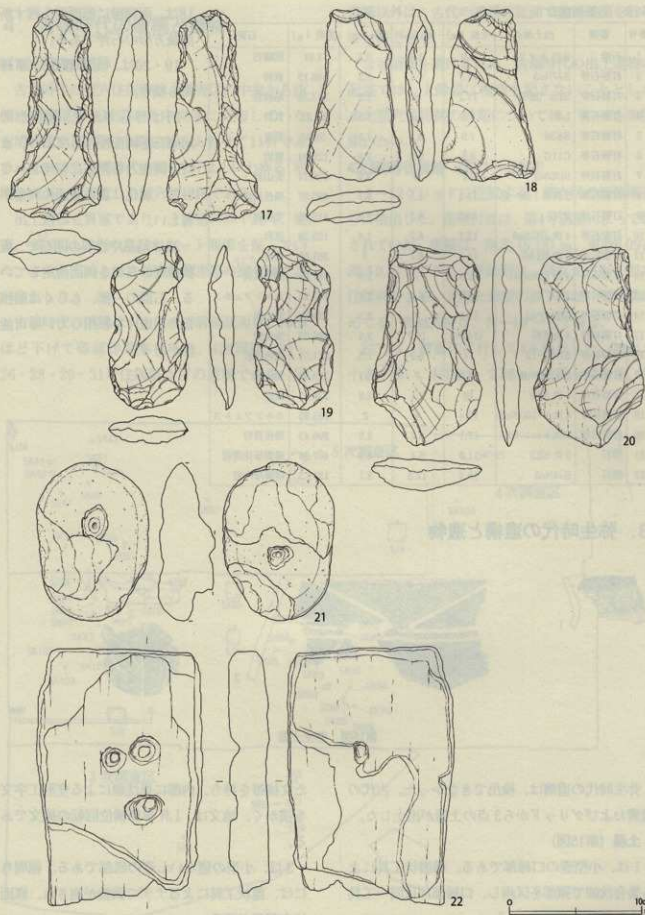
第12圖 石器 (1)



第13図 石器 (2)

基部腹縁側に原礫面が残る。9は、背面に原礫面を残す。刃部が片刃状になっており、破損した刃部を再加工した可能性が高い。10は、刃部側に比べ基部側の加工が粗雑である。未成品ある。12・13は、大型の横長剥片をごく簡単に整形して使用している。14は全体が「く」の字に湾曲した特異な器形である。破損した刃部を再生している。

15～18は、末広がりのプロポーシオンを持つ撥形の打製石斧である。15は、基部を折損する。刃部背面に原礫面を残す。16は、背面に原礫面および節理面を残し、主に腹面からの加工によって、円形の刃部と長方形の体部から基部を形成している。17は、左側縁に寄ったいびつなプロポーシオンであり、破損した刃部を再生した可能性がある。



第14図 石器 (3)

第2表 石器観察表

番号	器種	出土地点	全長 (cm)	幅 (cm)	厚 (cm)	重量 (g)	石質
1	石鏃	SJ5 カマド	1.9	1.8	0.5	1.21	黒曜石
2	打製石斧	SJ7No3	11.7	7.1	2.5	186.13	頁岩
3	打製石斧	SD5 (I6G)	11.2	6	1.5	113.38	粘板岩
4	打製石斧	L4G	7.2	4.5	1.5	58.25	頁岩
5	打製石斧	SK36	7.9	5.1	1.1	50.85	頁岩
6	打製石斧	C11G	8.5	6.5	2.1	120.04	頁岩
7	打製石斧	D15GNo2	14	9	2.9	429.14	安山岩
8	打製石斧	5次第1面一括	13.1	8.1	3.7	493.27	黒色頁岩
9	打製石斧	R7G	16.7	8.3	3.2	413.94	安山岩
10	打製石斧	4次 J7GNo8	12.7	6.7	1.8	129.28	頁岩
11	打製石斧	3次 M14G	14.4	6.7	3	261.59	頁岩
12	打製石斧	4次 I10GNo1	12.9	7	1.9	187.93	黒色頁岩
13	打製石斧	J11G	12.2	6.4	2.1	187.23	ホルンフェルス
14	打製石斧	SB14Pit1	13.8	7	3.3	334.94	安山岩
15	打製石斧	4次表様	(14.5)	10.7	2.4	345.03	安山岩
16	打製石斧	SD2G-12	14	8.2	2.5	311.01	黒色頁岩
17	打製石斧	SD38P-16	15.8	7	3.1	303.32	安山岩
18	打製石斧	4次 SD2	13	7.1	2.2	236.21	頁岩
19	打製石斧	4次 V-10GNo2	12.4	6	2	155.93	ホルンフェルス
20	打製石斧	5次トレンチ①	15.1	8.3	2.2	296.43	黒色頁岩
21	磨石	5次 SE3	11.9	8.4	4.3	467.98	黒雲母花崗岩
22	凹石	SJ4No6	19.3	12.5	3.1	1319.3	絹雲母片岩

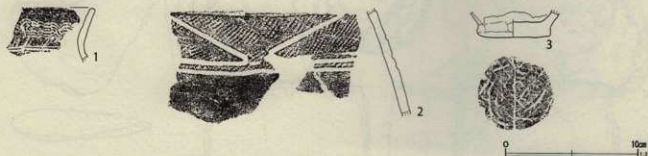
18は、両側縁に節理面を残す断面長方形の石斧である。

19・20は、刃部腹面に原礫面を残す。

21は磨石である。楕円形の河原石を両面使用しており、また、両面とも凹石に転用されている。風化による表面の剥落が著しい。

22は結晶片岩製の凹石で、板状節理の石材を両面使用している。石皿の一部、もしくは破損した石皿片を転用している可能性がある。

3. 弥生時代の遺構と遺物



第15図 弥生土器

弥生時代の遺構は、検出できなかった。古代の遺構およびグリッドから3点の土器が出土した。

土器 (第15図)

1は、小型壺の口縁部である。楕円状工具による集合沈線で頸部を区画し、口縁部には同一工具による波状文が巡る。

2は、壺の胴部上半である。平行沈線で区画し

た文様帯を持ち、内部に単沈線による変形工字文を描く。地文は、LR 単節横位回転の縄文である。

3は、小型の甕ないし壺の底部である。裾周りには、篋状工具によるナデで調整が施され、底面に木葉痕が残る。

4. 古墳時代の遺構と遺物

(1) 豎穴住居跡

古墳時代の竪穴住居跡は、調査区の中央から西側、自然堤防の縁辺から中央部に分布していた。古墳時代前期1軒、中期10軒のあわせて11軒である。なかでも古墳時代中期の7軒は、いわゆる「初期カマド」を設置した竪穴住居跡である。

出土遺物も豊富であり、土師器の坏や高坏、甕、
壺、甔等は、その良好なセット関係を保っていた。また、当時とても希少な須恵器の甕や鉢など
が出土した。

古墳時代の遺構は、古代の遺構確認面を、10cmほど下げて確認作業を行った。4次第18・24・26・28・29・31号住居跡などの遺構である。同

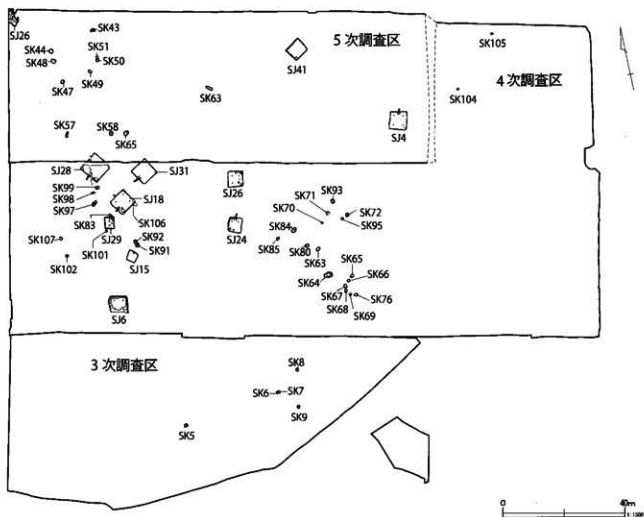
遺構以外は、古代の遺構確認面で遺構確認を行うことができた。

なお煩雑を避けるため、古墳時代の出土遺物の記述では、土師器は種別を記さないこととした。また竪穴住居跡の時期については、VI-2を参照願いたい。

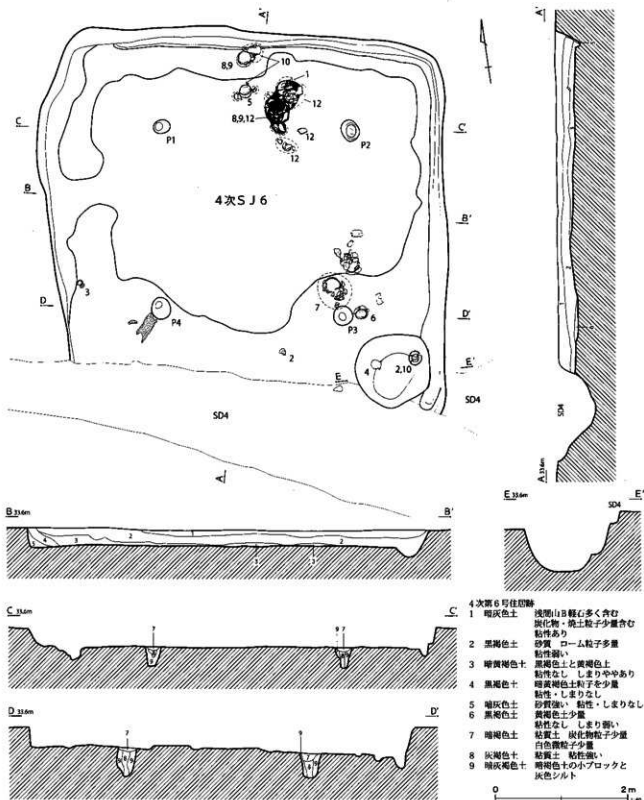
4次第6号住居跡 (第17～19図)

J-12グリッドに位置する。調査区の西側南寄りに検出した。南壁付近は、第4号溝跡によって壊されていた。規模は、南北(5.18)m、東西6.09m、深さ0.31mである。平面形は、隅丸正方形の竪穴住居跡である。北壁と南壁の直下には、壁周溝がめぐる。長軸方位は、N-10°-Eである。

柱穴は、壁面に平行して4本検出した。規模が小さく細い。柱間は、 $2.88\text{m} \times 2.78\text{m}$ である。失



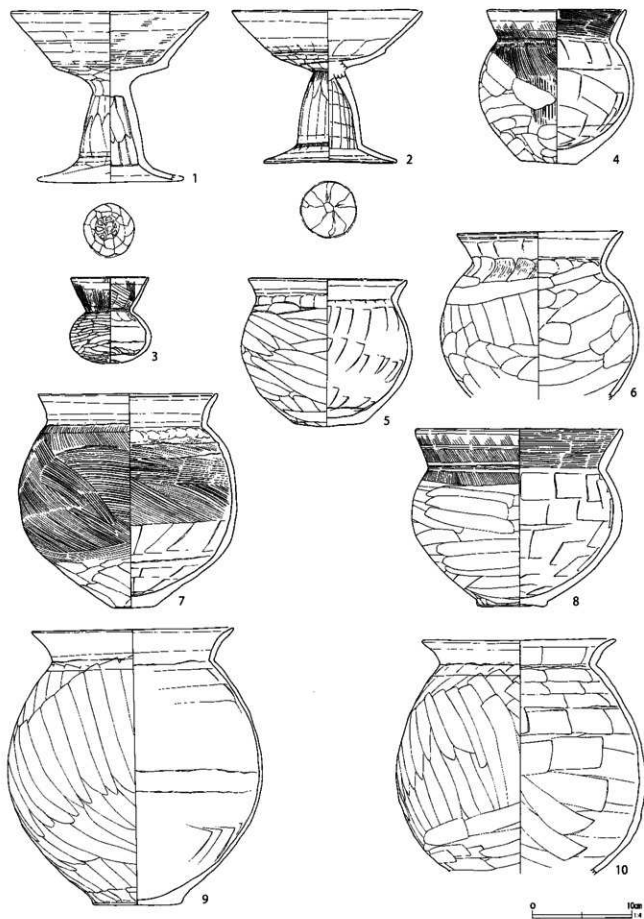
第16図 古墳時代の遺構分布図



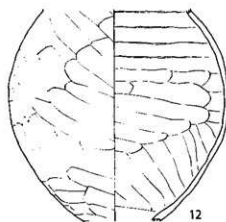
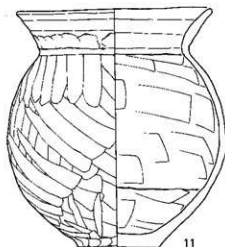
第17図 4次第6号住居跡

われた南壁周辺に焼土や炭化物の痕跡もなく、カマドのない竪穴住居だった。また、南東の隅に円形の貯蔵穴を検出した。径1.13m×深さ0.65mである。

遺物は、①P1-P2と北壁の間、②P3の周辺、及び③貯蔵穴に集中して出土した。①は、甕5・9・10・12や鉢8、高環1などが、床面に接して折り重なって出土した。②は、大型の鉢6・7が、



第18图 4次第6号住居跡出土遺物 (1)



第19図 4次第6号住居跡出土遺物 (2)

第3表 4次第6号住居跡出土遺物観察表

番号	種別	器種	残存率 (%)	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	胎土	焼成	色調	備考
1	土師器	高坏	90	19.6	14.3	(17.0)	軽石・角閃石	普通	橙色	利根川
2	土師器	高坏	90	18.9	13.2	15.1	片岩	普通	橙色	ローマ台地
3	土師器	小型埴	50	7.7	2.1	8.6	角閃石・鉄粒子・軽石	良好	橙色	利根川
4	土師器	中型甕	100	13.7	5.5	15.4	軽石・角閃石・安山岩	普通	黄褐色	利根川
5	土師器	中型甕	100	15.7	6.9	14.8	結晶片岩・角閃石	普通	赤褐色	小山川
6	土師器	大型鉢	80	16.4		(16.7)	角閃石・結晶片岩・軽石	普通	にぶい橙色	利根川
7	土師器	大型鉢	90	17.8	4.1	21.5	結晶片岩・石英	良好	にぶい橙色	小山川
8	土師器	大型広口鉢	100	20.5	6.5	17.7	石英・安山岩・軽石・角閃石	良好	橙色	利根川
9	土師器	大型甕	60	20.2	8.2	27.3	軽石・金雲母・結晶片岩	普通	明赤褐色	利根川
10	土師器	大型甕	60	19.1		(23.3)	結晶片岩・石英	普通	赤褐色	小山川
11	土師器	大型甕	100	19.3	8.0	23.9	結晶片岩・石英・頁岩	普通	にぶい橙色	小山川
12	土師器	大型甕	50			(21.3)	結晶片岩	普通	にぶい橙色	小山川

やはり床面から出土した。③は、高坏2や中型の甕4が、埋土から出土した。このほか、小型の埴3が、西壁に接して出土した。

1・2は、高坏である。1の脚部は、絞り込みが少なく、直線的に開く。脚の内面を二段で削り込む。坏部は直線的に大きく「ハ」の字に開く。2は、脚部の絞り込みが強くハケメが残る。ハケメは、脚部と裾部の境目にも残る。脚部は、ラッパ状に広がる。粘土紐を5段巻き上げて作られ、内面を1段で削り込む。口縁部は内湾しつつ、大きく「ハ」の字に開く。

3は、小型の埴である。球形の胴部に「ハ」の字形に開く口縁部がつく。胴部は細かく丁寧に磨かれ、口縁部内面に粗いハケメが残る。口縁部外面

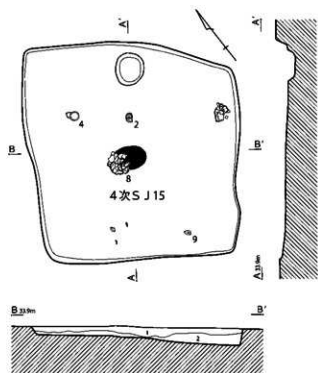
も頸部から掻き上げたハケメが残る。

4・5は中型の甕である。ともに広口の甕である。4は、球形の胴部に口縁部を接合後、頸部から口縁部に向かって木口状工具で掻きあげ、肩部を底部に向かって斜めに削る。胴部にヘラケズリを加える。

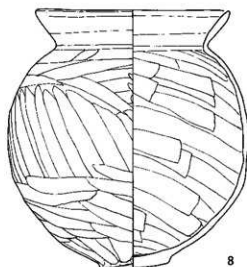
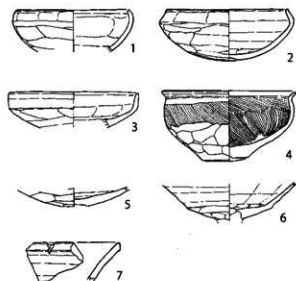
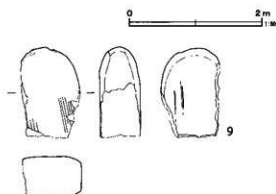
5は、胴部の全面をヘラケズリで削り込む。

6～8は、大型の鉢である。6は、肩部の一部にハケメが残る。7は、肩部から胴部にかけて粗いハケメが残る。内面にも胴部上半に粗いハケメが残る。8は、大型の広口鉢である。肩部から口縁部に細かなハケメが残る。肩部から底部にかけて、粗くヘラケズリを施す。

9～12は、大型の甕である。9～12は、外面を



4次第15号住居跡
1 黒褐色土 小砂利・炭化粒子・ロームブロック多量 強くしめる
2 暗褐色土 砂粒多量 炭化粒子少量 しまり赤褐色に強い



第20図 4次第15号住居跡・出土遺物

第4表 4次第15号住居跡出土遺物観察表

番号	種別	器種	残存率 (%)	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	胎土	焼成	色調	備考
1	土師器	碗形杯	20	11.2		(4.3)	軽石・角閃石	良好	橙色	利根川
2	土師器	内胴口縁杯	70	12.0	8.2	5.1	角閃石・軽石	良好	橙色	利根川
3	土師器	杯	5	12.8		(3.7)	鉄粒子	普通	橙色	ローム台地
4	土師器	内胴口縁鉢	80	13.2	2.9	7.0	鉄粒子・軽石・角閃石	良好	橙色	利根川
5	土師器	杯	40		2.7	(1.9)	鉄粒子・軽石・角閃石	普通	にぶい・橙色	利根川
6	土師器	高杯	5			(3.7)	鉄粒子・角閃石	良好	橙色	ローム台地
7	土師器	甕	5			(4.0)	角閃石・軽石・火山岩	良好	橙色	利根川
8	土師器	甕	80	19.2	6.8	25.9	石英・結晶片岩	普通	明赤褐色	小山川
9	石製品	砥石	60	全長(8.9) 幅(6.0) 厚さ(4.0) 重さ(347.1)g			凝灰岩		灰白色	

粗く削る。10は、下膨れの胴部である。

本住居跡は古墳時代Ⅱ期、5世紀初頭である。

4次第15号住居跡（第20図）

K-10グリッドに位置する。調査区の西側南寄りに検出した。遺構確認面が浅く、残存状況は良くない。ほかの遺構との重複はない。規模は、南北3.25m、東西3.12m、深さ0.24mである。平面形は、正方形の竪穴住居跡である。壁周溝はない。長軸方位は、N-35°-Eである。

柱穴は、検出できなかったが、北壁に接して小規模な土壌を検出した。竪穴のほぼ中央に炉跡を検出した。ただし掘り込みはない。この被熱痕跡の直上から甕8が出土した。このほか、床面直上から坏2や鉢4が出土した。また、南壁近くに砥石9が出土した。なお、この砥石は、5次第4号住居跡から出土した砥石32と接合した。

1-3は坏である。1は碗形の坏、2は内屈口縁坏である。3は、坏である。3点とも底部を丁寧に削り込む。

4は、内斜口縁の鉢である。口縁部は強く「く」の字に屈曲する。口唇部にハケメはないが、口縁部を強く屈曲させるためのハケメが肩部に明瞭に残る。屈曲部には、横方向のナデがめぐる。胴部下半は粗く削られる。内面には、底部と胴部に付けてハケメが施される。上げ底である。

5は、坏の底部である。上げ底であることから内斜口縁坏、または碗形の坏と考えられる。

6は、高坏である。口縁部は、大きく「ハ」の字に開く。

7は、甕の口縁である。8は、甕である。球の胴部に大きく「ハ」の字に開く口縁部がつく。内外面とも粗いヘラケズリが施される。

9は、凝灰岩の砥石である。本住居跡は古墳時代Ⅲ期5世紀前葉～中葉である。

4次第18号住居跡（第21～24図）

K-9グリッドに位置する。調査区の西側南寄りに検出した。遺構の残存状態が良く、全体を検

出できた。4次第32・50号土壌と重複し、それより古い。規模は、南北6.12m、東西5.74m、深さ0.41mである。平面形は、正方形の竪穴住居跡である。長軸方位は、N-58°-Wである。

柱穴は、壁面に平行して4本検出した。小さく細い。柱間は、3.36m×2.85mである。西壁南寄りにカマド、その左に貯蔵穴を検出した。壁周溝は、確認できなかった。ただし、貼床を剥がしたところ、カマドの下に壁周溝の痕跡を確認できた。また、北壁中央に細長く浅い溝状の窪みを検出した。煙道の痕跡と考えられる。

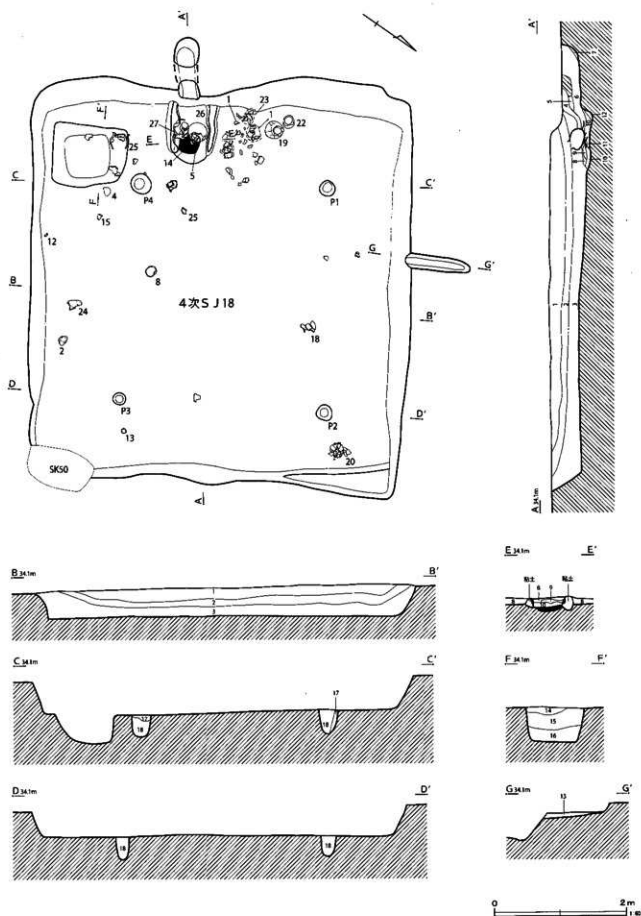
西壁のカマドは、袖・燃焼部の被熱痕跡、煙道の天井等とても残りが良い。燃焼部には、高坏16・17を支脚とし、その上に球胴甕26・27がのせられていた。高坏16・17は、口縁部を伏せて横に並べられ、その脚の上に球胴甕26・27が、カマドの両袖に接して据えられていた。被熱痕跡は、高坏の前からカマドの焚口にかけて広がる。

このほかに遺物は、①カマドの周囲、②貯蔵穴付近、③南側床面、④北側床面、⑤東側床面などから出土した。①は、とくにカマドの右手、壁際から多く出土した。有段口縁甕19、甕22・23、坏1・5などである。また、左手からは、甕25・26などが出土した。

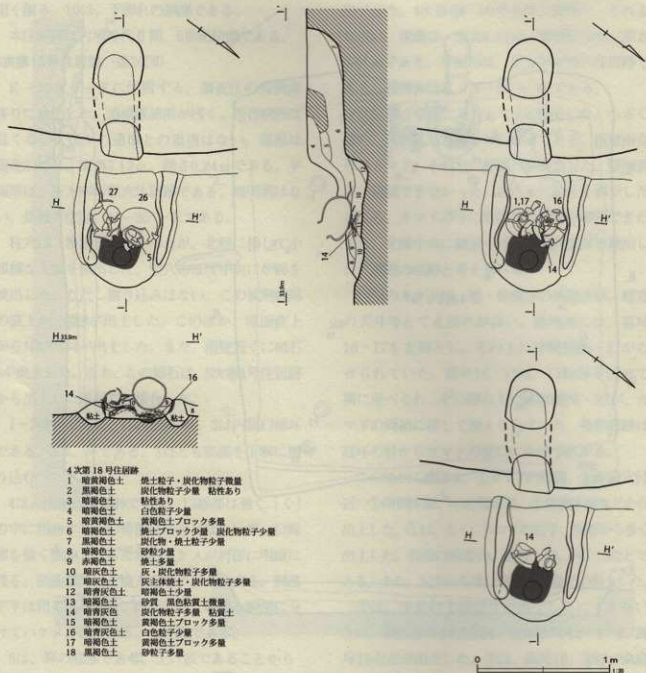
②は、少量の土師器片が出土したにすぎない。③は、須恵器の小型壺24、土師器の坏2・4・8、高坏15などが出土した。④は、高坏18、⑤は、丸底壺20や手捏ねの鉢13などが出土した。

1-10は坏である。1-7は、碗形の坏である。8は、口縁部が直立する碗形の坏である。7・8は、体部外面にヘラケズリを施さない。9は、半球形で器肉の薄い作りである。3・4・8は、上げ底である。9・10は、内斜口縁の坏である。

11-13は、ミニチュアの土器である。11は、口縁部に小孔を穿った鉢形の土器である。12は、口縁部が内湾して開く環形の土器である。13は、小型の壺の底部付近と共通の形の鉢である。3点とも口縁部を丁寧にヨコナデする。



第21圖 4次第18号住居跡 (I)



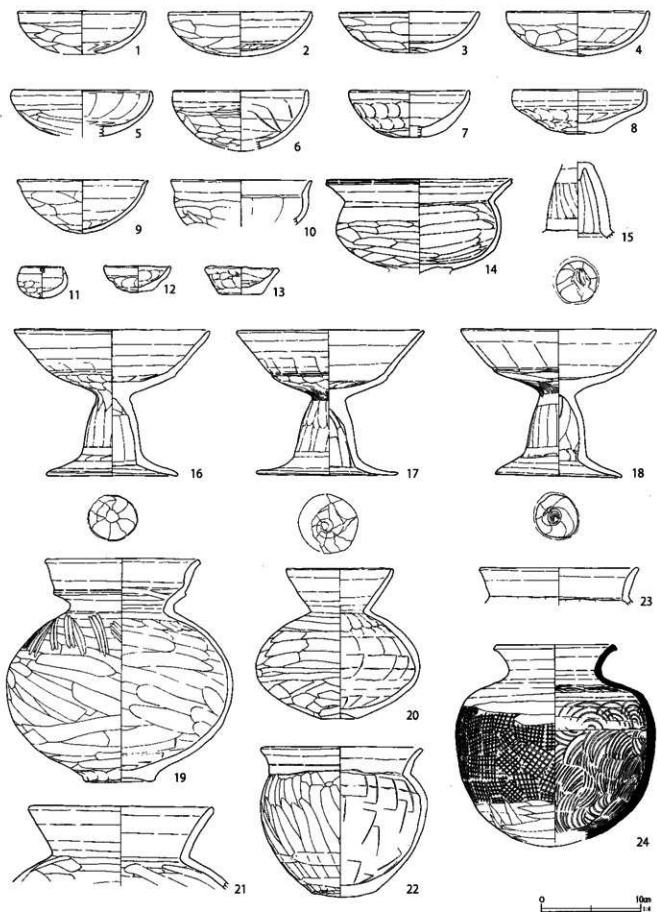
第22図 4次第18号住居跡 (2)

14～18は、高環である。14は、半球形の胴部から口縁部が大きく「ハ」の字に外反する。15～18の脚部は、小さなくびれ部から、ラッパ状に伸びる。17・18のくびれ部には、細かなハケメが残る。外面は丁寧になでる。脚部内面は、15・16が一段、17・18が二段で削り取る。

19～21は、壺である。19は、口縁部が二段で作られた有段口縁の壺である。球形の胴部は粗く横方向に削られる。肩部は部分的にミガキが施さ

れる。20は、ラッパ状の口縁部が、算盤玉形の胴部につく増形の壺である。胴部は細かくヘラケズリが施される。底部は上げ底である。21は、素口縁で大型の壺である。外面は丁寧に削られる。

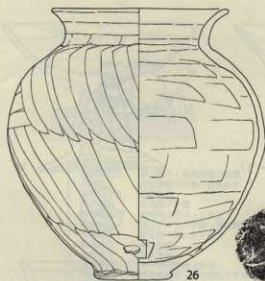
22・23と25～27は、甕である。22は、小型の甕、他は大甕である。すべて素口縁の甕である。22は、外面を粗く縦にヘラケズリを施す。23は、肩部以下を欠損するが、25・26と同じ球胴の甕と考えられる。口縁部は「く」の字に大きく外反



第23图 4次第18号住居跡出土遺物 (1)



25



26



27



第24図 4次第18号住居跡出土遺物 (2)

する。26・27は、平底で木葉痕を残す。27は、器肉が厚く、胴部がやや歪な球形である。口縁部も直立し三者と異なる。外面の削り込みも斜めに大雑把である。

24は、須恵器の小型壺である。外面に格子目状の叩き板痕跡が、明瞭に残る。内面には、同心円状の当て具痕跡が残る。外面の底部・肩部は、叩き板の痕跡を削り落とす。

本住居跡は、古墳時代VI期、5世紀中葉である。

4次第24号住居跡 (第25～27図)

O-10グリッドに位置する。調査区の中央付近に検出した。遺構の残存状態が良く、全体を検出できた。4次第11・12号掘立柱建物跡、第20号溝跡と重複し、それより古い。規模は、南北4.74m、東西4.20m、深さ0.40mである。平面形は、正方形の竪穴住居跡である。長軸方位は、N-20°-Eである。

柱穴は、壁面に平行して北側の2本のみ検出した。南側の2本は、4次第11・12号掘立柱建物跡と重複し、検出できなかった。柱は、小さく細い。柱間は、2.05mである。北壁西寄りにカマド、南西隅に貯蔵穴を検出した。壁周溝は、東壁の一部に確認した。

カマドは、袖・燃焼部の被熱痕跡、煙道等とても残りが良い。煙出し部は、煙道より深く掘られる。燃焼部には、高坏9が伏せて置かれ、その上に鉢6を伏せて置き、さらに球胴甕19をのせていた。燃焼部の被熱痕跡は、高坏の前からカマドの焚口にかけて広がる。

このほかに遺物は、①P1の付近、②P2の付近、③東壁中央、④西側床面などから出土した。①は、坏4、高坏10などが出土し、②は、坏1や高坏12などが出土した。③は、甕22、甕21が出土し、21は、22の置台だったかもしれない。さらに④は、坏2・5、高坏11、坏7などが出土した。

1～8は、坏である。1・2は、碗形の坏である。口縁部が、1は大きく内湾し、2は緩く広がる。2は、内面に放射状のヘラミガキが施される。3～6は、内斜口縁の坏である。3は、口唇部がきつく外反す

第5表 4次第18号住居跡出土遺物観察表

番号	種別	器種	残存率 (%)	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	胎土	焼成	色調	備考
1	土師器	碗形環	30	12.8	(4.3)	(4.4)	角閃石・鉄粒子・軽石	普通	褐色	利根川
2	土師器	碗形環	100	14.1	6.8	4.5	角閃石・鉄粒子・軽石	普通	黄褐色	利根川
3	土師器	碗形環	30	13.9	3.9	4.1	角閃石・軽石	普通	褐色	利根川
4	土師器	碗形環	60	14.1	1.9	4.6	角閃石・軽石	良好	褐色	ローム台地
5	土師器	碗形環	60	13.8		(4.8)	角閃石・軽石	普通	褐色	利根川
6	土師器	碗形環	40	13.3	6.4	(6.1)	軽石・角閃石・安山岩	良好	褐色	利根川
7	土師器	碗形環	30	12.0	(3.0)	(4.1)	角閃石・軽石	良好	褐色	利根川
8	土師器	碗形環	100	13.1	2.0	4.5	角閃石・軽石・鉄粒子	普通	褐色	利根川
9	土師器	内斜口縁環	30	13.1	5.8	5.5	角閃石・軽石・鉄粒子	普通	褐色	利根川
10	土師器	内斜口縁環	10	14.0		(4.6)	角閃石・軽石	普通	褐色	利根川
11	土師器	ミニチュア土器(鉢)	40	4.1	1.4	3.2	角閃石・軽石	普通	褐色	利根川
12	土師器	ミニチュア土器(杯)	80	6.5	1.8	2.6	角閃石・軽石	普通	にぶい褐色	利根川
13	土師器	ミニチュア土器(鉢)	100	6.6	3.9	2.7	角閃石・軽石	不良	にぶい褐色	利根川
14	土師器	高環	30	18.3		(9.4)	角閃石・軽石	良好	明赤褐色	利根川
15	土師器	高環	30			(7.3)	角閃石・軽石・石英	良好	にぶい褐色	利根川
16	土師器	高環	70	19.4	12.4	14.7	鉄粒子・軽石	不良	褐色	利根川
17	土師器	高環	70	18.5	13.6	14.6	角閃石・軽石	普通	褐色	利根川
18	土師器	高環	60	19.5	12.5	14.7	鉄粒子・角閃石	普通	にぶい褐色	ローム台地
19	土師器	有段口縁壺	90	15.2	6.5	22.5	角閃石・軽石・安山岩	普通	褐色	利根川
20	土師器	増形壺	90	10.5	3.5	15.1	角閃石	普通	にぶい褐色	利根川
21	土師器	大型壺	20	18.2		(8.2)	角閃石・軽石・安山岩	普通	黄褐色	利根川
22	土師器	甕	90	15.6	6.0	15.0	角閃石・結晶片岩	普通	明赤褐色	小山川
23	土師器	甕	5	15.8		(3.8)	角閃石・軽石・石英	普通	黄褐色	利根川
24	須恵器	小型壺	40	11.8		(20.3)	石英・結晶片岩	良好	灰色	末野か太田
25	土師器	甕	50	19.4		(24.0)	角閃石・石英・結晶片岩	普通	明赤褐色	小山川
26	土師器	甕	90	17.5	7.2	27.2	石英・結晶片岩・緑晶片岩	普通	褐色	小山川
27	土師器	甕	90	16.0	5.5	23.5	石英・結晶片岩	普通	黄褐色	小山川

る。いわゆる「比企型環」の形状に近い。4は、口縁部の内斜が緩く、半球形に近い。5は、一般的な内斜口縁環である。6は、見込みの深い鉢形の環である。3・4を除き上げ底である。

7は、鉢形の環である。平底である。体部下半にヘラケズリを施す。8は、浅めの碗形である。他の遺構からの混入かもしれない。

9～16は、高環である。9・11は、大きく「ハ」の字状に口縁部が開く高環である。9の脚部は直線的に伸びる。脚内面は、粗く一段のヘラケズリを施す。11は、環部底面に細かなハケメの痕跡を残す。

10の環部は、半球形の体部から口縁部が大きく「ハ」の字に外反する。脚部は、小さくくびれラッパ状に広がる。環部は、内斜口縁である。12～14は、高環の脚部である。12は、粘土紐を三段積み

上げて作るが、ヘラケズリを行わない。13・14は、一段のヘラケズリを行う。14の脚部と裾部の間には、米粒大の小孔が穿たれる。ただし、貫通しない。15は、脚の裾に段がある。16は、裾部である。

17は、小型の鉢である。広口の口縁部で、直立気味に外反する。外面を粗く削る。

18は、小型の壺型土器の底部と考えた。上げ底である。19～21は、壺である。口縁部は、「ハ」の字に大きく開く。

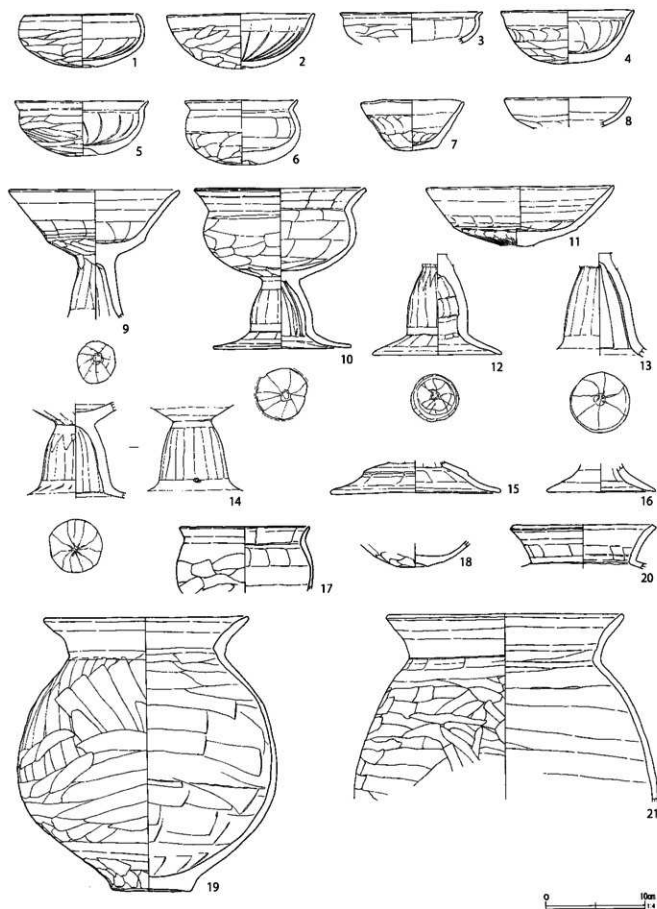
22は、大型の甕である。口縁部が大きく「ハ」の字に開き、胴部は緩やかにすばまる。底部は筒抜けである。外面は、粗いヘラケズリが施される。

23は、釘状の鉄製品である。

本住居跡は、古墳時代Ⅳ期、5世紀中葉である。

4次第26号住居跡(第28・29図)

O-9グリッドに位置する。調査区の中央やや

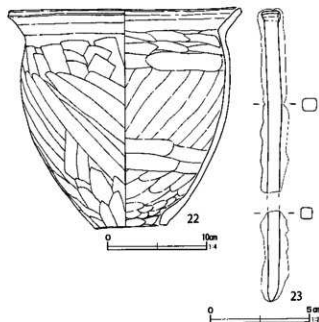


第26图 4次第24号住居跡出土遺物 (1)

第6表 4次第24号住居跡出土遺物観察表

番号	種別	器種	残存率 (%)	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	胎土	焼成	色調	備考
1	土師器	碗形坏	100	11.2	2.9	5.3	角閃石・軽石・石英	普通	橙色	利根川
2	土師器	碗形坏	100	14.5	1.8	5.5	角閃石・軽石・石英	普通	にぶい橙色	利根川
3	土師器	内斜口縁坏	5	14.3	(3.3)		角閃石・軽石・石英	普通	橙色	利根川
4	土師器	内斜口縁坏	90	13.2	5.8	5.4	角閃石・軽石	普通	橙色	利根川
5	土師器	内斜口縁坏	100	13.3	3.1	5.4	角閃石・軽石・石英	良好	橙色	利根川
6	土師器	内斜口縁坏	100	11.0	3.1	6.4	角閃石・軽石・安山岩	普通	明赤褐色	利根川
7	土師器	鉢形坏	100	10.1	4.4	5.1	角閃石・軽石・安山岩	普通	にぶい橙色	利根川
8	土師器	坏	5	12.5	(3.1)		鉄粒子・石英	普通	橙色	ローム台地
9	土師器	高坏	70	17.0		(13.0)	角閃石・軽石	普通	黄橙色	利根川
10	土師器	高坏	60	17.0	13.7	16.1	角閃石・安山岩	普通	にぶい橙色	利根川
11	土師器	高坏	50	18.6		6.1	角閃石・軽石・鉄粒子	普通	にぶい橙色	利根川
12	土師器	高坏	40		12.8	(10.2)	角閃石・軽石	普通	にぶい橙色	利根川
13	土師器	高坏	30			(9.9)	角閃石・軽石・鉄粒子	普通	にぶい橙色	利根川
14	土師器	高坏	40			(9.7)	軽石・石英・鉄粒子	普通	橙色	利根川
15	土師器	高坏	20		16.7	(3.2)	角閃石・軽石	普通	黄橙色	利根川
16	土師器	高坏	5		10.7	(2.9)	角閃石・軽石	普通	橙色	利根川
17	土師器	小型鉢	5	12.8		(6.6)	角閃石・石英・結晶片岩	良好	にぶい橙色	小山川
18	土師器	小型壺	5		3.0	(2.6)	角閃石・軽石	普通	橙色	利根川
19	土師器	壺	90	19.9	7.6	27.0	結晶片岩・石英・雲母	普通	にぶい橙色	小山川
20	土師器	壺	5	14.1		(4.5)	角閃石・軽石・石英	良好	黄橙色	利根川
21	土師器	壺	40	23.4		(19.0)	角閃石・軽石・安山岩	良好	橙色	利根川
22	土師器	大型甕	90	22.9	7.2	21.9	角閃石・軽石・安山岩	良好	橙色	利根川
23	鉄製品	釘状鉄製品	80	長さ (9.1)	幅 1.2 厚さ 0.7	重さ 26.5 g				

北に検出した。遺構の残存状態が良く、全体を検出できた。4次第9号掘立柱建物跡と重複し、それより古い。規模は、南北5.08m、東西4.77m、深



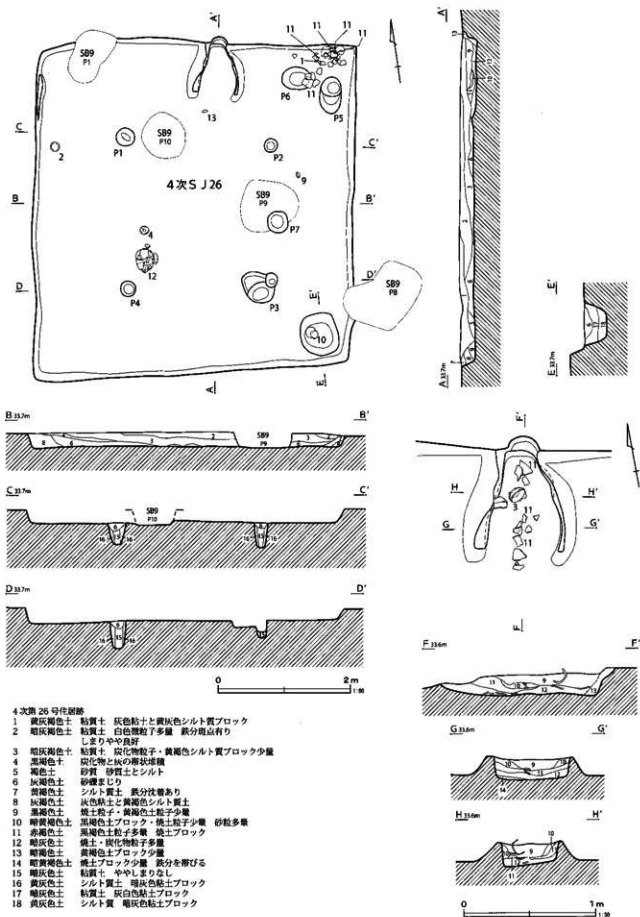
第27図 4次第24号住居跡出土遺物 (2)

さ0.22mである。平面形は、正方形の竪穴住居跡である。長軸方位は、N-12°-Eである。

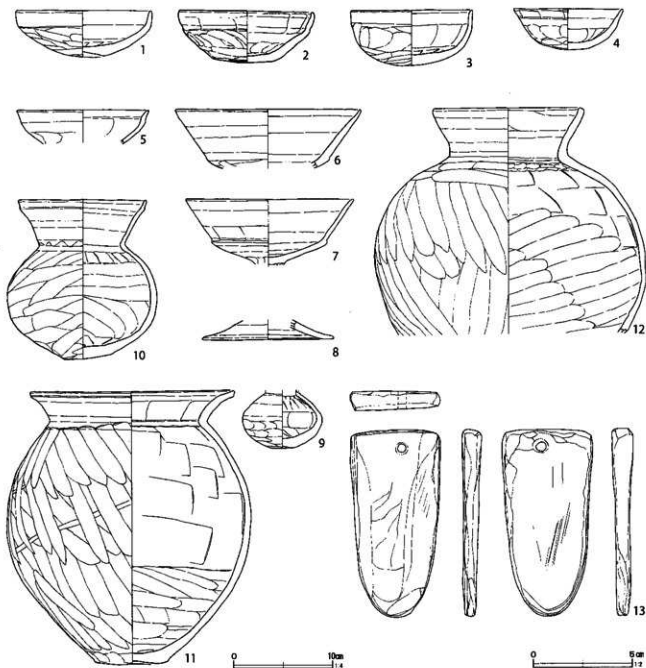
柱穴は、壁面に平行して4本を検出した。柱の規模は、小さく細い。柱間は、2.25m×2.20mである。北壁中央にカマド、北東隅に貯蔵穴を検出した。貯蔵穴は、円形で小規模な穴が二つ並ぶ。南東隅にも浅い円形のくぼみがあり、貯蔵穴と考えられる。壁周溝は、確認できなかった。

カマドは、袖・燃烧部の被熱痕跡、煙道等とても残りが良い。ただし、煙道は壁外へ長く伸びず、垂直に立ち上がる。袖は狭く、燃烧部の被熱痕跡も弱い。燃烧部に甕11が出土し、やや浮いた状態で坏3が出土した。カマドの焚口付近からは、剣形石製品13が出土した。

遺物は、①東北隅、②東南隅、③P4付近などから出土した。①は、貯蔵穴にかかわる遺物である。カマド内の甕11と接合する破片、坏1などが出土した。②からは、小型壺10が出土した。③は、壺



第28図 4次第26号住居跡



第29図 4次第26号住居跡出土遺物

12、坏4などが出土した。このほかに丸底壺9、坏2が、床面に接して出土した。

1～5は碗形の坏である。1は上げ底、他は丸底である。口縁部は内湾気味に立ち上がる。口唇部はすべて丸く作る。

6～8は、高坏である。6・7の口縁部は、やや直立気味だが、大きく「ハ」の字に開く。8は、高坏の脚裾部である。

9は、小型の丸底壺である。球形の胴部から口

縁部が、大きく「ハ」の字に伸びる。底部は細かなヘラケズリを施す。

10は、小型の壺である。球形の胴部からやや広口の頸部が、細長く伸びて2cmほど屈曲し、口縁部となる。胴部に穿孔はみられないが、須恵器の甕を模倣したと考えたい。

11は、甕である。口縁部は大きく「ハ」の字に広がる。口唇端部が平坦面を持つ。外面は細かく丁寧に削られる。12は、壺である。口縁部は、内

第7表 4次第26号住居跡出土遺物観察表

番号	種別	器種	残存率 (%)	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	胎土	焼成	色調	備考
1	土師器	碗形杯	60	13.3	4.1	4.6	角閃石・軽石	普通	橙色	利根川
2	土師器	碗形杯	100	13.3	6.0	5.2	角閃石・軽石・石英	普通	にぶい橙色	利根川
3	土師器	碗形杯	100	12.0	8.4	5.6	角閃石・軽石・鉄粒子	普通	橙色	利根川
4	土師器	碗形杯	90	10.8	7.0	4.1	角閃石・軽石・石英	普通	明赤褐色	利根川
5	土師器	碗形杯	5	13.0		(3.5)	角閃石・軽石・石英	普通	橙色	利根川
6	土師器	高杯	5	18.5		(5.9)	角閃石・軽石・石英	普通	黄褐色	利根川
7	土師器	高杯	10	16.7		(6.6)	角閃石・軽石・石英・鉄粒子	普通	橙色	利根川
8	土師器	高杯	5		12.9	(2.0)	石英・結晶片岩	普通	黄褐色	小山川
9	土師器	小型丸底壺	30		1.7	(5.9)	石英・片岩	良好	にぶい橙色	小山川
10	土師器	小型壺	100	12.7	4.9	16.0	角閃石・軽石・片岩	普通	黄褐色	利根川
11	土師器	甕	90	20.4	6.5	27.3	軽石・安山岩・片岩	普通	明赤褐色	利根川
12	土師器	甕	70	14.7		(22.4)	角閃石・軽石・安山岩	良好	にぶい橙色	利根川
13	石製品	剣形石製品	70	全長9.4 幅4.5 厚さ1.0 重さ65.3g			滑石		黒色	

湾しつつ立ち上がる。胴部は球胴となる。

13は、剣形の滑石製品である。上部に円形の穿孔がある。左右が細く研ぎこまれ、刃部とする。左右の端面は、平坦である。石製模造品である。

本住居跡は古墳時代Ⅲ期、5世紀前半～中葉である。

4次第28号住居跡 (第30～35区)

J-7グリッドに位置する。調査区の西側やや北に検出した。遺構の覆土と地山が近似し、遺構の検出が難しかったので、十字トレンチを設定し、床面と壁の立ち上がりの確認を行った。遺構の残存状態が良く、全体を検出できた。4次第1・2号溝跡、5次第20号住居跡と重複し、それより古い。規模は、南北6.91m、東西6.85m、深さ0.21mである。平面形は、正方形の竪穴住居跡である。長軸方位は、N-50°-Wである。

柱穴は、検出できなかった。西壁中央にカマド、南隅と西隅に貯蔵穴を検出した。床面の4か所に炭化物を検出した。貯蔵穴は、二か所とも円形で大型の土壇である。

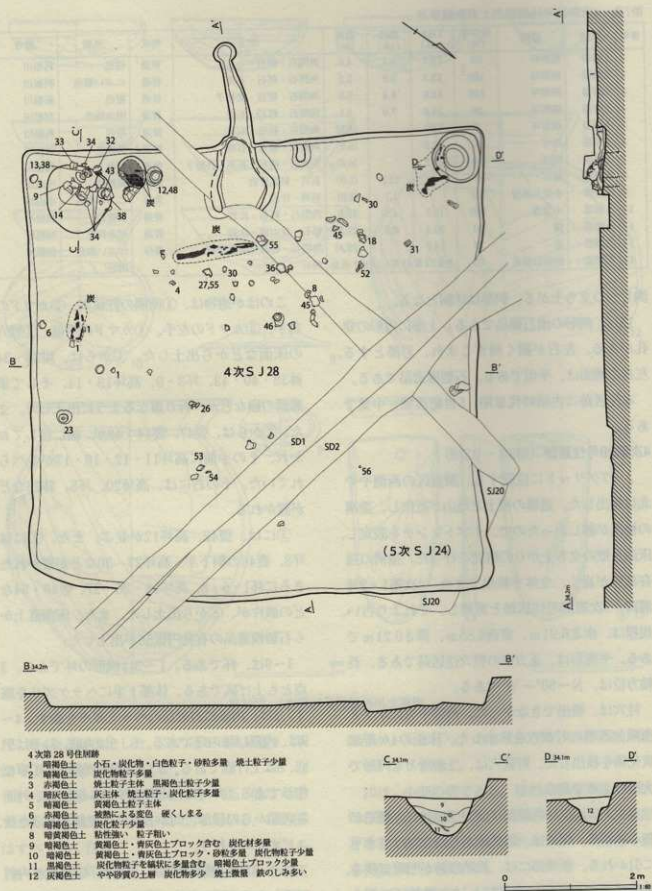
カマドは、広い燃焼部に甕が二つ並び、煙道が長く伸びる。煙道は、燃焼部から段をつけて水平に引かれる。燃焼部には、被熱痕跡が明瞭に残る。燃焼部のやや手前に高杯15と10を横並びに据え、その上に甕49と50をのせていた。さらに50の口を塞ぐように、高杯22の口縁部をのせていた。

このほか遺物は、①南隅の貯蔵穴、②カマドの右手、③カマドの左手、④カマドの手前、⑤竪穴の床面などから出土した。①からは、埴33・34、鉢38・40・43、杯3・9、高杯13・14、そして須恵器の皿などが、折り重なるように出土した。また、②からは、壺47、甕44・48が、袖に接しておかれ、その手前に高杯11・12・16・17が並べられていた。その右には、高杯20、杯5、鉢39などが置かれる。

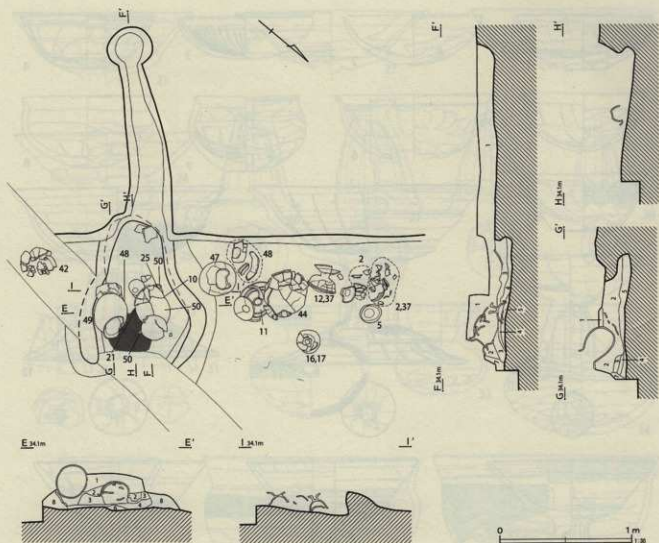
③には、甕42、高杯12が並ぶ。また、④には、杯8、壺46の胴下半、高杯27・30などが置かれた。さらに杯1・6・8、高杯18・26・27、壺46・54などの破片が、⑤から出土した。また、床面直上から石製模造品の有孔円板56が出土した。

1～9は、杯である。1～3は碗形の杯である。3点とも上げ底である。体部下半にヘラケズリを施す。3は、内面に放射状のヘラミガキを施す。4～9は、内斜口縁の杯である。5・6は丸底、7・9は平底、8は上げ底である。5・6は器肉が薄く、丁寧な作りである。7・9は、鉢形の杯である。9は、外面を底部から口縁部に向かってハケで掻き上げた後、ユビオサエを行う。

10～31は、高杯である。10は、口縁部が内斜口縁となる高杯である。脚部は口縁部に対して大きく、アンバランスである。11・12は、大型の高杯である。脚部部に段を設ける。20も共通の裾



第30図 4次第28号住居跡 (1)



第31図 4次第28号住居跡 (2)

部である。11は、裾部の外面にハケメを施した後、放射状のミガキを施す。口縁部の内面にも放射状のヘラミガキが施される。

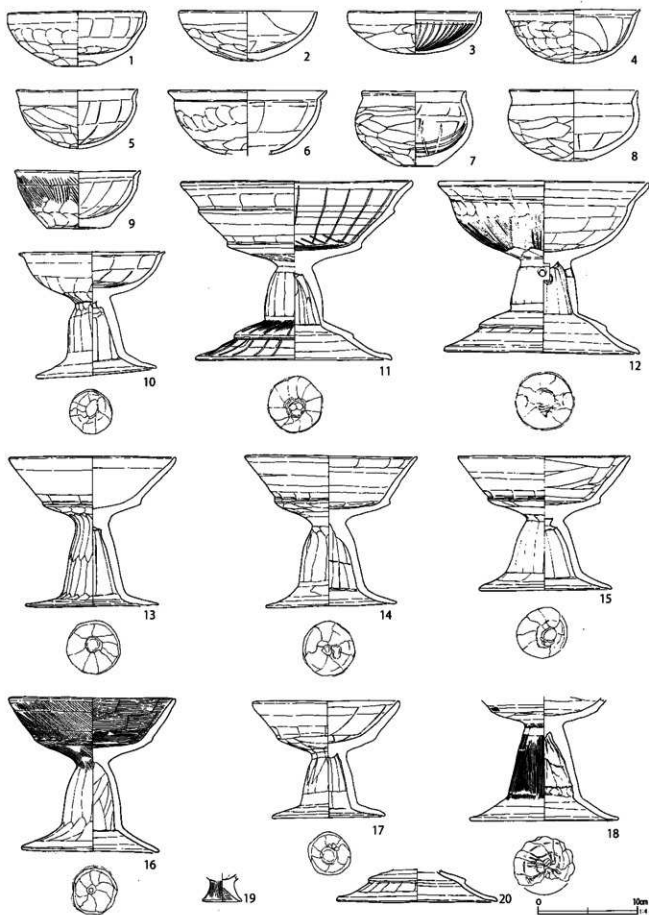
12の坏部は、半球形の体部から口縁部が大きく「ハ」の字に内湾する。外面には、くびれ部から口縁部に向かい粗いハケメを施したのち、ヘラケズリで調整する。脚部の上端には、円孔が正面と背面に開けられた。

13～18、21～24は、口縁部が大きく「ハ」の字に広がる高坏である。16・18は、口縁部、脚部にハケメが残るが、他はみられない。26～31は、高坏の脚部である。26・28は、脚部の一部にハケメを残す。18・26の脚部は直線的に伸びるが、他はラッパ状に広がる。脚部内面のヘラケズリは、

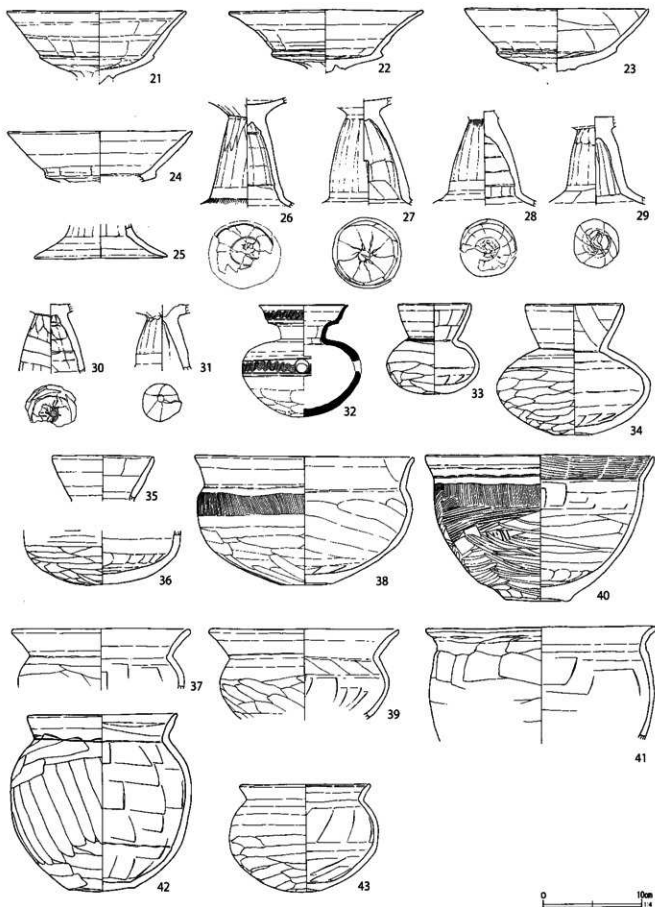
10～13・15・26・29が一段、14・16・17・27・28が二段で行われたが、18はヘラケズリを施さず、粘土紐巻き上げのままである。

32は、須恵器の甕である。無花果形の胴部に二条の界線を引き、中に細かな波状文を施す。界線の間に円形の穿孔が穿たれた。肩部は大きく張り、頸部は胴部最大径の半分ほどまで絞り込む。口縁部は緩く外反し、口唇部は凹字状にくぼむ。底部は、細かく丁寧に削り込まれる。

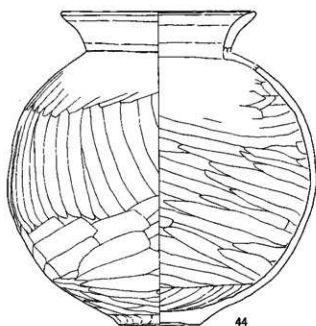
33は、小型の埴である。楕円形の胴部から「ハ」の字形に口縁部が広がる。頸部に細かなハケメの痕跡を確認できる。34・35は埴である。34は、33を大きくした器形である。器肉が厚く、胴下半は丁寧にヘラケズリされる。



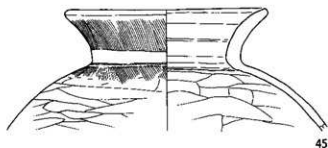
第32圖 4次第28号住居跡出土遺物 (1)



第33图 4次第28号住居跡出土遺物 (2)



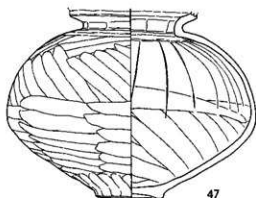
44



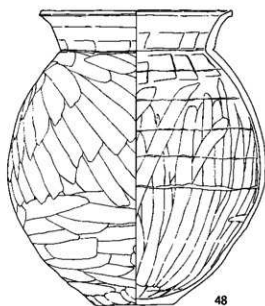
45



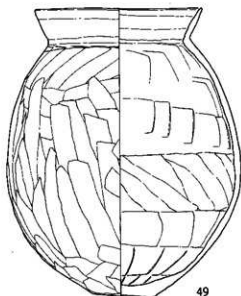
46



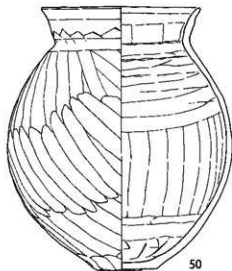
47



48



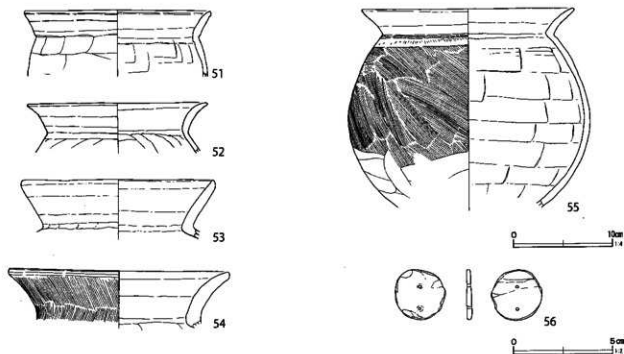
49



50



第34图 4次第28号住居跡出土遺物 (3)



第35図 4次第28号住居跡出土遺物 (4)

36は、壺、または鉢の底部である。37～41は、鉢である。38・40は、外面に縦方向のハケメを残す。40は、口縁部内面に横方向のハケメ、胴下半に横方向の細かなミガキが施される。40は、口縁部が内湾しつつ立ち上がるが、他は外反する。41は、器壁が薄く、外面のケズリも大雑把なことから煮沸具かもしれない。

42は、小型の甕である。球形の胴部に短く伸びる口縁部がつく。43は、小型の鉢または甕である。底部は上げ底である。外面に細かなヘラケズリが施される。44～46は、大型の壺である。44・45は、短口縁の甕である。口縁部は、緩く「ハ」の字に外反する。45・46は、口縁部、胴下半にハケメを施した後、ヘラケズリ調整を行う。44の胴部は丁寧なヘラケズリ調整が施される。45と46は、同一個体かもしれない。

47は、口縁部が二段となる複合口縁の壺である。肩が大きく張り、胴下半は直線的な器形である。胴部はやや歪で器肉も厚い。

48～52は、甕である。48～50・52は胴部に丸みのある長胴甕である。外面には、粗いヘラケズ

リが施される。53・54は、大型の壺の口縁部である。54の口縁部には、細かなハケメが施される。

55は、甕である。外面に粗いハケメが残る。胴下半は、粗いヘラケズリが施される。口縁部は「く」の字にきつく屈曲する。

56は、石製模造品である。滑石製の有孔円板である。径1mmの小孔が二つ穿たれる。表面を磨いた痕跡はなく、外周を円形に成形しただけである。本住居跡は、古墳時代Ⅳ期、5世紀中葉である。

4次第29号住居跡 (第36～38図)

K-9グリッドに位置する。調査区の西側中央に検出した。遺構の残存状態が良く、全体を検出できた。4次第83号土壌が重複し、それより古い。規模は、長軸3.59m、短軸3.07m、深さ0.54mである。平面形は、長方形の竪穴住居跡である。長軸方位は、N-7°-Eである。

柱穴は、長軸に平行して2本検出した。やや大きな柱穴である。北壁東よりにカマド、北東隅に貯蔵穴を検出した。円形で大型の貯蔵穴である。カマドの燃焼部には、甕が据えられていた。煙道が、第83号土壌によって壊されたため、長く伸び

第8表 4次第28号住居跡出土遺物観察表

番号	種別	器種	残存率 (%)	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	胎土	焼成	色調	備考
1	土師器	碗形杯	80	13.6	4.5	5.5	角閃石・軽石	良好	明赤褐色	利根川
2	土師器	碗形杯	70	13.7	2.6	5.0	角閃石・軽石	普通	にぶい、褐色	利根川
3	土師器	碗形杯	100	13.2	6.8	4.4	角閃石・軽石	普通	黄褐色	利根川
4	土師器	内斜口縁杯	70	13.4	3.0	5.4	角閃石・軽石	良好	にぶい、褐色	利根川
5	土師器	内斜口縁杯	100	12.1	9.0	5.9	結晶片岩・石英・片岩	不良	褐色	小山川
6	土師器	内斜口縁杯	30	15.8		(6.5)	結晶片岩・石英・片岩	普通	明赤褐色	小山川
7	土師器	内斜口縁杯	100	10.3	3.9	7.0	石英・結晶片岩	普通	明赤褐色	小山川
8	土師器	内斜口縁杯	80	12.7	3.9	7.2	角閃石・軽石	良好	明赤褐色	利根川
9	土師器	内斜口縁杯	100	12.4	5.1	5.8	角閃石・軽石・安山岩	良好	にぶい、赤褐色	利根川
10	土師器	高杯	90	14.6	11.8	12.3	角閃石・軽石	普通	褐色	利根川
11	土師器	大型高杯	90	23.1	19.5	17.9	角閃石・鉄粒子	普通	褐色	ローム台地
12	土師器	大型高杯	80	20.9	19.4	17.2	石英・金雲母・結晶片岩	普通	褐色	小山川
13	土師器	高杯	90	16.6	13.2	15.1	石英・結晶片岩	普通	明赤褐色	小山川
14	土師器	高杯	100	17.1	12.7	15.0	角閃石・軽石・安山岩	良好	褐色	利根川
15	土師器	高杯	70	17.1	13.1	13.4	角閃石・軽石・鉄粒子	普通	褐色	利根川
16	土師器	高杯	100	16.5	13.5	15.4	角閃石・軽石・安山岩	普通	褐色	利根川
17	土師器	高杯	90	14.5	11.3	11.7	石英・結晶片岩	不良	にぶい、褐色	小山川
18	土師器	高杯	20		14.7	(12.4)	角閃石・軽石	普通	明赤褐色	利根川
19	土師器	高杯	5		3.8	(2.8)	角閃石・軽石	普通	黄褐色	利根川
20	土師器	高杯	10		15.9	(3.3)	鉄粒子	普通	褐色	ローム台地
21	土師器	高杯	30	17.9		(7.3)	角閃石・軽石	普通	黄褐色	利根川
22	土師器	高杯	50	19.9		(6.4)	角閃石・軽石・鉄粒子	普通	褐色	利根川
23	土師器	高杯	50	18.5		(6.3)	鉄粒子・軽石	普通	にぶい、褐色	ローム台地
24	土師器	高杯	20	18.4		(5.2)	角閃石・軽石・鉄粒子	普通	にぶい、褐色	利根川
25	土師器	高杯	20		13.2	(3.5)	角閃石・石英・結晶片岩	普通	褐色	小山川
26	土師器	高杯	20			(11.1)	角閃石・軽石	普通	褐色	利根川
27	土師器	高杯	30			(11.0)	角閃石・軽石・石英	普通	褐色	利根川
28	土師器	高杯	20			9.6	石英・白色針状物質	普通	褐色	南武蔵
29	土師器	高杯	30			9.0	角閃石・軽石	普通	褐色	利根川
30	土師器	高杯	5			7.0	角閃石・軽石	普通	褐色	利根川
31	土師器	高杯	10			(6.7)	角閃石・軽石	普通	褐色	利根川
32	須恵器	甕	90	8.9	1.9	11.3	石英	良好	灰白色	陶邑
33	土師器	小型埴	100	7.2	2.6	9.1	角閃石・軽石	良好	褐色	利根川
34	土師器	埴	100	9.7	3.8	13.1	角閃石・軽石	良好	明赤褐色	利根川
35	土師器	埴	5	10.0			角閃石・軽石	良好	褐色	利根川
36	土師器	壺か鉢	10		2.9	(5.1)	結晶片岩・片岩・石英	普通	明赤褐色	小山川
37	土師器	鉢	5	17.6		(6.1)	鉄粒子・石英	良好	黄褐色	ローム台地
38	土師器	鉢	100	21.9	5.3	12.9	角閃石・鉄粒子	普通	黄褐色	ローム台地
39	土師器	鉢	10	18.8		(9.1)	鉄粒子・石英	普通	褐色	ローム台地
40	土師器	鉢	90	22.9	6.3	14.6	角閃石・軽石・安山岩	良好	褐色	利根川
41	土師器	鉢	5	23.0		(11.5)	角閃石・軽石	普通	明赤褐色	利根川
42	土師器	小型甕	80	14.9	6.8	17.8	石英・結晶片岩・雲母	不良	にぶい、褐色	小山川
43	土師器	小型鉢か甕	90	12.9	3.5	10.8	角閃石・軽石・鉄粒子	良好	明赤褐色	利根川
44	土師器	大型甕	50	19.3	8.0	(31.7)	片岩・石英・結晶片岩	良好	褐色	小山川
45	土師器	大型甕	20	19.9		(12.3)	角閃石・軽石・石英	普通	黄褐色	利根川
46	土師器	大型甕	10			9.4	角閃石・軽石・石英	良好	黄褐色	利根川
47	土師器	複合口縁甕	80		6.5	(18.7)	角閃石・軽石・石英	普通	にぶい、褐色	利根川
48	土師器	長胴甕	100	19.0	7.6	29.3	片岩・結晶片岩・金雲母	良好	にぶい、褐色	ローム台地
49	土師器	長胴甕	90	16.6	6.0	28.8	角閃石・石英・結晶片岩	普通	明赤褐色	小山川
50	土師器	長胴甕	80	15.7	5.9	26.5	石英・結晶片岩	普通	明赤褐色	小山川

番号	種別	器種	残存率 (%)	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	胎土	焼成	色調	備考
51	土師器	甕	5	18.5		(6.8)	角閃石・軽石	良好	にぶい橙色	利根川
52	土師器	長胴甕	5	17.7		(5.1)	安山岩・軽石・頁岩	普通	黄褐色	東毛地方
53	土師器	大型壺	5	19.0		(6.0)	角閃石・軽石・安山岩・石英	普通	褐色	利根川
54	土師器	大型壺	5	21.9		(5.6)	片岩・石英・結晶片岩	普通	黄褐色	小山川
55	土師器	甕	30	21.1		(20.1)	角閃石・軽石・石英	良好	にぶい橙色	利根川
56	石製製造品	有孔円板	95	全長2.5幅2.6厚さ0.3重さ2.4g			緑泥石片岩・滑石		オリーブ灰色	

るかわからない。しかし、煙道の底面が、壁面から0.3mで斜めに立ち上がり始めることから、それほど長いとは考えられない。

カマドの燃焼部には、まず高環18を倒置して支脚とし、その上に甕24を置いた。高環18から焚口にかけては、被熱痕跡を確認した。

遺物は、①カマドの左手、②カマドの前面、③貯蔵穴の周囲にまとまって出土した。①では、壺23が正位で置かれ、その上に環7を被せていた。②には、甕25や環4・6・10・12などがあり、③の環1・3・5・9・11・13・15、小型の鉢16などとともに環が、集中して出土した。このほか、竪穴住居の床面直上から高環17・21、環12・14などが出土した。なお、床面に炭化物が点在していた。

1～16は、環である。1～4は、口縁部が直立し、全体に丸みを持つ碗形の環である。底部は丸底である。5～12は、碗形の環である。5～8は、浅く口径の大きな碗であるが、9～12は、深く口径の小さな碗である。いずれも口縁部は内湾し立ち上がる。底部は、器肉が厚く上げ底である。

12は、須恵器環蓋模倣環である。底部の器肉がとて厚く、上げ底である。見込みも深く、外面の削り込みも少ない。13～15は、内斜口縁環である。半球形の底部から直立気味に立ち上がり、口縁部で小さく内斜する。13・14は丸底であるが、15は上げ底である。

16は、小型の鉢である。平底の鉢で小さな底部から「ハ」の字に大きく開く。

17～21は、高環である。17・18とも口縁部が大きく「ハ」の字に開く高環である。18は、絞り込みが小さく、柱状の脚部となる。ほかは、きつ

くくびれ、ラッパ状の脚部となる。21の脚中央付近には、円孔一つ穿つ。22は、高環の環部と脚部をつなぐいわゆる「へそ」である。

23は、大型の壺である。球形の胴部から口縁部が「く」の字に広がる。外面は丁寧にヘラケズリが施される。

24・25は、土師器の甕である。胴部の細長い長胴甕である。外面は粗くヘラケズリを施す。

26～31は、小型の壺である。26・27は、球形の胴部から口縁部が、「ハ」の字に直線的に開く。32は、大型の壺である。31・32を除き、上げ底である。

本住居跡は、古墳時代Ⅳ期、5世紀中葉である。

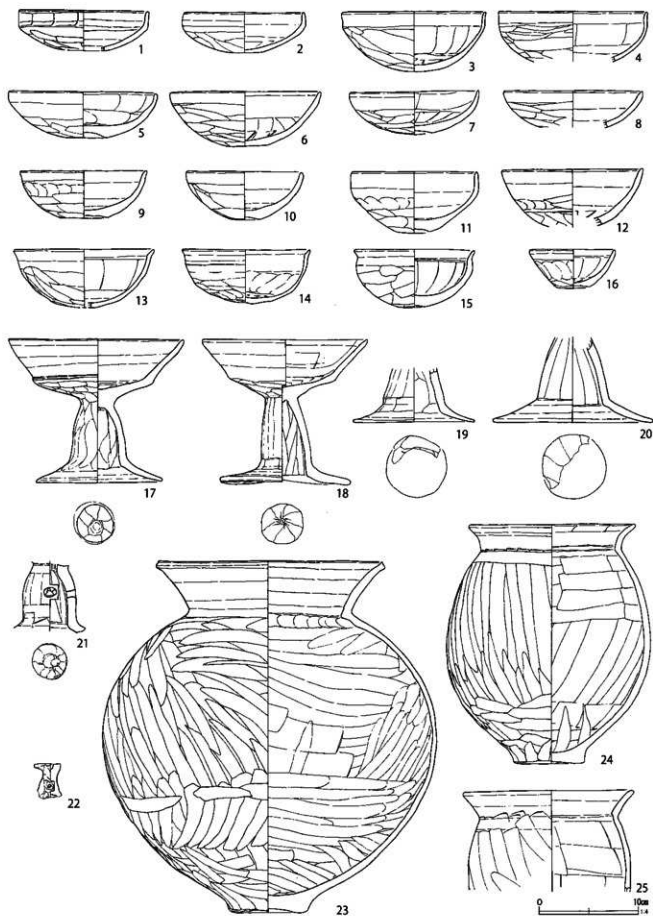
4次第31号住居跡（第39～42図）

L-8グリッドに位置する。調査区の中央付近に検出した。遺構の残存状態が良く、全体を検出できた。4次第30号住居跡、第1・2号溝跡、第2号井戸、第4号掘立柱建物跡と重複し、それらより古い。規模は、長軸5.98m、短軸5.91m、深さ0.29mである。平面形は、正方形である。長軸方位は、N-65°-Wである。

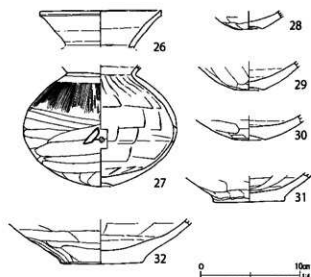
柱穴は、検出できなかった。西壁中央にカマドを検出した。カマドは、燃焼部が壁内に収まり、煙道が長く伸びる。煙道の先端はやや右に傾く。煙道の底面は、燃焼部から段をもって高い位置に作る。カマドの燃焼部には、高環5を倒置し、その上に甕21をのせていた。

遺物は、①カマドの右手、②カマドの左手、③住居跡の東側、④住居跡の西側に集中して出土した。①は、カマドの右袖から西壁に沿って土器が置かれていた。環3、壺22・24・置台16、高環6・8・11等が出土した。②は、土師器の破片が出土

— 54 —



第37图 4次第29号住居跡出土遺物 (1)



第38図 4次第29号住居跡出土遺物 (2)

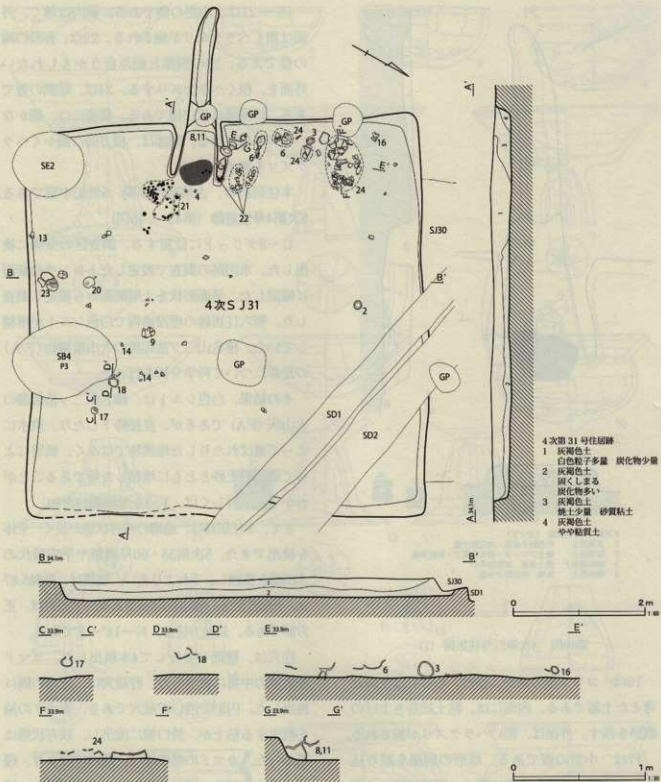
した。③からは、高坏9・13・14、甕20、壺23、小型壺17、鉢4等が出土した。とくに須恵器の鉢18も床面から浮いた状態で出土した。また、④は、坏2が出土した。

1～3は、坏である。1は、大きく内湾する碗形の坏である。2は、緩く内湾する碗形の坏である。3は、内斜口縁の坏である。見込みが深く、鉢形となる。底部は上げ底である。

4は、見込みの深い鉢である。口縁部は、外傾する。胴部は細かくヘラケズリが施される。底部は上げ底である。須恵器鉢18を模倣した土師器と考えられる。

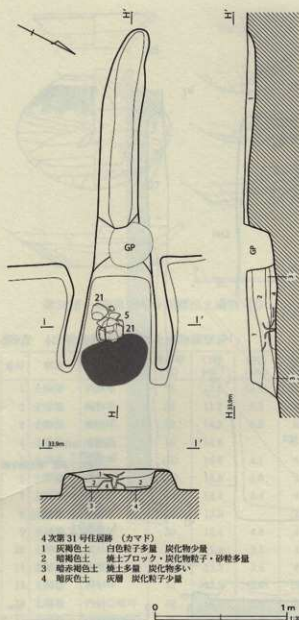
第9表 4次第29号住居跡出土遺物観察表

番号	種別	器種	残存率 (%)	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	胎土	焼成	色調	備考
1	土師器	碗形坏	70	12.8	(4.9)	(4.1)	角閃石・軽石・安山岩	良好	橙色	利根川
2	土師器	碗形坏	60	11.8	2.5	4.1	角閃石・軽石・石英	普通	橙色	利根川
3	土師器	碗形坏	50	14.2	5.8	6.1	角閃石片岩・石英	普通	にぶい橙色	ROOM台地
4	土師器	碗形坏	10	14.8		(5.2)	角閃石・片岩・鉄粒子	普通	橙色	小山川
5	土師器	碗形坏	100	14.6	4.1	4.6	石英	普通	橙色	ROOM台地
6	土師器	碗形坏	100	14.9	4.0	5.5	角閃石・軽石・石英	普通	橙色	利根川
7	土師器	碗形坏	100	12.8	3.4	4.3	角閃石・軽石	普通	橙色	利根川
8	土師器	碗形坏	10	13.9		(3.8)	角閃石・軽石・鉄粒子	普通	橙色	利根川
9	土師器	碗形坏	30	12.4	4.8	4.7	角閃石・軽石	普通	橙色	利根川
10	土師器	碗形坏	30	11.4	3.1	4.9	角閃石・軽石	良好	橙色	利根川
11	土師器	碗形坏	80	12.5	3.5	6.2	角閃石・軽石	普通	橙色	利根川
12	土師器	碗形坏	30	13.9	(2.0)	(5.9)	角閃石・結晶片岩・石英	普通	橙色	利根川
13	土師器	内斜口縁坏	20	14.0	9.6	(5.8)	角閃石・軽石	良好	橙色	利根川
14	土師器	内斜口縁坏	50	12.7	4.4	5.4	石英・軽石	良好	黄橙色	利根川
15	土師器	内斜口縁坏	90	11.9	2.2	5.8	石英・鉄粒子	良好	橙色	ROOM台地
16	土師器	小型鉢	50	8.4	3.2	3.9	石英・結晶片岩	良好	黄橙色	小山川
17	土師器	高坏	70	17.4	12.4	14.4	角閃石・鉄粒子	良好	橙色	ROOM台地
18	土師器	高坏	90	16.5	12.6	14.5	角閃石・鉄粒子	普通	橙色	ROOM台地
19	土師器	高坏	5		11.8	(5.4)	角閃石・軽石・石英	良好	橙色	利根川
20	土師器	高坏	20		15.7	(8.6)	角閃石・軽石・石英	普通	橙色	利根川
21	土師器	高坏	30			(7.1)	角閃石・軽石・鉄粒子	普通	橙色	利根川
22	土師器	高坏	5			(3.5)	角閃石・軽石	普通	橙色	利根川
23	土師器	大型壺	80	22.5	6.7	35.3	角閃石・軽石・鉄粒子	良好	橙色	利根川
24	土師器	長胴壺	100	16.3	7.1	24.0	石英・結晶片岩・黒雲母	普通	黄橙色	小山川
25	土師器	長胴壺	5	16.8		10.1	結晶片岩・石英	普通	にぶい橙色	小山川
26	土師器	小型壺	20	12.1		3.8	角閃石・軽石・石英	良好	橙色	利根川
27	土師器	小型壺	80		2.4	(12.3)	角閃石・軽石・石英	良好	橙色	利根川
28	土師器	小型壺	5		2.6	(1.9)	角閃石・軽石	普通	橙色	利根川
29	土師器	小型壺	5		2.7	(3.1)	角閃石・軽石・鉄粒子	普通	にぶい橙色	利根川
30	土師器	小型壺	10		3.3	(2.6)	角閃石・軽石・石英	良好	橙色	利根川
31	土師器	小型壺	10		6.8	(2.9)	結晶片岩・角閃石・雲母	普通	明赤褐色	小山川
32	土師器	大型壺	5		7.9	(4.5)	角閃石・軽石・石英	良好	橙色	利根川



5～15は、高坏である。5～9は、口縁部が「ハ」の字状に広がる高坏である。6・8は、台部が口縁部より飛び出し、つば状となる。5・7・14・15は、脚部が直線的だが、他はラッパ状である。11は、脚の裾部中央に凸線がめぐる。第32図11のよう

な器形の高坏と考えられる。12は、脚部の下方、正面と背面に米粒大の小孔を穿つ。5～12までは、脚の内面を一段で削り込む。13・14は、四段の粘土紐巻き上げの痕跡を残して一段で削り込む。15は削り込みが、裾部付近だけである。



第40図 4次第31号住居跡 (2)

16は、コップ型の鉢か、器台、もしくは支脚と考へた土器である。内面には、粘土紐巻き上げの痕跡を残す。外面は、粗いヘラケズリが施される。

17は、小型の壺である。球形の胴部を絞り込み、口縁部が「ハ」の字に開く。胴部は細かく削り込まれ、胴部上半のみ丁寧なヘラミガキを施す。

18は、須恵器の小型平底鉢である。底部は、ロクロからヘラで切り離される。底部の外周には、ヘラケズリを施す。胴部は直線的に立ち上がり、肩部は小さく屈曲する。口唇部が、「凹」字状にくぼむ。

19～21は、小型の甕である。器肉は薄く、外面は粗くヘラケズリが施される。22は、有段口縁の壺である。23の胴部と組み合うかもしれない。外面を、粗くヘラケズリする。24は、球胴の壺である。口縁部は素口縁である。肩部には、細かなハケメが施される。胴部は、横方向に細かくヘラケズリを施す。

本住居跡は、古墳時代Ⅳ期、5世紀中葉である。
5次第4号住居跡 (第43～46図)

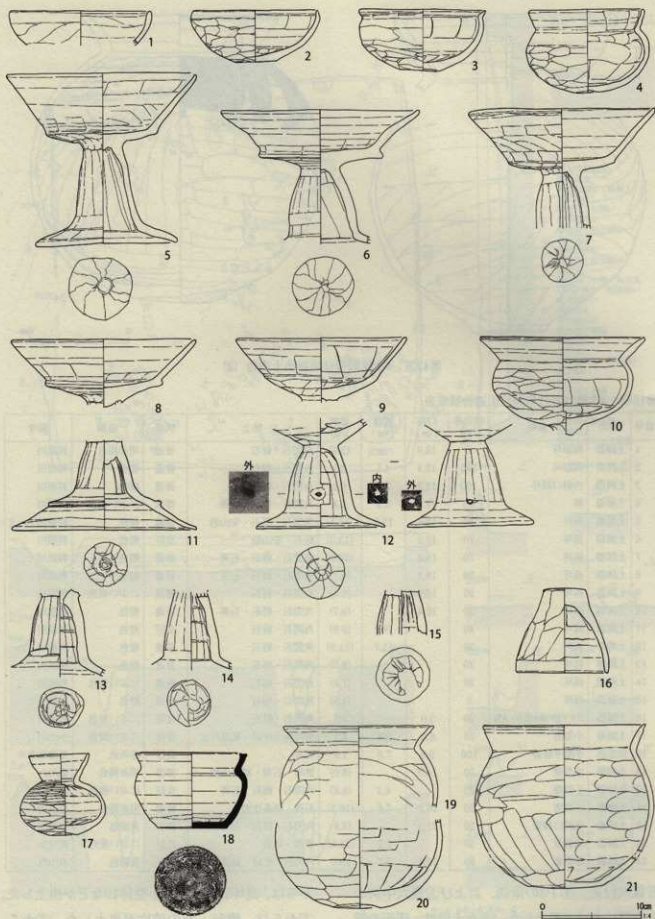
U-8グリッドに位置する。調査区の東側に検出した。水田跡の調査で設定したトレンチの断面に確認した。平面形状を土層断面から推定し調査した。竪穴住居跡の埋没過程で白色シルトが堆積していた。榛名山ニッ岳起源の火山堆積物(F A)の是非について科学分析を行った。

その結果、白色シルトは、榛名山ニッ岳起源の火山灰(F A)であるが、直接降下したり、洪水によって運ばれたりした堆積物ではなく、風雪によって周囲の土砂とともに堆積した層であることがわかった。詳しくは、V-3を参照願いたい。

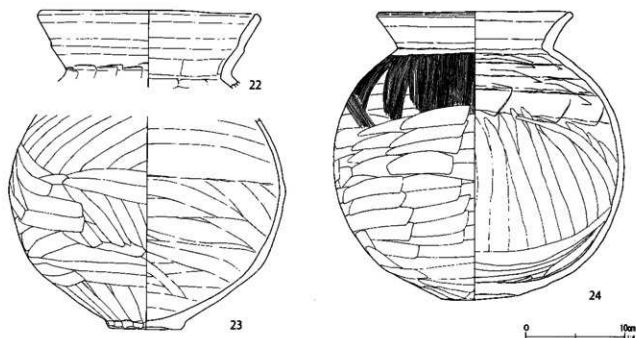
さて、本住居跡は、遺構の残存状態が良く、全体を検出できた。5次第33・60号溝跡や平安時代の水田跡と重複し、それより古い。規模は、長軸5.87m、短軸5.52m、深さ0.52mである。平面形は、正方形である。長軸方位は、N-14°-Eである。

柱穴は、壁面と並行して4本検出した。カマドを北壁の中央に検出した。貯蔵穴は、東南の隅に検出した。円形で浅い貯蔵穴である。カマドの袖を構成する粘土が、焚口側に流出し、残存状態は悪かった。カマドの燃焼部は、壁内に収まり、煙道が長く伸びる。煙道の先端はやや右に傾く。煙道の底面は、燃焼部から段をもって高い位置に作られる。カマドの燃焼部には、高坏8を倒置して支脚としていた。その上には甕26がのせられていた。カマド内には、高坏11の口縁部が転倒していた。

遺物は、①カマドの手前、②カマドの左手、③



第41图 4次第31号住居跡出土遺物 (1)



第42図 4次第31号住居跡出土遺物 (2)

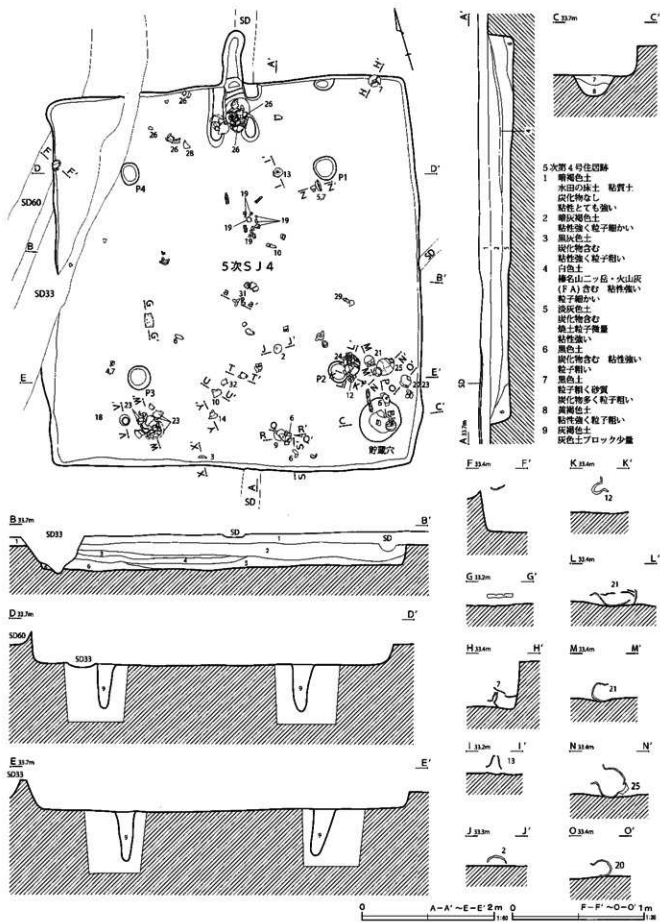
第10表 4次第31号住居跡出土遺物観察表

番号	種別	器種	残存率 (%)	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	胎土	焼成	色調	備考
1	土師器	碗形杯	5	13.9		(3.5)	角閃石・軽石	普通	明赤褐色	利根川
2	土師器	碗形杯	100	12.4	4.1	5.3	角閃石・軽石	普通	褐色	利根川
3	土師器	内斜口縁杯	100	12.3	3.9	6.2	角閃石・軽石	普通	褐色	利根川
4	土師器	鉢	80	11.4	2.2	8.4	角閃石・軽石・石英	普通	にぶい褐色	利根川
5	土師器	高坏	80	18.8	13.9	17.1	角閃石・軽石・安山岩	普通	褐色	利根川
6	土師器	高坏	70	19.8		(13.5)	軽石・安山岩	良好	褐色	利根川
7	土師器	高坏	70	18.4		(12.2)	角閃石・軽石・石英	普通	褐色	利根川
8	土師器	高坏	50	18.3		(6.7)	角閃石・軽石・石英	普通	褐色	利根川
9	土師器	高坏	50	16.9		(6.4)	角閃石・軽石	普通	にぶい褐色	利根川
10	土師器	高坏	30	16.4		(9.7)	角閃石・軽石・石英	普通	褐色	利根川
11	土師器	高坏	40		18.2	(8.9)	角閃石・軽石	良好	褐色	利根川
12	土師器	高坏	30		12.7	(11.0)	角閃石・軽石	普通	褐色	利根川
13	土師器	高坏	20			(8.7)	角閃石・軽石	普通	褐色	利根川
14	土師器	高坏	20			(7.8)	角閃石・軽石	普通	にぶい褐色	利根川
15	土師器	高坏	5			(4.5)	角閃石・軽石	普通	褐色	利根川
16	土師器	コップ形の鉢か番台・支脚	20	9.0		8.5	角閃石・軽石	普通	にぶい褐色	利根川
17	土師器	小型甕	90	6.0	2.6	8.1	角閃石・片岩・結晶片岩	良好	にぶい褐色	小山川
18	須恵器	小型平底鉢	100	9.9	7.0	7.6	石英	良好	赤灰色	東海地方か
19	土師器	小型甕	10	14.9		(8.0)	雲母・石英・結晶片岩	普通	明赤褐色	荒川か
20	土師器	小型甕	20		4.3	(8.8)	角閃石・軽石・石英	良好	にぶい褐色	利根川
21	土師器	小型甕	30	16.2	7.6	(16.3)	石英・結晶片岩	普通	明赤褐色	小山川
22	土師器	有段口縁壺	20	21.5		(7.8)	角閃石・軽石・石英	普通	黄褐色	利根川
23	土師器	球胴壺	30		7.2	(21.4)	雲母・片岩	良好	にぶい褐色	荒川か
24	土師器	球胴壺	60	19.4	7.7	29.0	角閃石・片岩・結晶片岩	良好	黄褐色	小山川

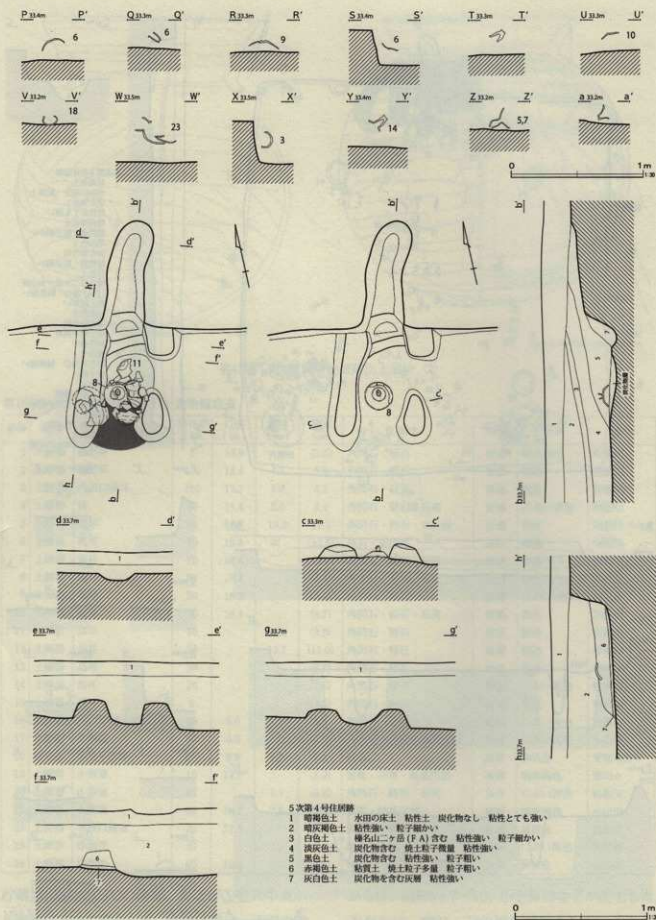
貯蔵穴付近、④ P3の南側、および⑤竪穴中央から南側にかけて出土した。主な土器は、床面や壁面との関係が分かるように横断面を作成した。①

からは、高坏5・7・10、小型鉢19などが出土した。

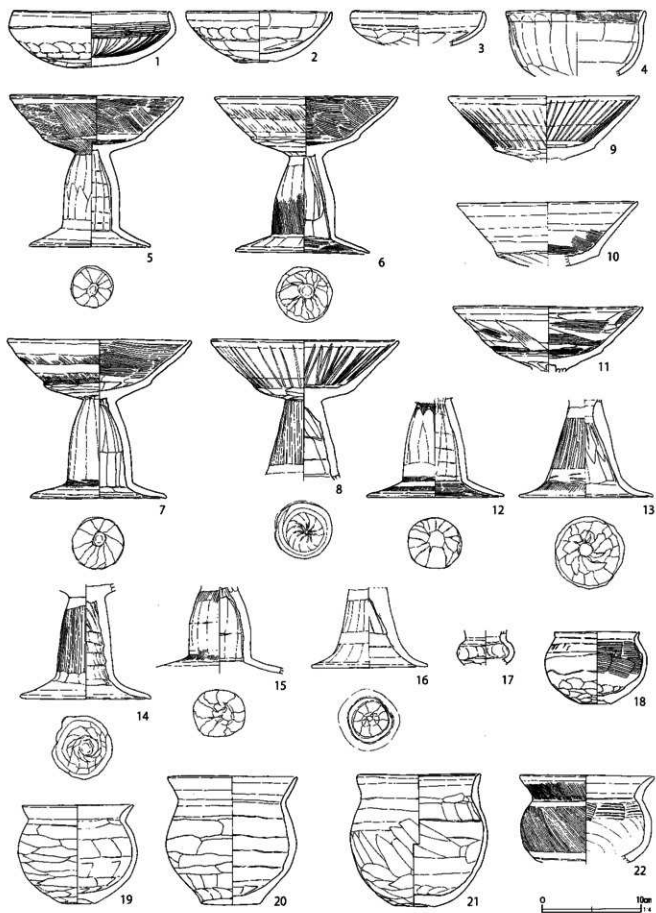
②からは、甕26・28の破片が出土した。③からは、坏1、高坏12、小型甕20・21、甕23・25・30、



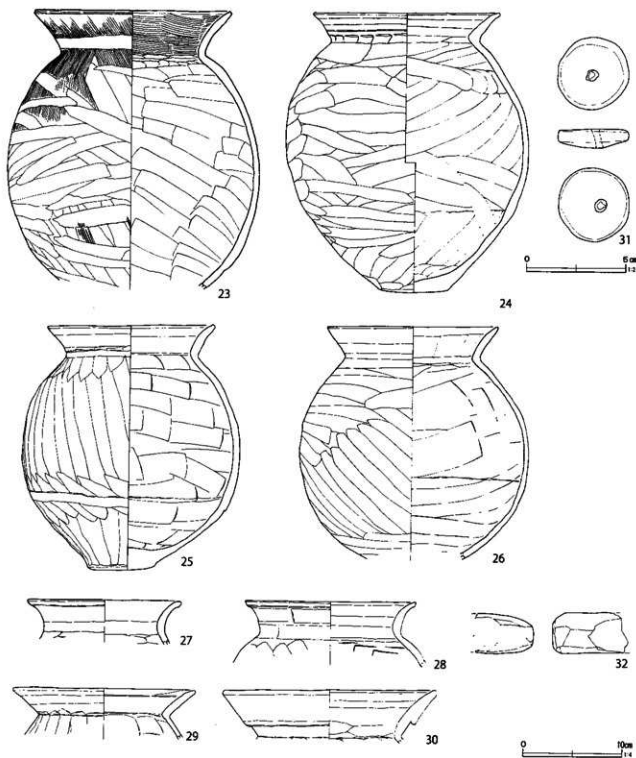
第43図 5次第4号住居跡 (1)



第44図 5次第4号住居跡 (2)



第45图 5次第4号住居跡出土遺物 (1)



第46図 5次第4号住居跡出土遺物 (2)

小型鉢22などが、貯蔵穴の周りを取り巻くように出土した。④からは、甕23、小型の鉢18等が出土した。⑤からは、坏3、高坏6・9・10・14、土製紡錘車31、砥石32等が出土した。

1～3は、坏である。1は、大振りの坏で口縁部は内湾する。底部内面に放射状のヘラミガキが施

され、口縁部の内側には、横方向のヘラミガキが施される。底部外面は、粗いヘラケズリがみられる。口縁部と体部の境は鮮明である。2は、浅い碗形の坏である。上げ底である。3は、扁平な坏である。

4は鉢である。口縁部が内斜し、深い。外面に

第11表 5次第4号住居跡出土遺物観察表

番号	種別	器種	残存率 (%)	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	胎土	焼成	色調	備考
1	土師器	坏	100	15.5	6.9	5.5	角閃石・軽石・鉄粒子	普通	淡褐色	利根川
2	土師器	碗形坏	100	14.6	3.5	5.1	角閃石・軽石	普通	淡褐色	利根川
3	土師器	坏	30	13.0		(3.5)	角閃石・軽石・鉄粒子	良好	褐色	利根川
4	土師器	鉢	10	13.8		(6.6)	角閃石・石英・結晶片岩	普通	褐色	小山川
5	土師器	高坏	70	17.3	12.0	15.2	角閃石・鉄粒子	普通	褐色	ローム台地
6	土師器	高坏	70	18.3	13.4	(15.7)	角閃石	普通	褐色	ローム台地
7	土師器	高坏	90	18.3	13.5	15.9	角閃石・鉄粒子	普通	褐色	ローム台地
8	土師器	高坏	70	18.7		(14.0)	角閃石・軽石・安山岩	不良	黄褐色	利根川
9	土師器	高坏	50	19.0		(6.7)	角閃石・軽石	良好	褐色	利根川
10	土師器	高坏	20	17.9		(6.4)	角閃石・軽石・石英	普通	褐色	利根川
11	土師器	高坏	30	18.9		(6.6)	角閃石・軽石・石英	良好	褐色	利根川
12	土師器	高坏	40			(10.0)	角閃石・軽石	普通	褐色	利根川
13	土師器	高坏	30		13.3	(9.8)	角閃石・軽石	普通	褐色	利根川
14	土師器	高坏	30		12.7	(11.6)	角閃石・軽石	普通	褐色	利根川
15	土師器	高坏	30			(8.7)	角閃石・軽石	普通	にぶい褐色	利根川
16	土師器	高坏	30		11.4	(8.0)	角閃石・軽石	普通	褐色	利根川
17	土師器	小型壺	20			(3.5)	角閃石・軽石	普通	褐色	利根川
18	土師器	小型鉢	100	8.4	3.0	7.2	角閃石・軽石	良好	褐色	利根川
19	土師器	小型鉢	50	11.0	3.0	9.8	角閃石・軽石	普通	明赤褐色	利根川
20	土師器	小型壺	100	12.9	5.8	12.9	角閃石・軽石・石英	普通	にぶい褐色	利根川
21	土師器	小型壺	100	12.2	4.1	13.2	石英・結晶片岩	不良	褐色	小山川
22	土師器	小型鉢	40	13.3		(8.9)	角閃石・軽石	普通	褐色	利根川
23	土師器	甕	70	19.6		(27.9)	角閃石・軽石・安山岩	普通	黄褐色	利根川
24	土師器	甕	80	18.5	6.7	28.0	角閃石・軽石・安山岩	普通	黄褐色	利根川
25	土師器	甕	90	16.6	6.7	24.4	結晶片岩・石英・片岩	普通	にぶい褐色	小山川
26	土師器	甕	50	16.9		(23.3)	結晶片岩・片岩・雲母	普通	明赤褐色	小山川
27	土師器	甕	5	15.0		(4.5)	角閃石・軽石・石英	普通	にぶい褐色	利根川
28	土師器	甕	5	17.0		(6.4)	角閃石・軽石・石英	良好	にぶい褐色	利根川
29	土師器	甕	5	17.9		(5.0)	角閃石・石英・結晶片岩	良好	にぶい褐色	小山川
30	土師器	壺	5	21.1		(5.3)	角閃石・結晶片岩・雲母	普通	黄褐色	荒川
31	土製品	紡錘車	100	全長3.7 幅3.5 厚さ1.0 重さ13.0g			角閃石・軽石・石英		灰黄褐色	利根川
32	石製品	砥石	40	全長(7.6)幅(6.2)厚さ4.1 重さ(271.9g)			凝灰岩		灰白色	

はたてにナデあげた痕跡が残る。口縁部内側には、ハケメが施される。

5～16は、高坏である。すべて口縁部は、直線的に大きく開く。8・9は、口縁部の内外面に放射状のヘラミガキを施す。とくに8の内面は、鋸歯状のヘラミガキが施される。他は、口縁部の内面、外面にハケメを丁寧に施す。

8・13・14・16は、脚部が直線的に伸びる。他の脚部はラッパ状に伸びる。8・13・14の脚部には、丁寧にヘラミガキが施される。6・12・13・15は、脚部の外面にハケメが残る。なかでも6・12は、脚部内面にもハケメが残る。

5・12は、脚部内面を一段のヘラケズリで削り込むが、粘土紐の巻き上げ痕跡を残す。6～8・13・15は、二段に分けて脚部内面のヘラケズリを行う。8・14・16は、脚部内面を削り込まず、粘土紐の巻き上げ痕跡をそのまま残す。

17は、小型の壺である。手捏ね成形のいわゆるミニチュア土器である。

18・19・22は、小型の鉢である。18は、口縁部が、内斜口縁状となる。内面に粗いハケメが残る。外面は、胴部下半に細かいヘラケズリを施す。19は、球形の胴部から広口の口縁部が、「ハ」の字状に伸びる。20・21は、小型の甕である。外

第12表 5次第41号住居跡出土遺物観察表

番号	種別	器種	残存率 (%)	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	胎土	焼成	色調	備考
1	土師器	高坏	60	20.9	17.0	16.8	角閃石・軽石・金雲母	普通	棕色	利根川
2	土師器	高坏	10			(8.4)	角閃石・軽石	普通	棕色	利根川
3	土師器	小型壺	90	14.2	4.3	16.3	角閃石・軽石・安山岩	普通	にぶい赤褐色	利根川
4	石製品	砥石	40	全長(8.5)幅6.5厚さ4.6重さ393.8g			凝灰岩		灰白色	
5	石製品	砥石	80	全長10.2幅4.5厚さ1.7重さ95.3g			凝灰岩		灰白色	

面は粗く削り込まれる。20の内面は、輪積み痕跡を明瞭に残す。21は、口唇部が沈線状にくぼむ。22は、外面に粗いハケメを明瞭に残す。

23～29は、土師器の甕である。23は口縁部が長く「ハ」の字状に伸びる甕である。口縁部の内面、口縁部から肩部にかけての外面に粗いハケメが残る。胴部は粗いヘラケズリが施される。23～24は、外面を粗くヘラケズリしたままの甕である。4点ともやや細長い球胴の甕である。

30は、折り返し口縁の壺である。

31は、土製の紡錘車である。紡輪を通す孔が、斜めに開く。

32は、凝灰岩製の砥石である。擦痕を二面確認できる。

本住居跡は、古墳時代Ⅳ期、5世紀中葉である。

5次第41号住居跡 (第47図)

R-5グリッドに位置する。調査区の東側に検出した。5次第5号住居跡の床面精査中に検出した。5次第5号住居跡より古い。液状化現象によって覆土に亀裂が走り、砂が噴出した。平面形は、ややいびつな正方形である。

周溝が四周に巡る。柱穴は確認できなかった。北壁近くに焼土を確認した。炉跡もしくはカマドの焚口と考えられる。貯蔵穴が、東南隅に検出された。方形の浅い貯蔵穴である。

遺物は、貯蔵穴内から高坏1や小型壺3が出土した。ほかに覆土中から砥石4・5が出土した。

1・2は、高坏である。口縁部が、大きく「ハ」の字に開く。脚部は細く絞り込まれ、内面を二段で削り込む。

3は、小型の壺である。口縁部が「く」の字に広がる。口縁部と肩部にハケメが施される。外面は

丁寧なヘラケズリが施される。

4と5は、凝灰岩製の砥石である。4は5面、5は4面に加工の痕跡がみられる。

5次第43号住居跡 (第48図)

I-2グリッドに位置する。調査区の北西端に検出した。5次第74号土壇と重複し、それより古い。表土を除去したのち、遺構確認面までに多量の土器片(奈良時代から平安時代の土師器や須恵器)や焼土を含んだ黒色土層があった。この層を除くと、古代の遺構確認面となり、5次第26号住居跡を検出した。しかし、同住居跡の下層からさらに古墳時代前期の土師器壺や甕が出土した。そこで、遺構の全体形状は不明だが、ここに古墳時代前期の竪穴住居跡を想定した。破線は、竪穴住居跡の推定範囲である。

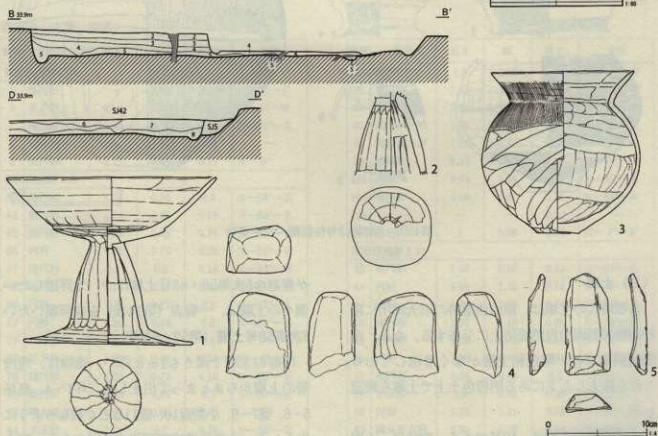
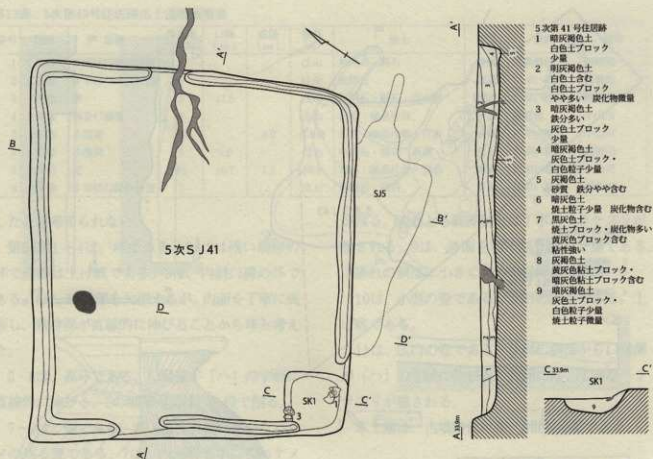
1・2・8は、S字状口縁台付甕である。1・2は口縁部破片、8は、胴部と台部の接合部にあたる。8は、細かなハケメが残る。

3と7は、壺である。口縁部を小さく折り返す。3は、外面に細かな縦方向のハケメを施し、内面に横方向のハケメを施す。7は、球形の胴部に細口の口縁部がつく。胴部外面には、縦方向に細かなヘラミガキを施す。

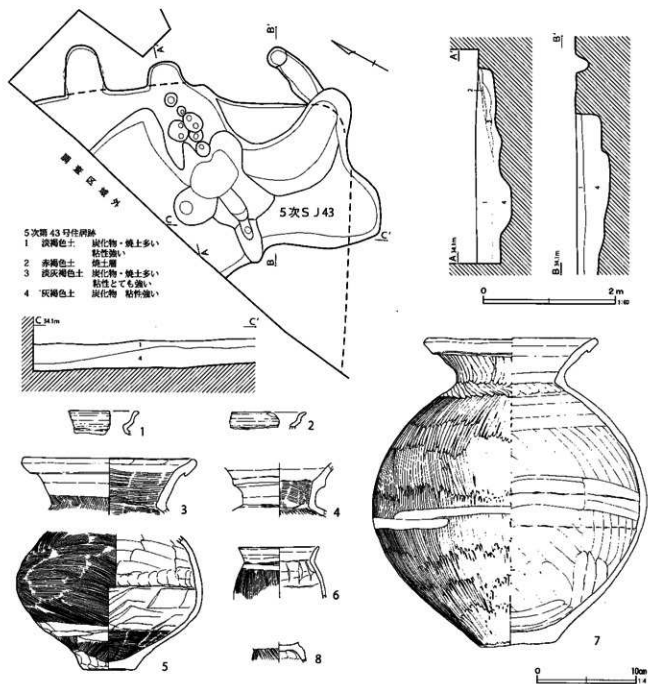
4・5は、小型壺である。4は、口縁部が二段となる複合口縁壺である。頸部内面に横方向のハケメが残る。5は、無花果形の壺である。胴部外面に粗いハケメ調整が施される。底部内面にも横方向のハケメが施された。

6は、小型の甕である。外面に細かなハケメを施す。

本住居跡は、古墳時代Ⅰ期、4世紀である。



第47図 5次第41号住居跡・出土遺物



第48図 5次第43号住居跡・出土遺物

(2) 土壌

古墳時代の土壌は、皿沼西遺跡の旧大堀川に臨む南側傾斜面や自然堤防上に分布する。なお、南側傾斜面には、黒色粘土層が厚く堆積しており、これを除去した下にある明橙色土上で土壌を確認した。

古墳時代の土壌は、42基である。形状は、小型で円形、楕円形などが多い。ここでは、出土遺物

が豊富な5次第58・63号土壌について詳述したい。個々の土壌は、一覧表（第14表）を参照願いたい。

5次第58号土壌（第52・53図）

円形の土壌で深さも1mと深い。遺物は、埋没層の上層からまとまって出土した。坏1~4、高坏5・6、甕7~9、小型壺10、壺11などが重なるように出土した。古代の遺構確認面で確認できた。竪穴住居跡の貯蔵穴よりも大きく、貯蔵穴だけが残存

第13表 5次第43号住居跡出土遺物観察表

番号	種別	器種	残存率 (%)	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	胎土	焼成	色調	備考
1	土師器	S字状口縁台付甕	5			(2.4)	角閃石・軽石	普通	浅黄褐色	利根川
2	土師器	S字状口縁台付甕	5			(1.8)	角閃石	普通	にぶい・橙色	利根川
3	土師器	甕	5	17.0		(5.6)	角閃石・軽石・安山岩	普通	にぶい・橙色	利根川
4	土師器	複合口縁壺	5			(5.4)	石英・結晶片岩	普通	黄褐色	小山川
5	土師器	小型壺	40		4.9	(13.6)	石英・結晶片岩・片岩	普通	にぶい・橙色	小山川
6	土師器	小型甕	5	7.9		(5.2)	角閃石・軽石・石英	良好	にぶい・橙色	利根川
7	土師器	壺	60	16.7	7.5	30.9	石英・結晶片岩・頁岩	普通	にぶい・橙色	小山川
8	土師器	S字状口縁台付甕	5			(2.1)	角閃石・軽石	普通	にぶい・橙色	利根川

したとは考えられない。

第53図1～4は、坏である。1・2は浅い碗形の坏で底部は上げ底である。3は、内斜口縁の坏である。4は、口縁部を欠損するが、内面を丁寧に成形し、残存部が直線的に伸びることから坏と考えた。

5・6は、高坏である。口縁部が「ハ」の字形に直線的に伸びる。5の脚部内面は、一段で削る。

7～9は、甕である。7・8は、外面に細かなハケメの残る甕である。7は、内面胴下半にもハケメ

が残る。両者とも底部付近は丁寧にヘラケズリが施される。9は、外面を粗く削り込んだ甕である。下膨れの胴部に小さく開く口縁部が付く。

10は、小型の壺である。球形の胴部である。上げ底である。

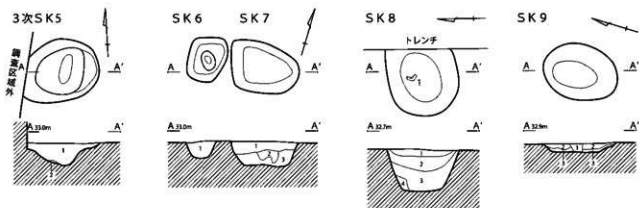
11は、広口の壺である。球形の胴部から口縁部が「ハ」の字状に伸びる。外面には、丁寧にヘラケズリが施される。

本土壌は、古墳時代IV期、5世紀中葉である。

第14表 土壌一覧表

番号	形状	長さ	幅	深さ	方位
厩沼西遺跡3次					
5	楕円形	—	0.93	0.32	N—2°—E
6	正方形	0.68	0.57	0.25	N—7°—W
7	楕円形	1.03	0.76	0.36	N—73°—E
8	(楕円形)	—	1.06	0.64	—
9	楕円形	1.15	0.84	0.12	N—0°
厩沼西遺跡4次					
63	楕円形	1.34	0.84	0.2	N—55°—E
64	楕円形	2.76	1.26	0.19	N—89°—E
65	楕円形	1.31	0.83	0.24	N—59°—E
66	円形	0.82	0.73	0.28	N—74°—E
67	楕円形	1.2	0.9	0.18	N—33°—W
68	楕円形	1.18	0.74	0.24	N—15°—E
69	円形	0.8	0.77	0.8	N—12°—E
70	円形	0.59	0.48	0.6	N—68°—E
71	(楕円形)	—	0.98	0.4	—
72	正方形	1.04	0.88	0.18	N—9°—W
76	楕円形	1.25	0.72	0.16	N—89°—E
80	楕円形	1.38	0.87	0.3	N—57°—W
83	隅丸長方形	0.96	0.63	0.23	—
84	不正形	1.81	0.7	0.28	N—50°—E
85	楕円形	1.12	0.56	0.2	N—47°—E
91	楕円形	1.34	0.9	0.45	N—46°—E

番号	形状	長さ	幅	深さ	方位
92	楕円形	1.3	0.92	0.23	N—18°—W
93	楕円形	1.35	0.9	0.2	N—23°—W
95	楕円形	0.86	0.7	0.16	N—12°—E
97	隅丸長方形	1.96	0.84	0.84	N—50°—E
98	隅丸長方形	1.26	0.42	0.24	N—89°—W
99	楕円形	1.23	0.84	0.52	N—74°—E
101	円形	0.74	0.65	0.28	N—13°—E
102	楕円形	0.96	0.61	0.31	N—81°—W
106	—	—	—	0.22	—
107	円形	1	0.98	0.08	N—7°—E
厩沼西遺跡5次					
43	楕円形	1.58	0.75	0.52	N—81°—E
44	円形	1.49	1.32	0.14	N—3°—E
47	円形	1.23	1.05	0.14	N—60°—E
48	楕円形	1.57	1.16	0.08	N—59°—W
49	楕円形	1.29	0.73	0.18	N—41°—W
50	円形	1.03	0.98	0.24	N—77°—W
51	楕円形	0.94	0.68	0.3	N—10°—E
57	不正形	1.8	0.44	0.36	N—30°—E
58	円形	1.36	1.11	0.68	N—15°—W
63	隅丸長方形	2.33	0.76	0.24	N—51°—W
65	不正形	1.7	1.1	0.37	N—54°—E



3次第5号土層

- 1 暗灰褐色土 黒色粘土ブロック・灰色粘土ブロック少量 粘質土 粘性ややあり やや砂質が強い シルト
- 2 灰白色土

3次第6・7号土層

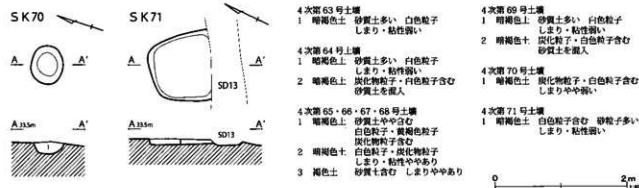
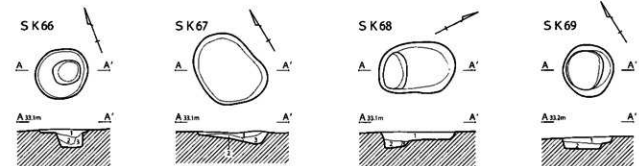
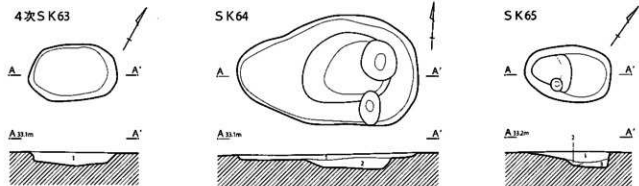
- 1 灰褐色土 黒色粘土ブロック少量
- 2 灰褐色土 灰色粘土ブロック・砂少量
- 3 暗灰褐色土 黒色粘土ブロックやや多量 粘質土

3次第8号土層

- 1 黒色土 浅部山形礫石やや多い 灰色粘土ブロック少量
- 2 暗褐色土 炭化物まばらに含む 灰色粘土ブロックやや多い 礫が点在する
- 3 暗灰色土 灰色粘土ブロック少量 礫が点在 粘性強い
- 4 黄灰色土 粘質土 砂多量

3次第9号土層

- 1 灰褐色土 黒色粘土ブロック少量
- 2 灰褐色土 黒色粘土ブロック少量
- 3 暗灰褐色土 黒色粘土ブロックやや多量



4次第63号土層

- 1 暗褐色土 砂質土多い 白色粒子 しまり・粘性弱い

4次第64号土層

- 1 暗褐色土 砂質土多い 白色粒子 しまり・粘性弱い
- 2 暗褐色土 炭化物粒子・白色粒子含む 砂質土を混入

4次第65・66・67・68号土層

- 1 暗褐色土 砂質土やや含む 白色粒子・暗褐色粒子 炭化物粒子含む
- 2 暗褐色土 白色粒子・炭化物粒子 しまり・粘性ややあり
- 3 褐色土 砂質土含む しまりややあり

4次第69号土層

- 1 暗褐色土 砂質土多い 白色粒子 しまり・粘性弱い
- 2 暗褐色土 炭化物粒子・白色粒子含む 砂質土を混入

4次第70号土層

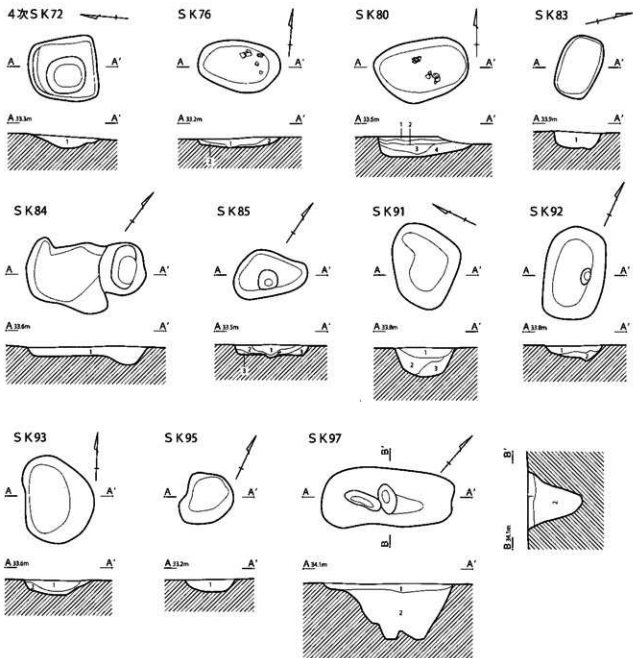
- 1 暗褐色土 炭化物粒子・白色粒子含む しまりやや弱い

4次第71号土層

- 1 暗褐色土 白色粒子含む 砂粒多い しまり・粘性弱い

0 2m

第49図 土層 (I)



4次第 72 号土壌

1 暗褐色土 砂質 しまりやや弱い

4次第 76 号土壌

1 暗褐色土 暗褐色粘土・灰色粘土・暗褐色砂粒
2 暗褐色土 砂質 灰色粘土多量

4次第 80 号土壌

1 暗褐色土 浅間山 B 軽石やや多量 黒色粘土わずか
2 暗褐色土 粘土質 浅間山 B 軽石少量 黒色粘土わずか 全体に黄色味がかかる
3 灰色土 粘土質 浅間山 B 軽石わずか 黒色粘土わずか
4 暗褐色土 粘土質 暗褐色砂粒やや多量 黒色粘土わずか

4次第 83 号土壌

1 暗褐色土 砂粒多量 焼土粒子少量 粘性ややあり

4次第 84 号土壌

1 黒褐色土 鉄分を帯びる灰色土ブロック少量

4次第 85 号土壌

1 暗褐色土 酸化粘土少量
2 暗褐色土 炭化ブロック 焼土ブロック多量
3 暗褐色土 炭化物・焼土粒子少量

4次第 91 号土壌

1 黒褐色土 砂粒・白色粘土含む しまりやや弱い
2 暗褐色土 砂粒・白色粘土含む しまりやや弱い
3 黒褐色土 砂粒主体

4次第 92 号土壌

1 黒褐色土 白色粘土・暗褐色粘土・ブロック・砂粒含む
2 暗褐色土 白色粘土・暗褐色粘土・砂粒含む

4次第 93 号土壌

1 暗褐色土 黒褐色土粒子少量
2 黒褐色土 暗褐色土粒子・砂粒多量

4次第 95 号土壌

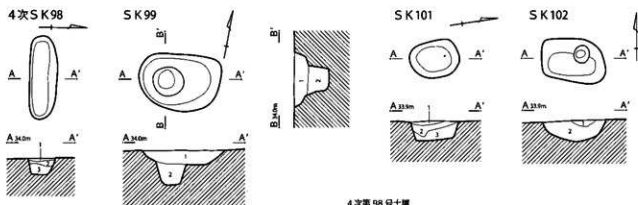
1 黒褐色土 青灰色土粒子少量

4次第 97 号土壌

1 暗褐色土 浅間山 B 軽石やや多量 焼土粒子極微量
2 暗褐色土 浅間山 B 軽石わずか 暗褐色砂粒少量

0 2m

第50図 土壌 (2)



4次第 98 号土壇

- 1 暗褐色土 ちげ茶味の強い砂質浅黒山 B 軽石灰色砂粒少量
- 2 暗褐色土 ちげ茶味の強い砂質浅黒山 B 軽石微量 灰色砂粒やや多量
- 3 暗褐色土 ちげ茶味の強い砂質浅黒山 B 軽石微量 灰色砂粒多量

4次第 99 号土壇

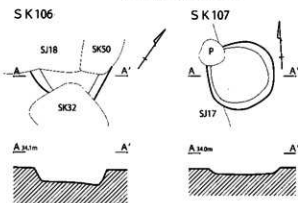
- 1 暗褐色土 粘質土 焼土粒子少量 炭化物微量
- 2 暗褐色土 風味がかった粘質土 焼土粒子少量 炭化物極微量

4次第 101 号土壇

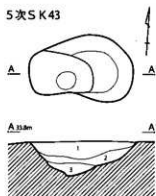
- 1 暗褐色土 灰色砂層・褐色砂層
- 2 暗褐色土 浅黒山 B 軽石やや多量 焼土粒子微量
- 3 暗褐色土 砂質

4次第 102 号土壇

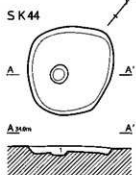
- 1 黄褐色土 砂質 白色焼粒子・焼土粒子微量
- 2 黒褐色土 粘土質 白色焼粒子微量



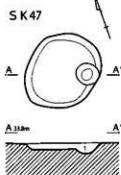
5次 SK 43



SK 44



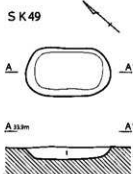
SK 47



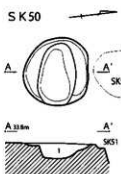
SK 48



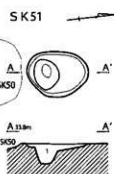
SK 49



SK 50



SK 51



5次第 43 号土壇

- 1 黒灰色土 灰褐色土ブロック多量 白色粒子・炭化物含む
- 2 黒灰色土 砂質 灰褐色土ブロック少量 粒子細かい
- 3 暗褐色土 炭化物粒子含む

5次第 44 号土壇

- 1 黒灰色土 黒灰色土ブロック含む 粘性強い

5次第 47 号土壇

- 1 褐灰色土 粘土ブロック少量

5次第 48 号土壇

- 1 暗褐色土 粘土ブロック含む

5次第 49 号土壇

- 1 褐灰色土 粘土ブロック少量

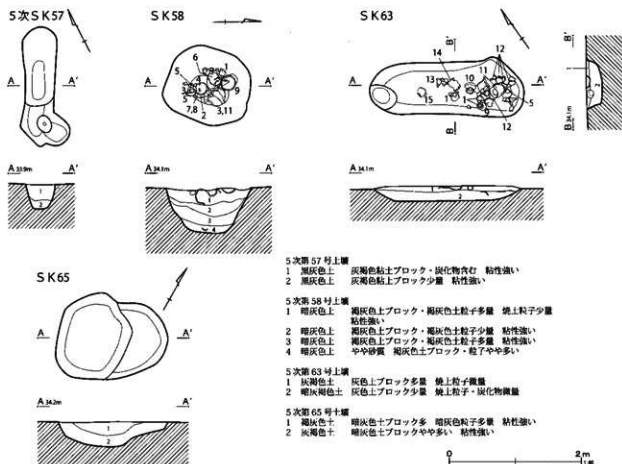
5次第 50 号土壇

- 1 暗褐色土 粘土ブロックやや多い 白色粒子少量

5次第 51 号土壇

- 1 暗褐色土 粘土ブロックやや多い 白色粒子少量

第51図 土壇 (3)



第52図 土壌 (4)

第15表 5次第58号土壌跡出土遺物観察表

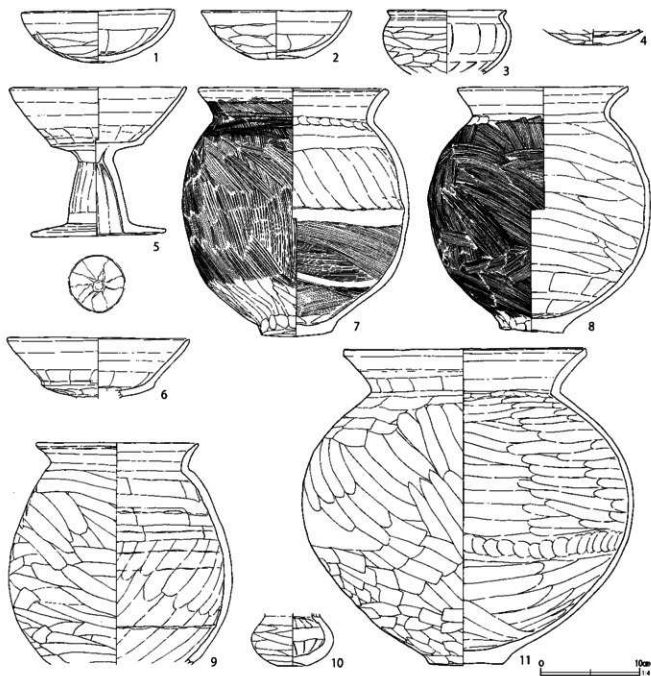
番号	種別	器種	残存率 (%)	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	胎土	焼成	色調	備考
1	土師器	碗形坏	90	15.3	2.4	5.2	角閃石・軽石・石英	普通	棕色	利根川
2	土師器	碗形坏	90	14.9	4.7	4.8	角閃石・軽石	普通	にぶい棕色	利根川
3	土師器	内斜口縁坏	20	11.8		(6.5)	角閃石・軽石	普通	黄棕色	利根川
4	土師器	坏	20		3.4	(1.6)	角閃石・軽石	普通	黄棕色	利根川
5	土師器	高坏	80	17.5	13.0	14.9	角閃石・軽石・鉄粒子	普通	棕色	利根川
6	土師器	高坏	20	18.2		(6.0)	石英・鉄粒子	普通	棕色	ローマ台地
7	土師器	甕	70	18.6	7.0	24.8	角閃石・軽石・雲母	普通	にぶい棕色	利根川
8	土師器	甕	90	17.1	6.8	24.5	角閃石・軽石・結晶片岩	不良	にぶい棕色	利根川
9	土師器	甕	50	16.0		(22.3)	角閃石・結晶片岩・金雲母	良好	棕色	小山川
10	土師器	小型壺	50		2.8	5.3	角閃石・軽石	普通	棕色	利根川
11	土師器	広口壺	70	24.2	7.4	(31.7)	角閃石・軽石・頁岩	普通	にぶい棕色	利根川

5次第63号土壌 (第52・54図)

長い隅丸長方形の土壌で、深さは0.2mと浅い。遺物は、南半の埋没層上層に折り重なるように出土した。古代の遺構確認面で確認できた。高坏1・2・5、小型鉢10、甕11～14、甗15等がみられる。木棺墓とも考え、棺材や炭化物の確認に努めたが、確認できなかった。

5次第58・63号土壌とも土器が、豊富に出土した。しかし、出土した土器は、一般の竪穴住居跡の出土土器と器種や使用痕跡などに大差がない。よって、祭祀や儀礼に用いた特殊な土器ではない。

第54図1～8は、高坏である。1・3・4は、口縁部が「ハ」の字状に伸びる。2は、浅い碗形の坏部が内湾して伸びる。2・3は、坏部底面に粗いハケ



第53図 5次第58号土壌出土遺物

メが残る。5は、裾部が二段となる。脚部の内面は、一段のヘラケズリが施されるが、3・6・7は、粘土紐巻き上げの痕跡を残す。

9は、甕である。焼成後、底部の中心が穿孔されている。胴部は、算盤玉形である。口縁部は、段を持って立ち上がる。須恵器の甕を模倣したと考えられる。外面は丁寧に削り込まれる。

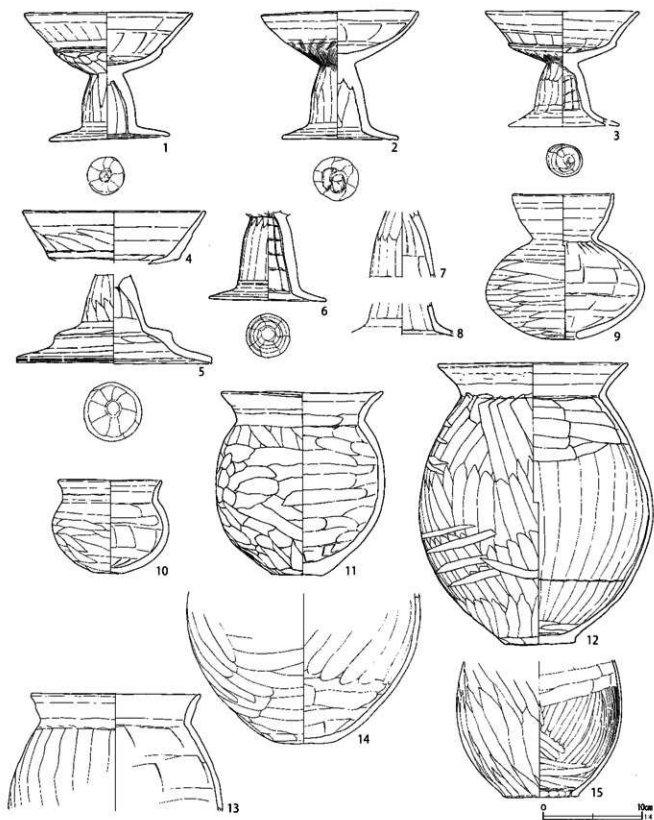
10は、小型の鉢である。広口の鉢で口縁部が、小さく伸びる。上げ底である。

11は、小型の甕である。外面は細かく削られ、底部は平底である。

12～14は、甕である。胴部がやや下膨れの甕である。外面を粗く削った後、部分的にヘラミガキを施す。13と14は、接合点はないが、同一個体の可能性がある。

15は、甕である。器肉はとても薄い。やや細長い球形の胴部である。底部は筒抜けである。

本土産は、古墳時代Ⅳ期、5世紀中葉である。



第54図 5次第63号土坑出土遺物

3次第8号土坑 (第49・55図)

第55図1が、土坑の底に貼り付くように出土した。S字状口縁台付甕である。肩部に三条の横

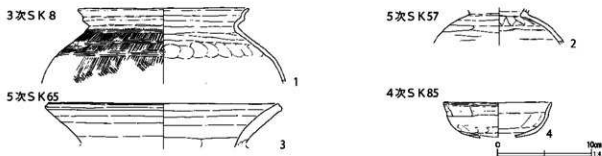
方向のハケメが施される。器肉はとても薄い。

5次第57号土坑 (第52・55図)

第55図2は、小型の甕である。球形の胴部から

第16表 5次第63号土壌出土遺物観察表

番号	種別	器種	残存率 (%)	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	胎土	焼成	色調	備考
1	土師器	高坏	80	16.7	12.0	12.6	白色針状物質	普通	橙色	南武蔵ローム台地
2	土師器	高坏	70	15.6	11.5	12.8	角閃石・軽石	普通	にぶい橙色	利根川
3	土師器	高坏	40	15.3		(11.4)	角閃石・軽石・頁岩	普通	橙色	利根川
4	土師器	高坏	10	18.1		(5.9)	角閃石・軽石	普通	橙色	利根川
5	土師器	高坏	20		19.6	(8.9)	角閃石・軽石・石英	不良	橙色	利根川
6	土師器	高坏	30		11.5	(9.0)	角閃石・軽石・石英	普通	橙色	利根川
7	土師器	高坏	5			(6.7)	角閃石・軽石	普通	橙色	利根川
8	土師器	高坏	5			(3.3)	角閃石・軽石	普通	橙色	利根川
9	土師器	埴	90	10.1	3.5	14.5	片岩・鉄粒子	良好	褐色	ローム台地
10	土師器	小型鉢	100	10.3	2.9	9.3	角閃石・軽石・石英	良好	褐色	利根川
11	土師器	小型甕	90	16.2	5.1	18.3	角閃石・軽石・安山岩	普通	にぶい赤褐色	利根川
12	土師器	甕	70	18.8	6.7	28.2	結晶片岩・石英	普通	黄褐色	小山川
13	土師器	甕	10		5.8	(15.1)	結晶片岩・石英・片岩	普通	にぶい橙色	小山川
14	土師器	甕	20	16.9		(11.8)	結晶片岩・石英・片岩	普通	にぶい橙色	小山川
15	土師器	甕	20		7.0	(13.7)	金雲母・石英	良好	にぶい褐色	ローム台地



第55図 土壌出土遺物

第17表 土壌出土遺物観察表

番号	種別	器種	残存率 (%)	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	胎土	焼成	色調	備考
1	土師器	S字状口縁台付甕	10	17.9		(8.0)	角閃石・石英・鉄粒子	良好	褐灰色	利根川3次SK8
2	土師器	小型埴	5			(3.9)	角閃石・軽石	普通	褐色	利根川5次SK57
3	土師器	大型甕	5	24.2		(4.7)	角閃石・軽石	普通	褐色	利根川5次SK65
4	土師器	須恵器坏蓋横做坏	20	11.3		(3.6)	角閃石・軽石・安山岩	普通	にぶい褐色	利根川4次SK85

強く屈曲する口縁部が続く。外面は、丁寧にヘラミガキを施す。

5次第65号土壌 (第52・55図)

第55図3は、大型の甕である。器肉の厚い口縁部である。口唇端部がくぼむ。

4次第85号土壌 (第50・55図)

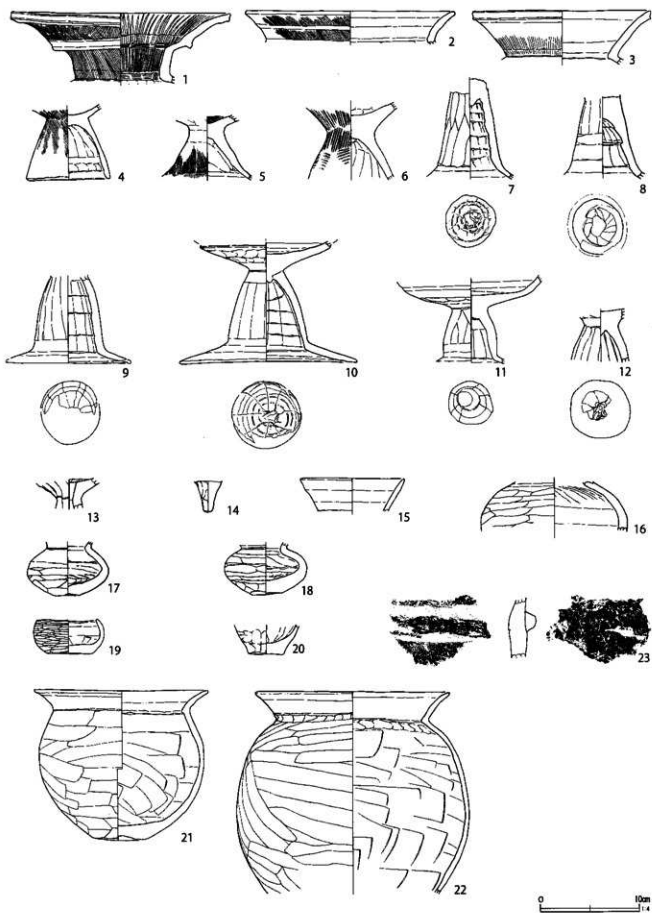
第55図4は、坏である。須恵器坏蓋横做坏である。半球形の胴部から口縁部が大きく外反する。口唇端部は丸みを帯びる。古墳時代後期、6世紀後半の土器である。

(3) 遺構外の出土遺物

皿沼西遺跡の遺構に伴わない古墳時代の遺物、および時代の異なる遺構から出土した古墳時代の遺物を第56図に掲載し、一括して述べる。

1～6は、古墳時代前期の土器である。

1は、複合口縁の甕である。口縁部から頸部の破片である。球形となる胴部をまず成形し、頸部となる一段目の口縁部をその穴に沿って貼りつける。続いてその上に二段目の口縁部を貼り付け、複合口縁の甕とした。なお、口唇部は、小さく受



第56图 遺構外出土遺物

第18表 遺構外の出土遺物観察表

番号	種別	器種	残存率 (%)	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	胎土	焼成	色調	備考
1	土師器	複合口縁壺	20	21.9		(7.0)	石英・結晶片岩	普通	黄褐色	小山川
2	土師器	素口縁壺	5	20.8		(3.3)	角閃石・軽石・石英	普通	褐色	利根川
3	土師器	単口縁壺	5	17.7		(5.4)	角閃石・石英・結晶片岩	普通	褐色	小山川
4	土師器	S字状口縁台付甕	20		8.2	(7.5)	雲母・頁岩	普通	灰白色	東毛地方
5	土師器	高坏	30			(6.5)	角閃石・石英・鉄粒子	普通	褐色	小山川
6	土師器	台付甕	30			(7.9)	角閃石	普通	灰白色	ローム台地
7	土師器	高坏	30			(10.1)	角閃石・軽石・石英	普通	黄褐色	利根川
8	土師器	高坏	30			(8.3)	角閃石・軽石	普通	褐色	利根川
9	土師器	高坏	10			(8.7)	角閃石・軽石	普通	褐色	利根川
10	土師器	高坏	30		17.5	(12.1)	角閃石・軽石・石英	普通	褐色	利根川
11	土師器	高坏	30			(8.9)	角閃石・鉄粒子	普通	褐色	ローム台地
12	土師器	高坏	5			(5.4)	角閃石・軽石	普通	褐色	利根川
13	土師器	高坏	5			(3.1)	角閃石・軽石	普通	にぶい褐色	利根川
14	土師器	高坏	5			(3.1)	角閃石・軽石	普通	褐色	利根川
15	土師器	埴	10	10.2		(3.3)	角閃石・軽石	普通	褐色	利根川
16	土師器	埴	5			(4.9)	角閃石・軽石	普通	褐色	利根川
17	土師器	小型埴	70		2.4	(5.4)	角閃石・軽石	普通	褐色	利根川
18	土師器	小型埴	70		2.9	(5.2)	角閃石・軽石	普通	褐色	利根川
19	土師器	小型壺	30	6.0	4.4	3.4	角閃石・鉄粒子	良好	淡褐色	ローム台地
20	土師器	手捏ね土器	30		3.5	(3.0)	角閃石・軽石	普通	にぶい褐色	利根川
21	土師器	小型甕	40	17.3	5.1	15.0	角閃石・軽石・安山岩	普通	黄褐色	利根川
22	土師器	甕	30	19.2		(20.3)	頁岩・結晶片岩	良好	にぶい褐色	小山川
23	埴輪	形象埴輪	5			(6.1)	角閃石・結晶片岩・片岩	普通	褐色	小山川

け口状、頸部と口縁部の境は段状となる。

内面は、まず横方向のハケメを施し、器面を整えたのち、頸部内面に下から上に向かって縦方向のヘラミガキを施す。次いで口縁部に頸部から口唇部に向かって、細かな単位で跳ね上げるようにヘラミガキを施す。そして口縁部と肩部の境に横方向のヘラミガキを施す。

外面の調整は、まず頸部から口縁部に向かってハケで掻き上げる。つぎに口縁部以下から上に向けてハケメを施し、さらに口唇部から下に向けてハケメを施す。その後、外縁部及び口唇端部、口唇外面にヨコナデを施し終了する。

2は、素口縁の甕である。口縁部に頸部から口唇部に向けて掻き上げたハケメがみられる。口縁部中央付近をヨコナデで調整する。

3は、単口縁の壺である。口縁部が、直線的に伸び小さく外反する球形となる胴部と「く」につく壺である。口縁部外面には、頸部から口唇部に向

けて掻き上げたハケメが残る。

4は、S字状口縁台付甕の台部である。台部端が折り返され、器壁が2mm以下ととても薄い。外面に細かなハケメが残り、色調は黄褐色である。

5は、高坏である。脚部が大きく裾広がりになる。脚端部に向かって細かなハケメが施される。器面は滑らかである。

6は、台付甕である。くびれ部から胴部に、次に台端部に向かってハケメを施す。台部には、横方向のハケメも施された。内面には、粗い単位で縦方向のナデがみられる。

7～20は、古墳時代後期の土器である。

7～14は、高坏である。7と8は、直線的な柱状の脚部である。脚部内面に粘土紐巻き上げの痕跡が残る。9と10は、脚部と坏部の接合部で絞り込みがあり、ラッパ状に開く。脚部内面は、一段で削り取られるが、粘土紐巻き上げ痕跡が残る。11と12は、脚部の長さが短く、強く屈曲して裾部の

開く形態である。脚部内面は、一段で削る。13は高坏のくびれ部、いわゆる「へそ」である。

高坏の脚部の成形、調整の手法を観察すると、7と8は、粘土紐を巻き上げただけであるが、9～12は、粘土紐を巻き上げた後に刀子状（へら状）工具で内面を数回の単位で扶^{たす}け取る。粘土紐の積み上げは、7が七段、8が三段、9が四段、10が五段、11が三段、12が二段以上である。

15・16は、埴である。色調が異なることから

別個体と考えた。17・18は、小型の埴である。胴下半を細かな単位で横方向にへラケズリする。19は、小型の壺である。20は、手捏ね土器の破片である。鉢形の土器と考えられる。21は小型の甕、22は、甕である。

24は、埴輪の破片である。輪積み方向が直線的なので、形象埴輪の破片かもしれない。突帯は台形状で、器肉が厚い。

5. 古代の遺構と遺物

(1) 竪穴住居跡

古代（7世紀～11世紀）の竪穴住居跡は、調査区の西端、中央北側、東側にかけて分布していた。数軒の竪穴住居跡と掘立柱建物跡が、組み合って一つの居住単位となっていたと考えられる。皿沼西遺跡の竪穴住居跡 59 軒を検出した。

そのなかで平安時代の竪穴住居跡は、弘仁9年（818）の地震による液状化現象の痕跡が、明瞭に確認できた。地震の発生前に埋没した竪穴住居跡、地震の発生後に構築した竪穴住居跡を識別するため、液状化現象との関係性がわかるような土層断面、遺構平面図の記録を残した。

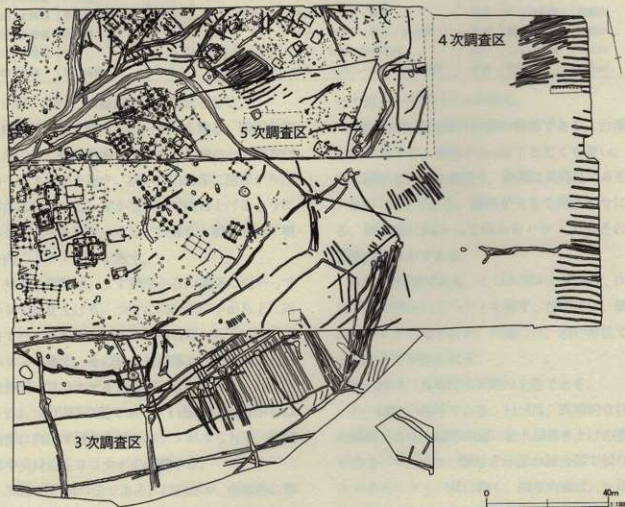
残念ながら、地震の発生時に存在していた竪穴

住居跡は限定できなかった。それは、液状化現象で噴出した砂は、当時の人々が、生活に支障が出たので片付けたから、堆積層（砂層）として残らなかったのである。

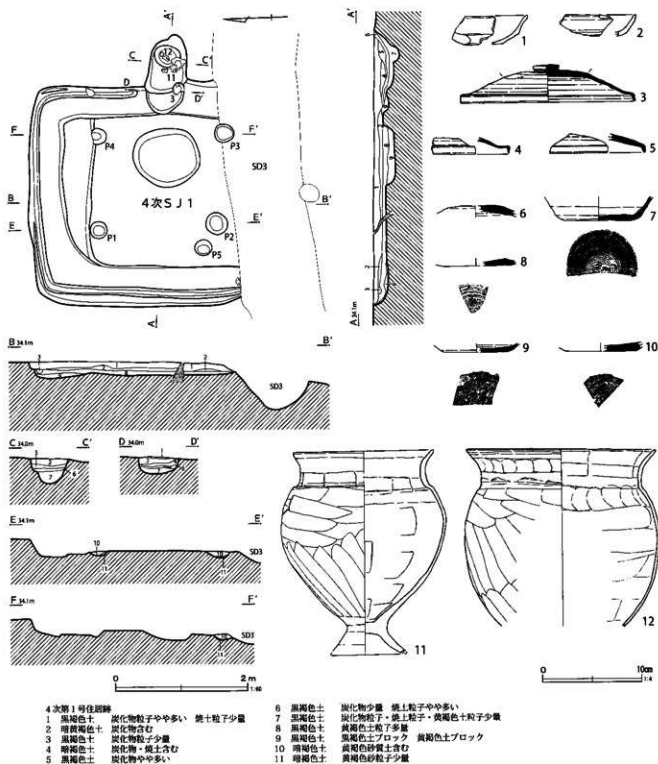
ところで、出土遺物は、土師器や須恵器の坏・碗・皿・甕・甔・鉢といった一般的なな器であった。特殊な奢侈品である施釉陶器は、ほとんど無い。ごく標準的な東国農村の竪穴住居跡とその出土遺物である。

4次第1号住居跡（第58図）

I-11 グリッドに位置する。調査区の西部、南辺やや北に検出した。南壁を4次第3号溝跡によって壊されるが、大半を検出することができた。



第57図 奈良・平安時代の遺構分布図



第58図 4次第1号住居跡・出土遺物

規模は、南北3.29 m、東西(2.84) m、深さ0.18 mである。平面形は、正方形の竪穴住居跡である。長軸方位は、N-90°-Eである。

柱穴は、壁面に平行して4本確認できた。小規模な浅い穴である。東壁の南寄りにカマドを検出

した。燃焼部はやや窪んで土塊状となる。煙道は長く伸びない。壁の直下には、壁周溝がめぐる。カマドの右手には、周溝を確認できない。

カマド手前の貼床下に円形の土塊を検出した。竪穴住居跡は、自然堆積によって埋没するが、そ

第19表 4次第1号住居跡出土遺物観察表

番号	種別	器種	残存率 (%)	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	胎土	焼成	色調	備考
1	土師器	坏	10			(2.8)	角閃石・軽石	普通	褐色	利根川
2	土師器	皿形坏	10			(2.1)	角閃石・軽石	普通	にぶい褐色	利根川
3	須恵器	蓋	90	17.4		3.7	石英・白色針状物質	普通	明褐色	南比企
4	須恵器	蓋	5			(1.6)	石英・白色針状物質	普通	褐色	南比企
5	須恵器	蓋	5			(1.9)	石英・白色針状物質	普通	灰白色	南比企
6	須恵器	蓋	5			(1.2)	石英・白色針状物質	普通	褐色	南比企
7	須恵器	坏	30		6.6	(2.4)	石英・白色針状物質	良好	褐色	南比企
8	須恵器	坏	5		(6.6)	(0.6)	石英・白色針状物質	普通	褐色	南比企
9	須恵器	坏	10		(6.3)	(0.9)	石英・白色針状物質	普通	褐色	南比企
10	須恵器	坏	5		(7.2)	(0.9)	雲母・白色針状物質	普通	明褐色	南比企
11	土師器	台付甕	80	13.8		(20.1)	角閃石・軽石・金雲母	普通	明赤褐色	利根川
12	土師器	甕	10	18.8		(17.8)	角閃石・軽石	良好	褐色	利根川

の埋没土を突き破って、液状化現象による噴砂がみられた。

カマドの燃焼部には、土師器の台付甕 11 と甕 12 が、並んで据えられていた。支脚は確認できなかった。焚口部右手には、須恵器の蓋 3 が仰向けで置かれていた。また、西南隅から須恵器坏 7 が出土した。

1・2は、土師器の坏である。1は、口縁部が屈曲する坏、2は、皿形の坏である。3～6は、須恵器の蓋である。3は、ボタン状の摘みがつく。3～5は、口唇部が鵜頸状となる。6は、蓋の天井部付近の破片である。器肉が厚く、摘みはつかない。

7～10は、須恵器の坏である。ロクロから糸切り後、底部周辺を回転ヘラケズリした坏である。8～10は、糸切り後の調整はない。

11は、台付甕である。口縁部は直立しつつ外反し、口唇部で小さく内湾する。「コ」の字口縁甕の初期的な形態である。12は、土師器の甕である。

本住居跡は、皿沼西Ⅲ期、8世紀第Ⅲ四半期である。

4次第2号住居跡 (第59図)

H-8グリッドに位置する。調査区の西端中央付近に検出した。東壁・西壁の一部が、4次第7号掘立柱建物跡と重複し、それより新しい。竪穴住居跡の大半を検出できたが、覆土が浅く、遺構の残存状態は悪かった。液状化現象との関係は明らかではない。

規模は、南北 3.52 m、東西 2.59 m、深さ 0.06 m である。平面形は、正方形の竪穴住居跡である。長軸方位は、N-85°-E である。

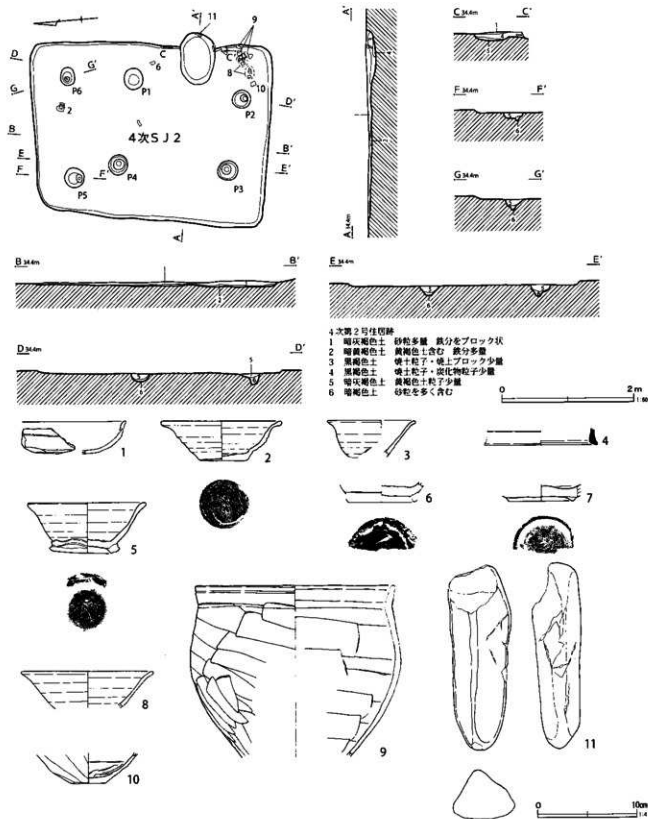
柱穴は、壁面に平行して 6 本検出した。このうち P1～P4、または P2・3・5・6 の組み合わせが、当住居跡の柱穴と考えられる。壁周溝や貯蔵穴は、検出できなかった。東壁南寄りにカマドを検出した。燃焼部はやや窪んだ土壌状となる。煙道は確認できなかった。カマド内から支脚に使用した棒状の石 11 が出土した。

遺物は、①カマドの右手、②北側床面、③カマドの左手などに集中して出土した。①からは、土師器甕 9 と土師質土器坏 8 が、破片となって出土した。②は、床面に密着するような形で土師質土器坏 2 が出土した。また、③から土師質土器の高台付碗 6 が出土した。

1は、土師器の坏である。口縁部が欠損するが、浅めの碗形の坏と考えられる。混入品である。2・3は土師質土器の坏である。2は、ロクロからの糸切り後の調整はない。3は、高台付碗かもしれない。

4は、器種は特定できないが、高台または、短頸壺の口縁部と考えた。須恵器の破片である。混入の可能性が高い。

5～7は、土師質土器の高台付碗である。5は、太い高台が低くつぶれ、底部の糸切り端をめぐる。6は、高台が欠損する。7は、三角形の高台が巡る。5の高台は、従来の須恵器の承譜をひき、7



第59図 4次第2号住居跡・出土遺物

の高台は、灰釉陶器の系譜をひくと考えられる。

8は土師質土器の坏、または高台付碗の口縁部である。

9・10は、土師器の甕である。9・10は、同一

個体かもしれない。器肉が厚く、軟質の焼き上がりである。「コ」の字状口縁部の系譜をひく。口縁部が広く開く。

11は、編み物石である。

第20表 4次第2号住居跡出土遺物観察表

番号	種別	器種	残存率 (%)	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	胎土	焼成	色調	備考
1	土師器	坏	5			(2.6)	角閃石・軽石	普通	橙色	利根川
2	土師質土器	坏	90	12.0	4.4	4.0	角閃石・軽石	不良	浅黄橙色	利根川
3	土師質土器	坏	5			(3.8)	角閃石・軽石	普通	橙色	利根川
4	須恵器	高台または短頸壺	5		11.2	(1.7)	石英・白色針状物質	普通	褐灰色	南比企
5	土師質土器	高台付碗	90	11.7	5.9	5.0	角閃石・軽石・安山岩	普通	にぶい橙色	利根川
6	土師質土器	高台付碗	5			(1.7)	角閃石・軽石・安山岩	不良	褐灰色	利根川
7	土師質土器	高台付碗	5		6.4	(1.6)	角閃石・軽石	普通	にぶい橙色	利根川
8	土師質土器	坏または高台付碗	30	13.0		(3.8)	角閃石・軽石	普通	にぶい橙色	利根川
9	土師器	甕	20	19.7		(17.2)	角閃石・軽石・安山岩	普通	にぶい橙色	利根川
10	土師器	甕	5		3.3	(2.8)	角閃石・軽石	普通	にぶい橙色	利根川
11	川原石	編み物石	90	全長18.7 幅6.2 厚さ4.9 重さ705.0g			安山岩		灰白色	

本住居跡は、皿沼西X期、10世紀第Ⅲ四半期である。

4次第3号住居跡 (第60図)

I-8グリッドに位置する。調査区の西端中央に検出した。北壁の一部を4次第8号掘立柱建物跡、南壁の一部を4次第6号掘立柱建物跡の柱穴によって壊される。また、第14号竪穴住居跡と南西隅が重複し、同住居跡より古い。4次第3号住居跡の貼床の下に第33号竪穴住居跡を検出した。同竪穴住居跡は、壁方向が同じ方位であることから、第3号住居跡は、第33号竪穴住居跡を建て替え(拡張)たと判断した。

なお、土層断面図に、液状化現象の痕跡を記録しなかった。埋没土は、液状化現象の影響を受けていたと考えられる。規模は、南北4.83 m、東西4.66 m、深さ0.32 mである。平面形は、正方形の竪穴住居跡である。長軸方位は、N-12°-Eである。

柱穴は、壁面に平行して4本検出した。このほか、補助柱穴と考えられる柱穴を2本検出した。カマドは、北壁の東寄りに検出した。カマドの右袖には、土師器甕6を倒置して埋設していた。カマドの焚口から土師器坏1が出土した。カマドの燃焼部は狭く、甕を一つ置くだけである。煙道は、燃焼部の幅と変わらず長くのびる。煙道と燃焼部の段差はない。また、貯蔵穴はなく、壁周溝もめぐる。ない。

遺物は、①P2の付近、②南壁中央、③柱穴内から出土した。①は、土師器坏3が床面直上から出土した。②は、土師器甕7、土師器坏4などが床面から浮いた状態で出土した。

1~4は、土師器の坏である。3・4は碗形の坏で、3は大型である。

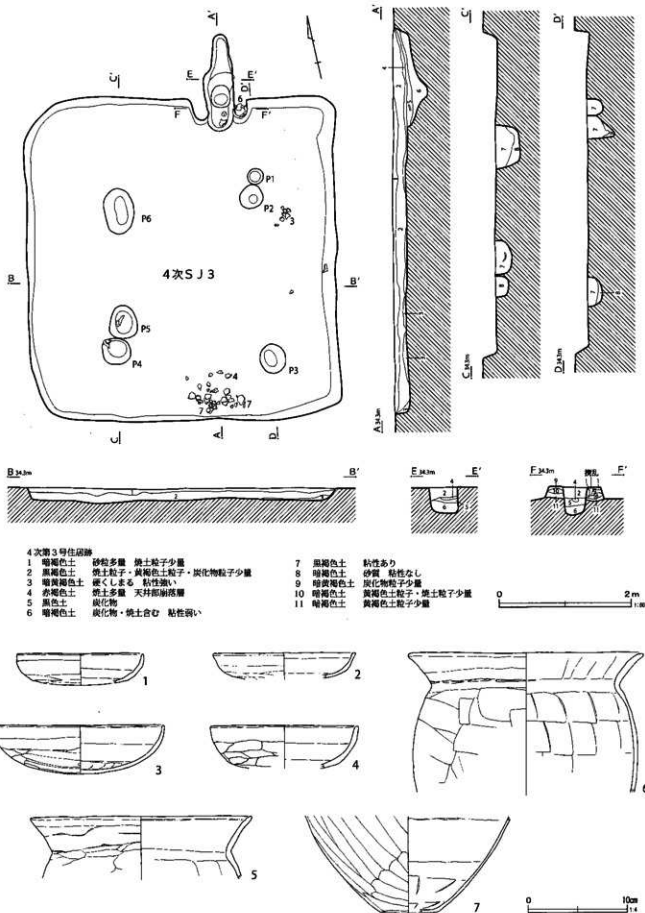
5・6は、土師器の甕である。「く」の字状口縁の甕で器肉がやや厚い。5は、口唇部の内側が小さくくぼむ。7は土師器の壺、または甕である。器肉が薄いため煮沸用の甕とも考えられるが、胴部径が大きいことから、球形で広口の壺かもしれない。

本住居跡は、皿沼西Ⅱ(古)期、8世紀第Ⅰ四半期後半から第Ⅱ四半期前半である。

4次第4号住居跡 (第61~63図)

J-8グリッドに位置する。調査区の西側中央に検出した。遺構の重複はないが、南に拡張して4次第13号住居跡となる。埋没土に、液状化現象の痕跡が残り、地震以前に当住居跡は埋没していたと考えられる。規模は、南北3.71 m、東西5.45 m、深さ0.21 mである。平面形は、長方形の竪穴住居跡である。長軸方位は、N-9°-Eである。

北壁の東寄りにカマドが構築された。カマドの両袖に土師器甕13・14が、倒置して埋設されていた。カマドの燃焼部は広く、北壁の外へ突出する。燃焼部から段差があり煙道が長くのびる。カマドの右手には、楕円形の貯蔵穴がみられる。柱穴



第60図 4次第3号住居跡・出土遺物

第21表 4次第3号住居跡出土遺物観察表

番号	種別	器種	残存率 (%)	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	胎土	焼成	色調	備考
1	土師器	碗形坏	10	12.4	9.6	(3.0)	角閃石・軽石	普通	褐色	利根川
2	土師器	皿形坏	10	14.0		(2.6)	角閃石・軽石	普通	褐色	利根川
3	土師器	大型碗形坏	40	16.7	11.4	4.9	角閃石・軽石	良好	褐色	利根川
4	土師器	碗形坏	20	14.6	10.2	(4.3)	角閃石・軽石	普通	にぶい褐色	利根川
5	土師器	甕	5	21.9		(6.3)	角閃石・軽石	良好	褐色	利根川
6	土師器	甕	20	23.2		(14.2)	角閃石・軽石・安山岩	良好	褐色	利根川
7	土師器	壺か甕	10		(5.6)	(9.7)	角閃石・軽石・安山岩	良好	褐色	利根川

は確認できなかった。南側にだけ壁周溝がめぐる。

遺物は、カマドから床面の中心に向い多数出土した。とくに貯蔵穴の周辺から土師器の甕11・15・16・22・24・26が、集中して出土した。カマド左手、床面の中心付近にも土師器の甕9・10・12・23・25が、集中して出土した。このほか、土師器の坏が、床面の東南隅(7)、カマドの手前(1)、床面の中央(4)、北壁西より(2)などから出土した。

1～7は、土師器の坏である。1は、口縁部が内湾する坏である。2は、小さく外反する扁平な坏である。3は、扁平な底部で口縁部が外反する。4～6は、内面に放射状暗文を施す。5は外面にも暗文が施される。4・5は、深めで碗形の暗文土器である。暗文はとても細かく、丁寧に施される。口唇部は平坦な面を形成する。6は、浅い皿形の暗文土器である。やや暗文の間隔が粗く、口唇部は丸く仕上げられる。7は、深めで鉢形となる坏である。半球形だが、口縁部は直線的に伸びる。内面に暗文を施さないが、暗文土器の系譜をひく土器である。

8は、須恵器の坏である。ロクロから糸切り後、底部周辺を回転ヘラケズリする。

9～18、22～26は、土師器の甕である。全体的に器肉はとても薄く仕上げられる。肩部は丸みを帯び、口縁部は小さく外反しつつ伸びる。頸部から肩部にかけては、斜めのヘラケズリが施される。口縁部には、押圧による指頭の痕跡が残る個体がある。

口縁部形状の違う破片から15個体の甕が、出

土したと考えた。しかし、18は、胴下半の破片であるため、いずれかの口縁部資料と同一個体かもしれない。

19は、鉄製品である。刀子の一部(刃部)と考えられる。

20・21は、須恵器の甕である。20は口縁部の破片、21は、底部付近の破片である。同一個体の可能性がある。内面は、無文の当て具痕跡が残り、外面は、平行刻みを施した叩き板で叩いた痕跡が残る。叩き板の痕跡は、胴部のみならず、口縁部にも残る。

本住居跡は、皿沼西Ⅱ(新)期、8世紀第Ⅱ四半期である。

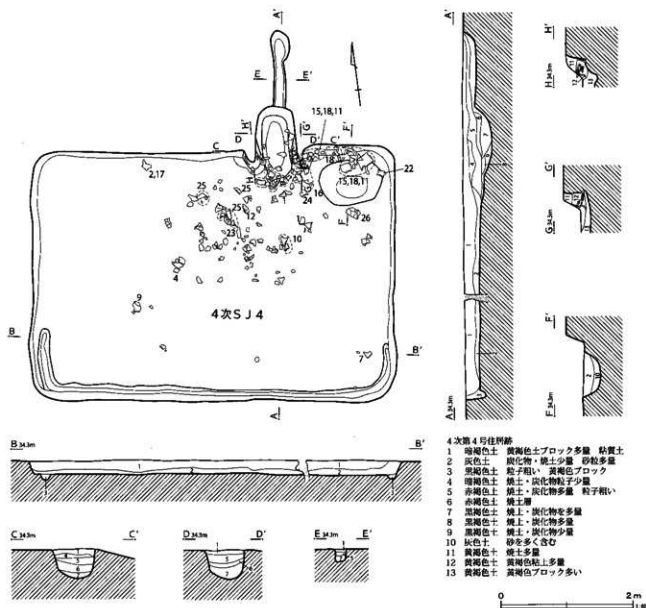
4次第5号住居跡(第64・65図)

K-10グリッドに位置する。調査区の西側中央に検出した。遺構の重複はない。液化化現象とのかかわりは明らかにできなかった。規模は、南北5.53 m、東西3.67 m、深さ0.22 mである。平面形は、長方形の竪穴住居跡である。長軸方位は、N-85°-Eである。

明瞭な柱穴は、みられなかったが、西壁に接して小穴2基を検出した。小さく浅い穴なので、通常の柱穴ではない。カマドは、東壁中央に構築された。焚口が深く、楕円形に掘り込まれる。燃焼部は、壁外に突出し、袖は見られない。煙道は、燃焼部と同じ高さのまま長くのびる。

壁周溝は、四周を巡る。ただし、カマド右手に壁周溝は見られない。貯蔵穴はない。

遺物は、カマドから土師器甕8・9、土師器坏1が出土した。また、南壁際から須恵器坏5、北壁



第61図 4次第4号住居跡

寄りに紡錘車 11 が出土した。

1は、土師器の坏である。体部は「S」字状に緩く内湾しながら立ち上がる。ユビオサエが明瞭に残る。

2は、須恵器の蓋である。低い返りを付け、爪が長く伸びる。

3は、破片資料であるが、復元した口径が、坏よりも大きいので2と組み合う蓋付きの碗、または高台付碗と考えられる。

4～7は、須恵器の坏である。4・5は、ロクロから糸切り後、底部周辺を回転ヘラケズリする。6・

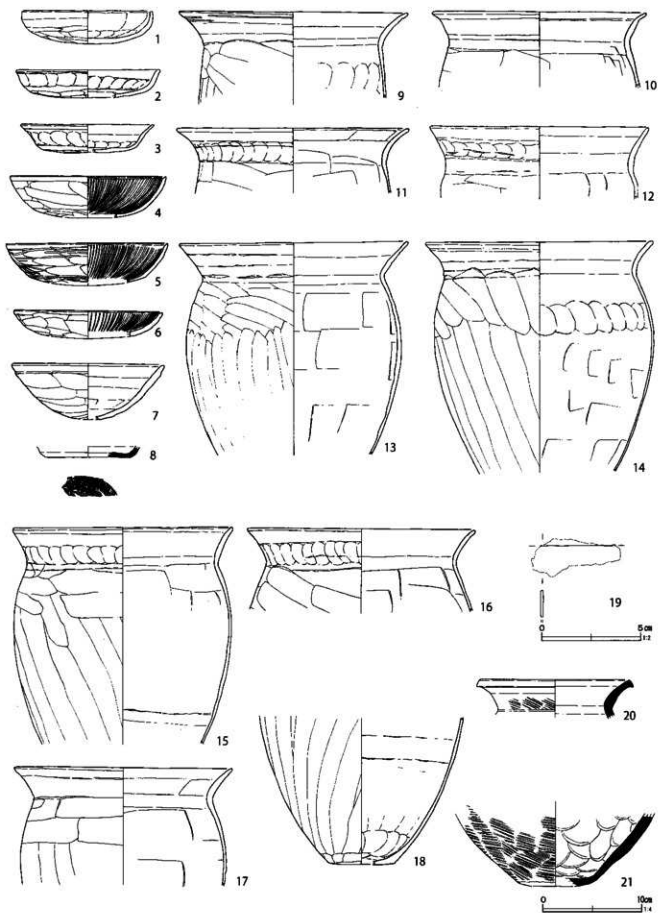
7は、ロクロから糸切り後に調整を行わない。

8・9は、土師器の甕である。2点とも口縁部が「く」の字となる器肉の薄い甕である。9の上下は、接点を確認できないが、同一個体と判断した。肩部から胴部上半を斜めに削り上げる。

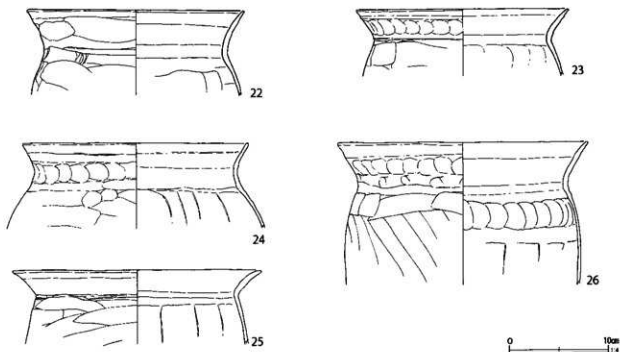
10は、短頸壺の蓋の破片である。水平に口縁部が内側に強く屈曲する。

11は、石製紡錘車である。

12・13は、鉄製品である。12は鉄鎌である。鎌身から基部にかけての長頸鎌の破片である。13は刀子である。刀身が細く痩せている。刃部先端



第62圖 4次第4号住居跡出土遺物 (1)



第63図 4次第4号住居跡出土遺物 (2)

第22表 4次第4号住居跡出土遺物観察表

番号	種別	器種	残存率 (%)	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	胎土	焼成	色調	備考
1	土師器	坏	90	12.8	4.5	3.3	角閃石・軽石	普通	橙色	利根川
2	土師器	坏	30	14.3	10.6	(2.8)	角閃石・軽石	普通	橙色	利根川
3	土師器	坏	30	13.2	8.8	(2.8)	角閃石・軽石	普通	橙色	利根川
4	土師器	碗形坏	30	15.6	(11.0)	(4.2)	雲母・石英	良好	明赤褐色	ローム台地か
5	土師器	碗形坏	30	16.1	(12.0)	(3.9)	雲母・石英	良好	明赤褐色	ローム台地か
6	土師器	皿形坏	20	14.8	(9.2)	(2.6)	角閃石・軽石	良好	橙色	利根川
7	土師器	鉢形坏	30	15.0	(6.6)	(5.6)	角閃石・軽石・安山岩	普通	橙色	利根川
8	須恵器	坏	5		(8.5)	(1.2)	石英・白色針状物質	普通	灰白色	南比企
9	土師器	甕	5	22.8		(9.3)	結晶片岩・石英・頁岩	普通	にぶい、橙色	小山川
10	土師器	甕	10	21.2		(7.5)	角閃石・軽石・雲母	普通	橙色	利根川
11	土師器	甕	5	23.1		(6.5)	角閃石・軽石	普通	橙色	利根川
12	土師器	甕	5	21.8		(7.4)	角閃石・軽石	普通	橙色	利根川
13	土師器	甕	70	22.2		(21.3)	角閃石・軽石・片岩	良好	黄橙色	利根川
14	土師器	甕	80	22.6		(23.3)	角閃石・軽石・安山岩	良好	黄橙色	利根川
15	土師器	甕	40	22.0		(21.8)	角閃石・軽石・安山岩	普通	黄橙色	利根川
16	土師器	甕	5	22.8		(8.2)	角閃石・石英・結晶片岩	普通	橙色	小山川
17	土師器	甕	5	21.7		(11.8)	角閃石・軽石・安山岩	普通	橙色	利根川
18	土師器	甕	20		(6.6)	(14.6)	角閃石・軽石	良好	にぶい、橙色	利根川
19	鉄製品	刀子	30	長さ (4.4) 幅 1.6 厚さ 0.2			重さ 7.5g		—	
20	須恵器	甕	5	14.9		(4.0)	石英・白色針状物質	普通	褐灰色	南比企
21	須恵器	甕	5		(4.9)	(7.4)	石英・白色針状物質	普通	明褐色	南比企
22	土師器	甕	5	21.6		(8.6)	角閃石・軽石・安山岩	良好	橙色	利根川
23	土師器	甕	5	21.2		(6.8)	角閃石・軽石・安山岩	普通	橙色	利根川
24	土師器	甕	5	22.6		(8.6)	角閃石・軽石・安山岩	普通	橙色	利根川
25	土師器	甕	10	24.8		(7.4)	角閃石・軽石・安山岩	普通	橙色	利根川
26	土師器	甕	10	24.8		(12.3)	角閃石・軽石・鉄粒了	普通	にぶい、橙色	利根川

第23表 4次第5号住居跡出土遺物観察表

番号	種別	器種	残存率 (%)	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	胎土	焼成	色調	備考
1	土師器	坏	30	11.9		(3.1)	角閃石・軽石	普通	褐色	利根川
2	須恵器	蓋	10	(17.2)		(2.0)	石英・白色針状物質	普通	明褐色	南比企
3	須恵器	蓋付碗か高台付碗	10	14.4		(4.9)	石英・白色針状物質	普通	明褐色	南比企
4	須恵器	坏	5		(7.1)	(1.0)	石英・白色針状物質	普通	明褐色	南比企
5	須恵器	坏	30	11.9	(6.5)	(3.7)	石英・白色針状物質	普通	褐色	南比企
6	須恵器	坏	90	11.9	4.1	3.5	石英・白色針状物質	普通	褐色	南比企
7	須恵器	坏	40	11.9	5.8	3.9	石英・白色針状物質	普通	にぶい褐色	南比企
8	土師器	甕	10	20.2		(12.2)	角閃石・軽石・安山岩	良好	にぶい褐色	利根川
9	土師器	甕	30	19.8	5.1	(28.2)	角閃石・軽石・石英	良好	褐色	利根川
10	須恵器	短脚蓋	20			(2.5)	石英・白色針状物質	普通	褐色	南比企
11	土製品	紡錘車	50	直径 (4.9) 厚さ 2.1 重さ 28.6g			角閃石・軽石・石英		灰褐色	利根川
12	鉄製品	鉄鏃	50	長さ (9.7) 幅 0.8 厚さ 0.4 重さ 15.8g					—	
13	鉄製品	刀子	50	長さ (12.3) 幅 1.4 背幅 0.3 重さ 20.6g					—	

と基部が欠損する。

本住居跡は、皿沼西Ⅵ期、9世紀第Ⅱ四半期である。

4次第7号住居跡 (第66図)

Iー9グリッドに位置する。調査区の西端中央に検出した。遺構は複雑に重複する。4次第25・32号住居跡より新しく、4次第6号掘立柱建物跡より古い。また、南に拡張し、4次第34号住居跡となる。液状化現象とのかかわりは明らかにできなかった。規模は、南北4.26 m、東西4.73 m、深さ0.13 mである。平面形は、長方形である。北壁と東壁がやや突出する。長軸方位は、Nー0°である。

柱穴は、確認できなかった。カマドが北壁の西寄りに構築された。袖が短く、竪穴内に突出しない。焚口は、緩く傾斜する。燃焼部から煙道は、「ハ」の字形につぼまっていく。燃焼部から煙道へは、緩く立ち上がる。

遺物は、土師器の破片が出土しただけである。

本住居跡は、皿沼西Ⅲ期、8世紀第Ⅲ四半期である。

4次第8号住居跡 (第67・68図)

Iー9グリッドに位置する。調査区の西側中央に検出した。4次第17号住居跡より新しく、4次第6号掘立柱建物跡より古い。液状化現象とのか

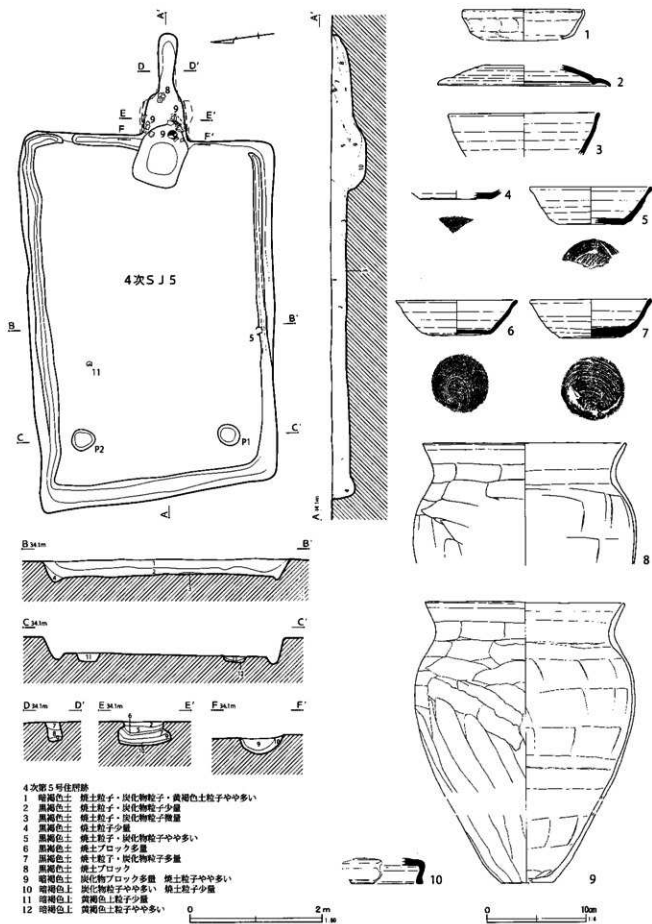
わりは不明である。規模は、南北4.79 m、東西5.49 m、深さ0.11 mである。平面形は、隅丸長方形の竪穴住居跡である。長軸方位は、Nー11°ーEである。

柱穴は、東壁に平行して2本検出した。貼り床の下にも西側柱穴は、確認できなかった。北壁と西壁の一部を残し、壁周溝がめぐる。北壁やや東側にカマドを構築した。カマドの左右には、小穴がある。カマドは、焚口から燃焼部にかけて深く土壇状に掘り込まれる。煙道は、短く段を持って立ち上がる。袖は短い。

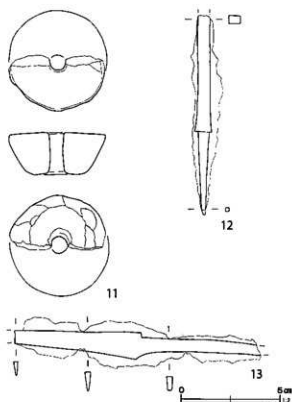
遺物は、住居跡の床面から散漫に出土した。とくに、貯蔵穴からは、土師器壺16、床面の中央から坏10・11、P5の周辺から土師器坏2・3・6などが出土した。また、西壁の壁周溝の際から砥石17が出土した。

1ー11は、土師器の坏である。1は、深めの碗形の坏である。2ー6は、扁平な底部の坏である。7・8は、大きく開く皿形の坏である。9は、小型の坏である。10・11は、内面に粗い放射状の暗文を施す暗文土器である。口唇部は丸く収まり、凹線はみられない。

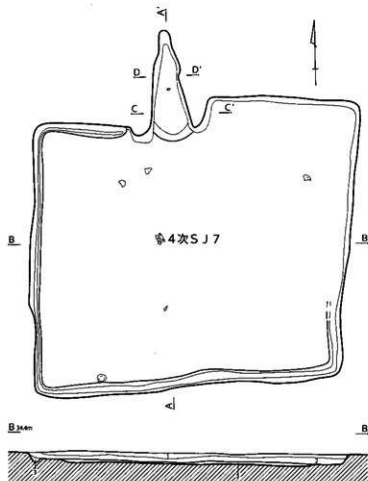
12・13は、須恵器の坏である。12は口縁部の破片、13は、底部付近の破片である。ロクロから糸切り後、底部周辺に回転ヘラケズリを施す。



第64図 4次第5号住居跡・出土遺物 (1)



第65図 4次第5号住居跡出土遺物 (2)



第66図 4次第7号住居跡

14は、須恵器の長頸壺の口縁部破片である。

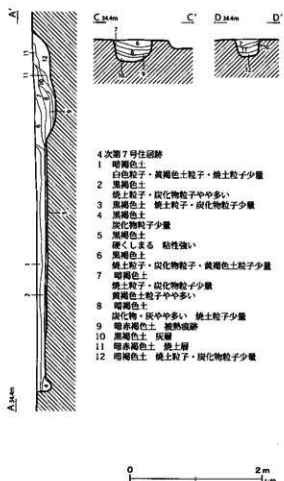
15は、須恵器の短頸壺の口縁部破片である。

16は、土師器の壺である。器壁の極めて薄い大型の壺である。口縁部は「く」の字に屈曲し、直線的に立ち上がる。

17は、凝灰岩の砥石である。上部に糸通しの穴を穿った下げ砥である。下半が欠損する。表面が丁寧に成形されており、刀子などの小型の鉄製品に使用したと考えられる。

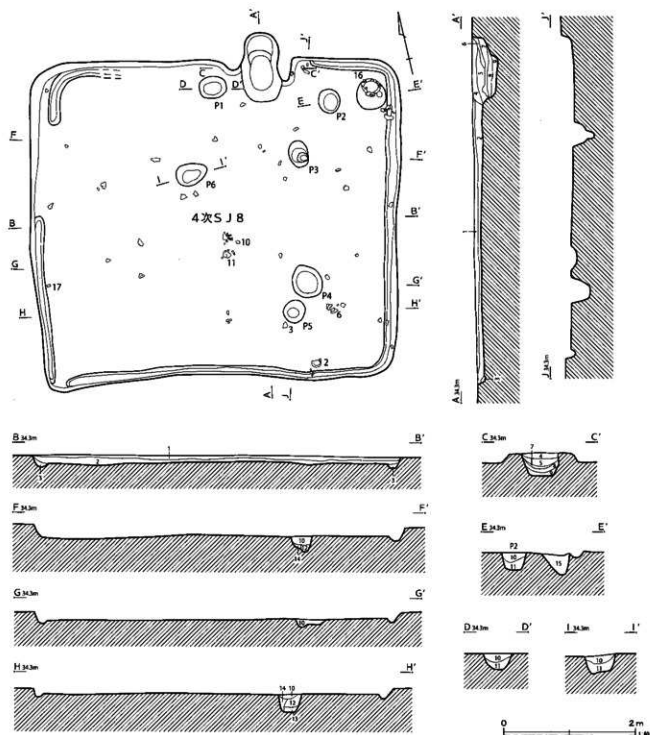
18は、刀子の破片である。左右は接合しないが、同一個体と考えられる。右は茎部、左は刃部である。19は、銅製の耳環である。腐食が進み、表面の被膜加工等は観察できない。

本住居跡は、皿沼西Ⅲ期、8世紀Ⅲ四半期である。



4次第7号住居跡

- 1 暗褐色土
白色粒子・黄褐色土粒子・焼土粒子少量
- 2 黄褐色土
焼土粒子・炭化物粒子やや多い
- 3 黄褐色土 焼土粒子・炭化物粒子少量
- 4 黄褐色土
炭化物粒子少量
- 5 黄褐色土
硬くしめる 粘性強い
- 6 黄褐色土
焼土粒子・炭化物粒子・黄褐色土粒子少量
- 7 暗褐色土
焼土粒子・炭化物粒子少量
黄褐色土粒子やや多い
- 8 暗褐色土
炭化物・灰やや多い 焼土粒子少量
- 9 暗赤褐色土 焼土痕跡
- 10 黄褐色土 灰層
- 11 暗赤褐色土 焼土層
- 12 暗褐色土 焼土粒子・炭化物粒子少量

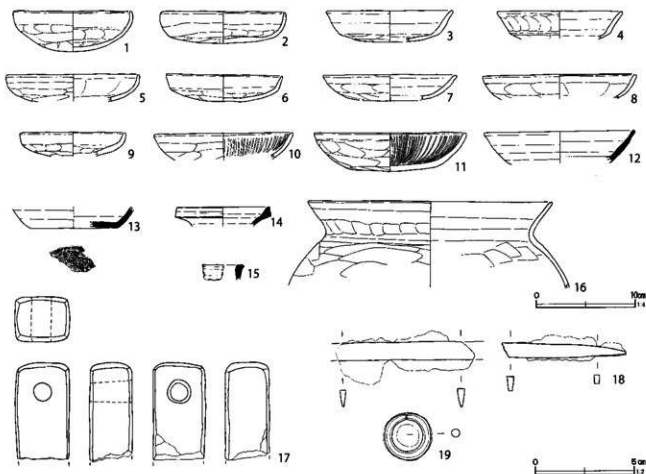


4次第8号住居跡

- 1 暗褐色土 焼土粒子・炭化物粒子少量
- 2 黒褐色土 焼土粒子・炭化物粒子やや多 黄褐色土粒子少量
- 3 黒褐色土 焼土粒子少量
- 4 黒褐色土 焼土粒子少量
- 5 暗褐色土 黄褐色土粒子多量 焼土粒子・炭化物粒子少量
- 6 赤褐色土 焼土多量に含む
- 7 黒褐色土 灰層・炭化物粒子多量 焼土粒子少量
- 8 暗褐色土 焼土粒子・炭化物粒子少量

- 9 暗褐色土 焼土粒子少量
- 10 暗褐色土 砂粒多量
- 11 黒褐色土 焼土粒子・炭化物粒子少量
- 12 黒褐色土 焼土粒子・炭化物粒子少量
- 13 黒褐色土 黄褐色ブロック含む
- 14 暗褐色土 砂粒多い
- 15 黒褐色土 焼土粒子・炭化物粒子少量

第67図 4次第8号住居跡



第68図 4次第8号住居跡出土遺物

4次第9号住居跡 (第69・70図)

H-10 グリッドに位置する。調査区の西側中央に検出した。遺構の重複はほとんどなく、北西隅が、小穴によって壊される程度である。しかし、遺構の覆土は薄く、残存状態は良くない。遺構の埋没土が、液状化現象によって切り裂かれる。規模は、南北6.35 m、東西6.37 m、深さ0.13 mである。平面形は、隅丸正方形の竪穴住居跡である。長軸方位は、N-90°-Wである。

柱穴は、壁面に平行して4本検出した。やや大きい柱穴である。竪穴の中央やや南西に方形の土壇を検出した。カマドは、西壁の中央部に作られた。袖・燃焼部ともに竪穴内に作られた。燃焼部は、焚口から緩く傾斜して下る。煙道は、短く立ち上がる。焚口付近に土師器の破片が出土した。カマドの右手に貯蔵穴が作られる。

カマドの袖から西壁にかけては、土師器の甕6・8や同環3が出土した。また、東壁に接して土師器甕7や土師器環2、紡錘車9等が出土した。

1~4は、土師器の坏である。1・2は、口縁部と底部の間に段があり、外反する。3・4は、口唇部内側が小さく折れる。

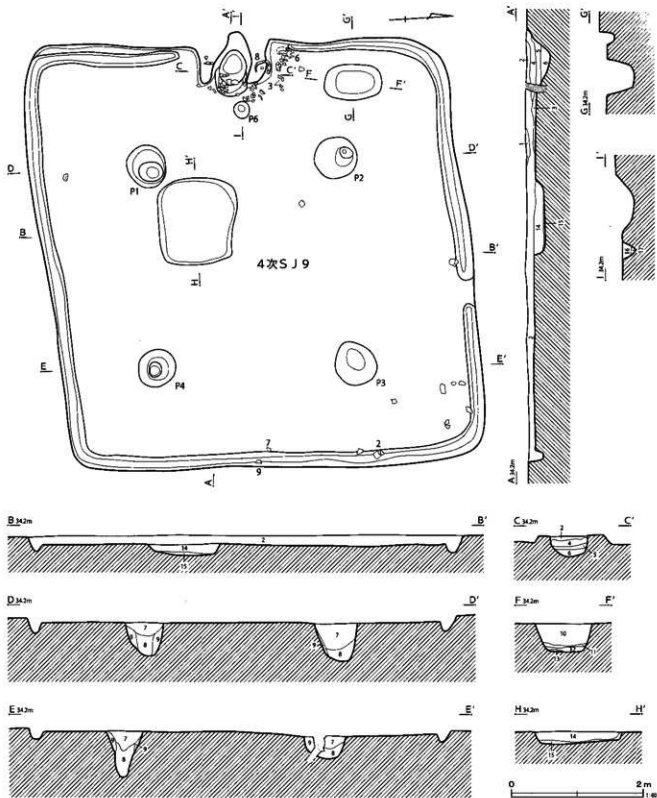
5~8は、土師器の甕である。4点とも器肉がとても薄く、口縁部は、「く」の字に直線的に伸びる。7は、口唇部内側に沈線状の窪みがめぐる。

9は、滑石製の紡錘車である。

本住居跡は、皿沼西第Ⅰ期、8世紀第Ⅰ四半期である。

4次第10号住居跡 (第71図)

H-7グリッドに位置する。調査区の西端中央に検出した。4次第177号溝跡より古い。西半が調査区の外、北半が5次第4号溝跡で壊され、



4次第9号住居跡

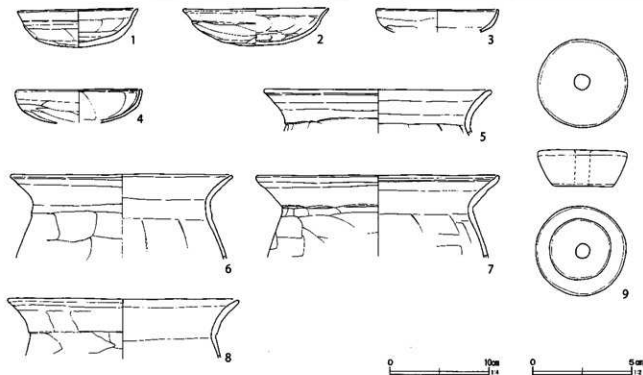
- 1 黒褐色土 焼土ブロック・粒子多量 粘性・しまりなし
- 2 黒褐色土 炭化粒子・焼土粒子少量 粘性・しまりなし
- 3 暗褐色土 粘性なし・しまりあり
- 4 暗褐色土 黄褐色土・炭化物粒子・焼土粒子多量
- 5 暗褐色土 焼土ブロック多量
- 6 黒褐色土 炭化物粒子多量
- 7 暗褐色土 焼土粒子・炭化物粒子少量
- 8 黒褐色土 炭化物粒子多量
- 9 暗褐色土 炭化物粒子 砂粒少量

- 10 黒褐色土 焼土粒了・炭化物粒了少量
- 11 黒褐色土 焼土多量
- 12 暗褐色土 黒褐色土ブロック多量
- 13 暗褐色土 黒褐色土ブロック少量 砂質土
- 14 暗褐色土 焼土粒了・炭化物粒了少量
- 15 暗褐色土 黄褐色土粒子少量
- 16 黒褐色土 焼土粒子少量
- 17 黒褐色土 黄褐色土粒子少量

第69図 4次第9号住居跡

第24表 4次第8号住居跡出土遺物観察表

番号	種別	器種	残存率 (%)	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	胎土	焼成	色調	備考
1	土師器	胸形坏	100	11.6	7.0	4.1	角閃石・軽石	普通	橙色	利根川
2	土師器	坏	80	12.2	10.6	3.2	角閃石・軽石	普通	橙色	利根川
3	土師器	坏	30	12.4	(6.0)	(3.2)	角閃石・軽石	普通	にぶい橙色	利根川
4	土師器	坏	20	12.3		(2.8)	角閃石・軽石	普通	にぶい橙色	利根川
5	土師器	坏	20	13.1		(2.7)	角閃石・軽石	普通	橙色	利根川
6	土師器	坏	30	11.5	3.4	2.6	角閃石・軽石	普通	橙色	利根川
7	土師器	皿形坏	20	13.3		(2.6)	角閃石・軽石	普通	橙色	利根川
8	土師器	皿形坏	20	15.1		(2.5)	角閃石・軽石	普通	にぶい黄褐色	利根川
9	土師器	小型坏	10	10.4		(2.4)	角閃石・軽石	普通	橙色	利根川
10	土師器	坏	10	13.7		(2.7)	角閃石・軽石	普通	にぶい黄褐色	利根川
11	土師器	坏	70	14.9	6.9	3.8	角閃石・軽石	良好	橙色	利根川
12	須恵器	坏	20	14.3		(3.3)	石英・白色針状物質	普通	灰褐色	南比企
13	須恵器	坏	20		8.7	(2.1)	石英・白色針状物質	普通	明褐色	南比企
14	須恵器	長頸壺	5	9.2		(2.0)	石英	普通	灰褐色	東海地方
15	須恵器	短頸壺	5			(1.6)	石英・結晶片岩	不良	灰褐色	木野
16	土師器	壺	20	24.2		(8.6)	角閃石・軽石・頁岩	良好	橙色	東毛地方
17	石製品	砥石	60	全長(4.9) 幅2.7 厚さ2.2 重さ(52.7g)			凝灰岩		灰白色	
18	鉄製品	刀子	70	柄・長さ(6.2) 幅0.7 厚さ0.3 重さ25.7g					—	
19	銅製品	耳環	100	径2.3×2.3 幅0.4×0.4 重さ7.7g					—	



第70図 4次第9号住居跡出土遺物

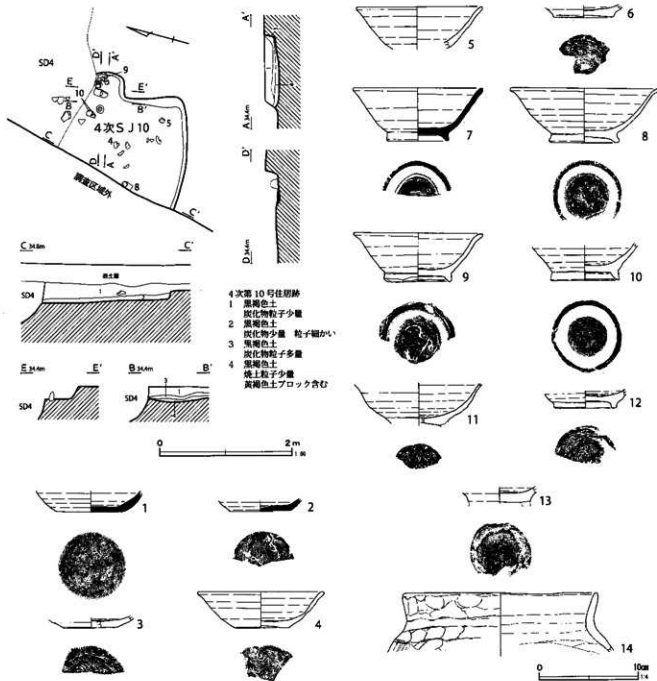
遺構の残りは良くない。規模は、南北(1.53)m、東西(1.95)m、深さ0.21mである。平面形は、長方形と考えられる。長軸方位は、N-72°-Eである。

柱穴、周溝、貯蔵穴は、確認できなかった。東

壁の南寄りにカマドが構築された。カマドは、袖、煙道ともみられない。燃焼部が、壁外に作られる。カマド内からは、須恵器の高台付碗が出土した。また、カマドの手前から須恵器坏1と土師質土器高台付碗10が出土した。さらにカマドの右から

第25表 4次第9号住居跡出土遺物観察表

番号	種別	器種	残存率 (%)	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	胎土	焼成	色調	備考
1	土師器	坏	50	11.9	8.4	(3.8)	角閃石・軽石	普通	浅黄橙色	利根川
2	土師器	坏	40	14.5	7.6	3.7	角閃石・軽石	普通	橙色	利根川
3	土師器	坏	20	12.2		(2.3)	角閃石・軽石	普通	橙色	利根川
4	土師器	坏	30	12.4		(3.4)	角閃石・軽石	普通	橙色	利根川
5	土師器	甕	5	22.4		(4.3)	角閃石・軽石	良好	明赤褐色	利根川
6	土師器	甕	5	22.1		8.5	角閃石・軽石	普通	橙色	利根川
7	土師器	甕	5	24.1		(8.4)	角閃石・軽石	普通	橙色	利根川
8	土師器	甕	10	23.0		(5.9)	角閃石・軽石	良好	橙色	利根川
9	石製品	紡錘車	100	直径4.5 厚さ1.8 重さ57.4g			滑石		黒褐色	



第71図 4次第10号住居跡・出土遺物

第26表 4次第10号住居跡出土遺物観察表

番号	種別	器種	残存率 (%)	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	胎土	焼成	色調	備考
1	須恵器	坏	50		6.3	(2.2)	結晶片岩・片岩	普通	褐色	木野
2	須恵器	坏	20		5.9	(1.3)	結晶片岩・片岩・石英	良好	明褐色	木野
3	土師質土器	坏	10		(5.0)	(1.0)	角閃石・軽石・安山岩	普通	灰白色	利根川
4	土師質土器	坏	30	12.5	5.4	3.7	角閃石・軽石	普通	褐色	利根川
5	土師質土器	坏	20	12.4		(4.3)	角閃石・軽石・安山岩	普通	にぶい黄褐色	利根川
6	土師質土器	坏	20		5.9	(1.3)	角閃石・軽石	普通	にぶい褐色	利根川
7	須恵器	高台付碗	30	12.8	6.0	5.3	角閃石・軽石	普通	褐色	利根川
8	土師質土器	高台付碗	60	14.7	6.4	5.5	角閃石・軽石・安山岩	良好	にぶい黄褐色	利根川
9	土師質土器	高台付碗	30	12.7	6.2	4.9	角閃石・軽石・安山岩	良好	にぶい褐色	利根川
10	土師質土器	高台付碗	30		6.8	(3.7)	角閃石・軽石	普通	にぶい褐色	利根川
11	土師質土器	高台付碗	20			(4.2)	角閃石・軽石	不良	褐色	利根川
12	土師質土器	高台付碗	20		5.8	(1.9)	角閃石・軽石	普通	にぶい黄褐色	利根川
13	土師質土器	高台付碗	20			(1.7)	角閃石・軽石	普通	にぶい褐色	利根川
14	土師器	甕	5	19.2		(6.1)	角閃石・軽石・安山岩	普通	にぶい褐色	利根川

土師質土器坏4・5、床面中央付近から土師質土器高台付碗8が出土した。

1・2は、須恵器の坏である。3～6は、土師質土器の坏である。1～6は、ロクロから糸切り後の調整を行わない。7は、須恵器の高台付碗である。小さな台形状の高台がめぐる。8～13は、土師質土器の高台付碗である。8の高台は外方へ強く張るが、9・10・12は、垂な高台がめぐる。8は、灰釉陶器の碗を模倣した器形である。また9～13の高台は、須恵器の高台の系譜をひく。

14は、土師器の甕である。全体に器肉が厚く、口縁部には、指頭瓦痕が明瞭に残る。肩部も粗く横方向にヘラケズリを施す。

本住居跡は、皿沼西IX期、10世紀第Ⅱ四半期である。

4次第11号住居跡 (第72・73図)

J-10グリッドに位置する。調査区の西側南寄りに検出した。4次第19・20・21号住居跡、第13号掘立柱建物跡と重複し、それより新しい。第21・22号住居跡を南に拡張した住居跡である。拡張の順序は、21→22→11である。遺構の埋没土が、液状化現象によって切り裂かれていた。規模は、南北5.41m、東西5.65m、深さ0.25mである。平面形は、正方形である。長軸方位は、N-11°-Eである。

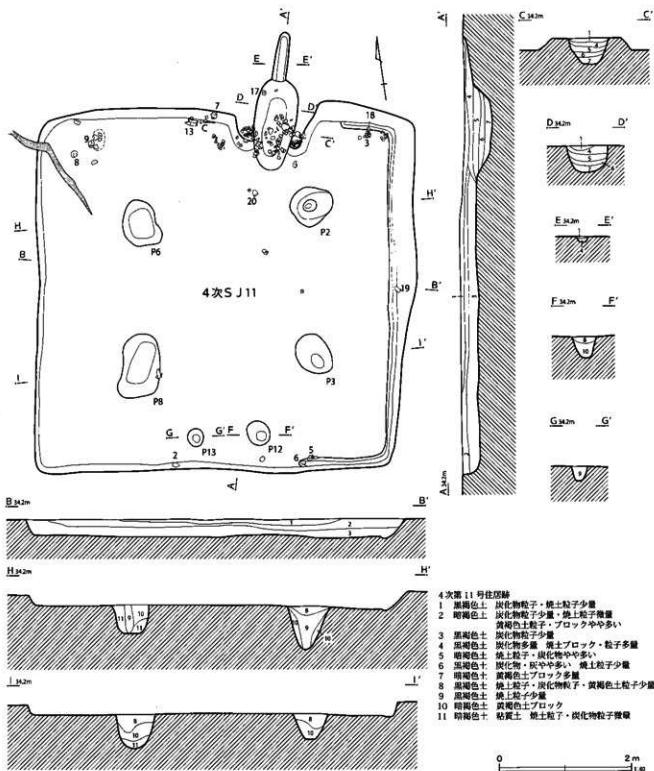
柱穴は、壁面と平行して4本検出した。比較的大きな柱穴でP6・P2は、柱痕跡が残る。また、南壁の中央付近に2つの小穴を検出した。入口にかかわる施設と考えたい。壁周溝は、カマドとP12を結んだ線より東側に検出した。

北壁の東寄りにカマドが構築された。カマドは、袖が短く屋内にのびる。また煙道も長く外へのびる。焚口から燃焼部へは、緩やかに傾斜する。煙道は床面よりも高く作られる。燃焼部の壁面奥から円盤状の土製品17が出土した。

遺物は、カマドの手前から砥石20、カマドの左手壁際から土師器甕13、須恵器坏7が出土した。また竪穴内では、東北隅から土師器坏3、紡錘車18、東壁周溝の中央から編み物石19、南壁沿いに土師器坏2・5や須恵器坏6、北西隅から須恵器坏8・9等が出土した。

1～5は、土師器の坏である。1～3は、浅い碗形の坏である。器肉が薄く、丁寧な作りである。

6～11は、須恵器の坏である。すべてロクロから糸切り後、周辺を回転ヘラケズリする。とくに7は、回転ヘラケズリが中央部にまで及ぶ。口縁部は、緩く内湾しつつ直線的に伸びる。7～9は、底部外面にヘラ記号が残る。7は「M」、8・9は「X」である。



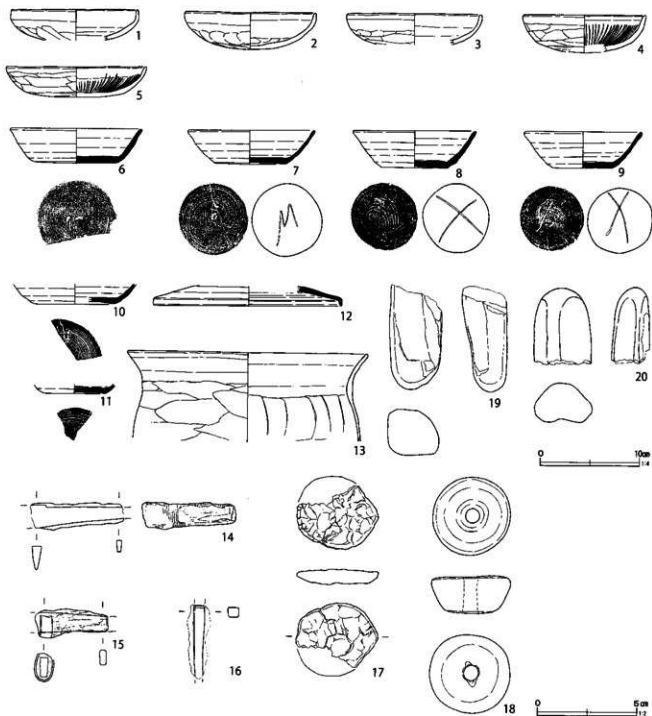
第72図 4次第11号住居跡

12は、須恵器の蓋である。端部は鶴頭状にまどまる。口径が大きいことから高台付碗の蓋と考えられる。

13は、土師器の甕である。器肉はとても薄く、

口縁部は、「コ」の字状口縁の萌芽的な形態である。

14～16は、鉄製品である。14は刀子である。木柄の一部が残る。木柄の外面に糸を巻き、その上に漆を塗布した作りである。15も刀子の破片で



第73図 4次第11号住居跡出土遺物

ある。^{はばき}銅や木質の一部が残る。16は、鉄製の鐵身である。17は、円盤状の土製品である。手捏ねで作られる。用途不明。土器の製作途上で焼かれた粘土かもしれない。

18は、滑石製の紡錘車である。下面の孔に縦の使用痕が残る。19・20は、編み物石である。19はホルンフェルス、20は安山石である。

本住居跡は、皿沼西IV期、8世紀第IV四半期である。

4次第12号住居跡（第74・75図）

I-10グリッドに位置する。調査区の西側南寄りに検出した。4次第19・20号住居跡、第13号掘立柱建物跡と重複し、それより新しい。液状化現象との関係は、不明である。規模は、南北4.13m、

第27表 4次第11号住居跡出土遺物観察表

番号	種別	器種	残存率 (%)	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	胎土	焼成	色調	備考
1	土師器	坏	20	12.6		(3.1)	角閃石・軽石	普通	橙色	利根川
2	土師器	坏	30	12.9	4.0	(3.7)	角閃石・軽石・安山岩	普通	にぶい橙色	利根川
3	土師器	坏	20	13.3		(3.1)	角閃石・石英・鉄粒子か	普通	橙色	ローマ台地
4	土師器	坏	20	12.2	(7.6)	(3.7)	角閃石・軽石	普通	橙色	利根川
5	土師器	坏	20	13.9	4.0	3.0	角閃石・軽石・安山岩	普通	橙色	利根川
6	須恵器	坏	30	13.0	6.5	3.5	石英・白色針状物質	良好	にぶい橙色	南比企
7	須恵器	坏	80	12.6	7.1	3.4	石英・白色針状物質	良好	明褐色	南比企
8	須恵器	坏	80	12.1	6.5	3.8	石英・白色針状物質	普通	褐色	南比企
9	須恵器	坏	80	11.5	5.9	3.6	石英・白色針状物質	普通	褐色	南比企
10	須恵器	坏	10		(7.8)	(2.1)	石英・結晶片岩	良好	明褐色	末野
11	須恵器	坏	5		6.1	(1.0)	石英・白色針状物質	普通	褐色	南比企
12	須恵器	蓋	10	(18.7)		(2.0)	石英・白色針状物質	良好	灰黄褐色	南比企
13	土師器	甕	5	23.9		(8.9)	角閃石・軽石・石英	普通	橙色	利根川
14	鉄製品	刀子	70	身・長さ(4.7) 幅1.2 厚さ0.4 重さ5.8g					—	
15	鉄製品	刀子	30	柄・長さ(3.4) 幅1.0 厚さ1.0 重さ4.5g					—	
16	鉄製品	鉄線(鎌身)	30	長さ(3.7) 幅0.6 厚さ0.5 重さ6.0g					—	
17	土製品	円盤状土製品	80	全長8.2 厚さ1.5 重さ57.0g			角閃石・軽石		橙色	利根川
18	石製品	紡錘車	100	直径3.9 厚さ1.9 重さ42.2g			滑石		灰白色	
19	川原石	編み物石	60	全長(10.5) 幅5.2 厚さ4.6 重さ362.6g			ホルンフェルス		灰色	
20	川原石	編み物石	50	全長(7.7) 幅5.8 厚さ3.9 重さ235.3g			安山岩		灰色	

第28表 4次第12号住居跡出土遺物観察表

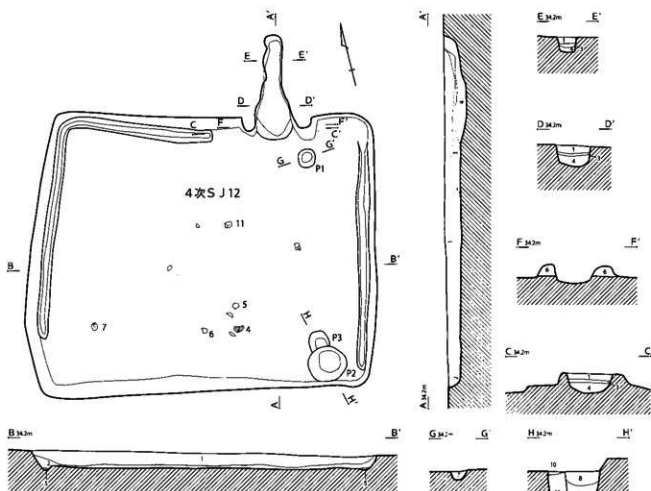
番号	種別	器種	残存率 (%)	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	胎土	焼成	色調	備考
1	土師器	坏	10	11.9		(2.8)	角閃石・軽石・安山岩	普通	橙色	利根川
2	土師器	坏	30	11.8		(2.8)	角閃石・軽石・安山岩	普通	橙色	利根川
3	土師器	坏	30	13.0	(8.0)	(2.6)	角閃石・軽石	普通	橙色	利根川
4	土師器	坏	60	13.2	7.6	3.5	角閃石・軽石	普通	橙色	利根川
5	須恵器	蓋	40	(15.2)		(2.7)	石英・白色針状物質	普通	明褐色	南比企
6	須恵器	坏	30	13.0	7.5	3.5	石英・白色針状物質	普通	褐色	南比企
7	須恵器	坏	60	13.3	7.5	4.1	石英	普通	灰白色	南比企
8	須恵器	坏	20		7.7	(2.9)	石英	普通	褐色	南比企
9	須恵器	坏	10	12.9		(3.7)	石英・白色針状物質	良好	明褐色	南比企
10	須恵器	坏	10		6.0	(0.9)	石英・白色針状物質	普通	褐色	南比企
11	須恵器	坏	50	11.7	6.6	3.3	石英・白色針状物質	良好	褐色	南比企
12	須恵器	高台付碗	80	12.1	7.1	4.9	石英・白色針状物質	良好	明褐色	南比企
13	須恵器	瓶	5			(2.3)	角閃石・結晶片岩	不良	にぶい橙色	末野
14	土師器	小型短頸壺	5	7.9		(3.9)	角閃石・軽石	普通	橙色	利根川
15	土師器	小型甕	5	9.9		(6.6)	角閃石・軽石	普通	橙色	利根川
16	土師器	甕	20	19.8		(16.3)	角閃石・軽石・安山岩	良好	橙色	利根川
17	土師器	甕	5	22.2		(5.0)	角閃石・軽石	普通	褐色	利根川
18	土師器	甕	5	20.9		(4.9)	角閃石・軽石	普通	褐色	利根川
19	土師器	甕	20	22.1		(17.7)	角閃石・軽石・安山岩	普通	褐色	利根川

東西5.10m、深さ0.25mである。平面形は、正方形である。長軸方位は、N-12°-Eである。

柱穴は、カマド手前と南隅に2本検出した。小規模な柱穴である。竪穴住居跡の主柱穴とは考えにくい。また、P3の埋め土を壊してP2が掘り込

まれていた。P2は、貯蔵穴かもしれない。円形で深い穴である。南壁を除き、壁周溝がめぐる。

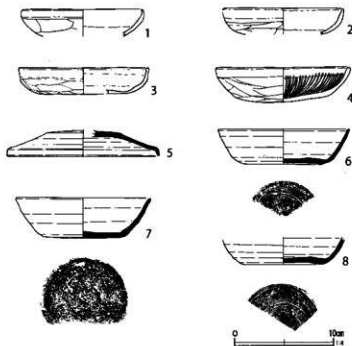
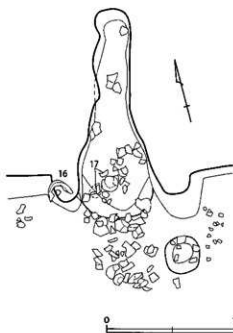
北壁の東寄りにカマドが構築された。カマドの袖は、短く屋内にのびる。狭い燃焼部から煙道が、「ハ」の字状に長くのびる。焚口から燃焼部は、



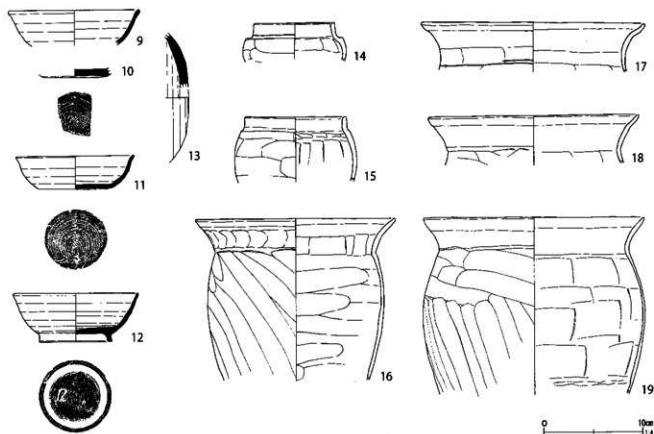
4次第12号住居跡

- 1 暗褐色土 焼土粒子・炭化物粒子少量
- 2 黒褐色土 炭化物や多い
- 3 赤褐色土 焼土
- 4 黒褐色土 灰層・炭化物多量
- 5 黒灰色土 焼土粒子・炭化物粒わずか
- 6 黒褐色土 黄褐色土粒子・焼土粒子・白色粒子少量

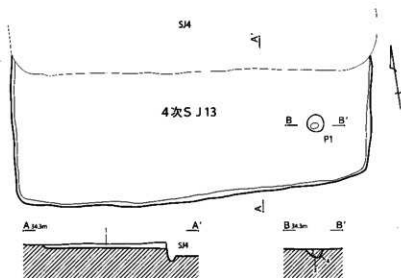
- 7 黒褐色土 粘土質 赤褐色砂粒少量
- 8 黒褐色土 粘土質 焼土粒子・炭化物粒子わずか
- 9 黒褐色土 粘土質と灰色砂層
- 10 黒色土 粘土質 炭化物わずか
- 11 黒色土 赤褐色砂粒少量



第74図 4次第12号住居跡・出土遺物 (1)



第75図 4次第12号住居跡出土遺物 (2)



第76図 4次第13号住居跡・出土遺物

- 4次第13号住居跡
 1 黒褐色土 焼土・炭化物多量
 2 灰色土 焼土少量
 3 黄褐色土 砂質 粒子細かい
 4 灰色土 粘性強い 炭化物含まない

0 2m
1:4

浅く掘り込まれる。燃烧部から煙道は緩くのびる。

カマド内から土師器甕17・19、須恵器の高台付椀12が出土した。また、カマドの左袖には、土師器甕16が、倒置して埋設されていた。竪穴の床面中央部から須恵器坏6・7・11、同蓋5、土師器

坏4が出土した。

1～4は、土師器の坏である。1・2は、口縁部が内湾する坏である。3は、口縁部と底部の間に段を持つ扁平な坏である。4は、内面に細かな暗文を施した暗文土器である。底部と体部の境が明瞭

第29表 4次第13号住居跡出土遺物観察表

番号	種別	器種	残存率 (%)	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	胎土	焼成	色調	備考
1	土師器	台付甕	20		(9.6)	(12.6)	角閃石・軽石・安山岩	普通	橙色	利根川

第30表 4次第14号住居跡出土遺物観察表

番号	種別	器種	残存率 (%)	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	胎土	焼成	色調	備考
1	須恵器	坏	10		(6.7)	(1.7)	石英・白色針状物質	良好	灰白色	南比企
2	土師質土器	高台付椀	40		6.5	(3.0)	角閃石・軽石・石英	普通	灰白色	利根川
3	土師質土器	高台付椀	50	12.0	5.5	4.4	角閃石・軽石・安山岩	普通	浅黄褐色	利根川
4	土師質土器	高台付椀	10	13.4		(3.6)	角閃石・軽石	普通	にぶい黄褐色	利根川
5	土師器	甕	5	17.8		(5.4)	角閃石・軽石・安山岩	良好	にぶい橙色	利根川
6	土師器	甕	5	20.0		(6.6)	角閃石・軽石・石英	良好	にぶい橙色	利根川
7	鉄製品	刀子	40	長さ(3.5) 幅1.3 背幅0.3		重さ11.8g			—	
8	石製品	砥石	100	全長12.2 幅7.7 厚さ5.6 重さ897.5g			安山岩		灰色	
9	川原石	編み物石	100	全長15.1 幅6.9 厚さ3.5 重さ607.6g			安山岩		灰白色	

で扁平となる。器肉もやや厚い。

5は、須恵器の蓋である。口唇部は鶴首状となる。天井部は扁平に削り込まれる。6～11は、須恵器の坏である。6～8・10は、ロクロから糸切り後、底部周辺を回転ヘラケズりする。11は、ロクロから糸切り後の調整はない。12は、須恵器の高台付椀である。ロクロから糸切り後、底部全面をヘラケズリして細い高台をめぐらす。

13は、須恵器の瓶の破片である。球胴甕の底部とも考えたが、回転ヘラケズリで器肉を薄く削りこんでいることから、横瓶の側面部と考えた。

14は、土師器の小型短頸壺、15は小型の甕である。この住居の段階に土師器の短頸壺はないことから、混入と考えられる。

16～19は、土師器の甕である。器壁のとても薄い甕で、丸みを帯びた胴部から「く」の字に曲がる口縁部が続く。16は、細身の長甕である。

本住居跡は、皿沼西Ⅲ期、8世紀第Ⅲ四半期である。

4次第13号住居跡 (第76図)

J-8グリッドに位置する。調査区の西側中央に検出した。4次第4号住居跡を拡張した住居跡である。液状化現象との関係は、不明である。規模は、南北(1.94)m、東西5.40m、深さ0.06mである。拡張後の平面形が、正方形となる。長軸

方位は、N-10°-Eである。

柱穴は、検出できなかった。東南の隅に小穴を検出した。壁周溝は見られない。第4号住居跡のカマド、貯蔵穴が、そのまま用いられたと考えられる。

覆土中から土師器の台付甕1が出土した。

1は、土師器の台付甕である。器肉がとても薄い。

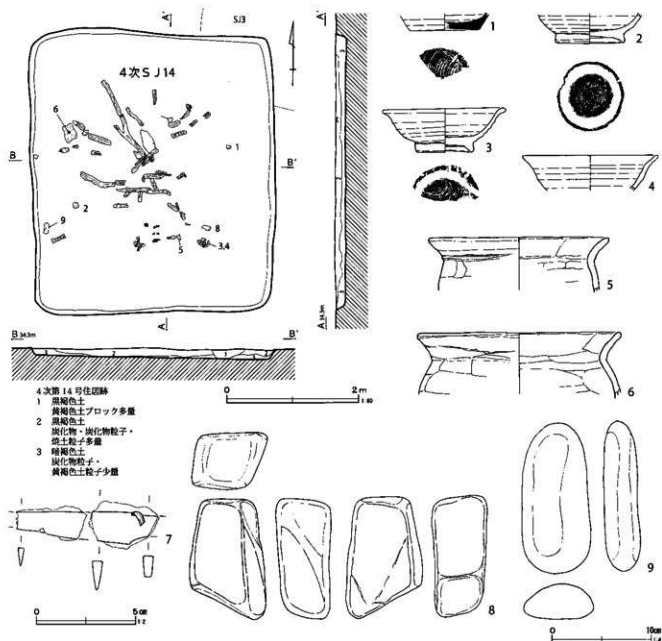
4次第4号住居跡の拡張なので、同時期の皿沼西Ⅱ(新)期、8世紀第Ⅱ四半期としたい。

4次第14号住居跡 (第77図)

I-8グリッドに位置する。調査区の西側中央に検出した。4次第3・7・25号住居跡、第6号掘立柱建物跡と重複し、それより新しい。液状化現象の痕跡が壊される。規模は、南北4.15m、東西3.65m、深さ0.15mである。平面形は、長方形である。長軸方位は、N-0°である。

埋没土の最下層、床面中央付近に炭化材が残る。炭化材は、棟木や梁といった構造材と、垂木など小屋組み材の一部と考えられる。カマドや貯蔵穴、柱穴は、検出できなかった。

遺物は、床面の中央付近を除き、①東側と②西側にまとまって出土した。①は、東南の柱が想定される付近に土師質土器の高台付椀3・4、土師器の甕5、砥石8、北寄りの床面から土師質土器の坏



第77図 4次第14号住居跡・出土遺物

1などが出土した。②は、土師質土器の高台付椀
2、土師器の甕6、編み物石9などが出土した。

1は、須恵器の坏である。底部は厚く、ロクロから糸切り後の調整を行わない。2～4は、土師質土器の高台付椀である。2・3は、ロクロから糸切り後、小さな高台をめぐらす。2は、糸切り痕が不明瞭であるが、高台径が大きく、木地碗(漆碗)を模倣したのかもしれない。

5・6は、土師器の甕である。器肉が厚く、ヘラケズリも粗い。

7は、鉄製品である。刃部先端と茎部が欠損した刀子である。茎部に接し鎌が残る。

8は、安山岩製の砥石である。5面が研がれている。9は、安山岩製の編み物石である。

本住居跡は、皿沼西Ⅸ期、10世紀第Ⅲ四半期である。

4次第16号住居跡 (第78図)

M-8グリッドに位置する。調査区の西側中央に検出した。遺構の重複はない。液状化現象との関係は明らかにできなかった。規模は、長軸3.69

第31表 4次第16号住居跡出土遺物観察表

番号	種別	器種	残存率 (%)	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	胎土	焼成	色調	備考
1	土師器	碗形環	5	12.5		(2.8)	角閃石・軽石	普通	橙色	利根川
2	土師器	鉢形環	10	13.3		(5.1)	角閃石・鉄粒子	普通	にぶい橙色	ローム台地
3	須恵器	蓋	10			(1.6)	石英・白色針状物質	良好	明褐色	南比企
4	須恵器	蓋	10			(2.0)	石英・白色針状物質	普通	明褐色	南比企
5	須恵器	蓋	5	(16.4)		(1.9)	石英・結晶片岩・片岩	不良	にぶい橙色	末野
6	須恵器	碗	10		7.2	(3.8)	石英・白色針状物質	良好	明褐色	南比企
7	須恵器	環	100	11.8	5.4	3.6	石英・白色針状物質	良好	褐色	南比企
8	須恵器	甕	5			(2.3)	結晶片岩	普通	明褐色	末野
9	須恵器	環	10		(5.4)	(2.2)	結晶片岩・片岩	良好	褐色	末野
10	須恵器	環	5		(4.8)	(2.5)	石英・白色針状物質	良好	明褐色	南比企
11	須恵器	環	10		5.4	(1.1)	石英・白色針状物質	良好	灰褐色	南比企
12	須恵器	フラスコ型土器	10			(6.1)	石英・白色針状物質	普通	褐色	南比企
13	川原石	編み物石	100	全長11.9 幅9.8 厚さ3.5 重さ545.9g			閃緑岩		灰白色	

m、短軸2.44m、深さ0.12mである。平面形は、長方形である。長軸方位は、N-35°-Wである。

カマドが北西隅に検出された。このような場所にカマドを構築する例は少ない。カマドの燃焼部は、北壁の外に突出し、煙道は、短く立ち上がる。袖は見られない。焚口は浅い。貯蔵穴や柱穴などは、確認できなかった。

遺物は、カマドの右側から須恵器環7、床面北東よりから須恵器蓋3、円形で扁平な石13などが出土した。

1・2は、土師器の環である。1は碗形の環、2は鉢形の環である。外面はユビオサエが残る。

3~5は、須恵器の蓋である。3は、ボタン状の摘みがつく。摘みの頂部に「田」と墨書される。5は、口唇部が小さく突出する。6は、口縁部が欠損するが、底径が大きなことから須恵器の無台碗と考えた。7・9~11は、須恵器の環である。6・7・9~11は、ロクロから糸切り後の調整を行わない。

12は、フラスコ型土器の頸部破片である。胴部の一部が残存し、ロクロ目が頸部と垂直方向に走行することからフラスコ型土器と考えた。他の遺構からの混入品である。

13は、楕円形で扁平な石材である。用途不明。
閃緑岩である。

本住居跡は、皿沼西V期、9世紀第I四半期である。

4次第17号住居跡（第79~81図）

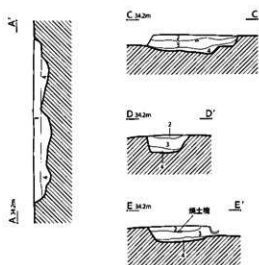
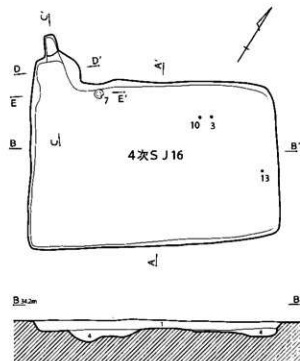
I-9グリッドに位置する。調査区の西側中央に検出した。4次第8号住居跡、第6号掘立柱建物跡と重複し、それより古い。埋没土が、液状化現象によって破壊される。規模は、長軸10.1m、短軸7.41m、深さ0.11mである。平面形は、長方形である。長軸方位は、N-0°である。

カマドが、北壁の中央に構築された。ただし、第8号住居跡によって壊され、煙道の一部が残存するにすぎない。主柱穴は、壁面に平行して検出した6本（P1~P6）と考えられる。

貯蔵穴は検出できなかった。壁周溝は、西壁の一部を除いて検出した。やや幅広い壁周溝である。

遺物は、床面の南側にまとまって出土した。土師器の環2・3・5・6・11や小型甕33、編み物石34・35・36などが出土した。また、東壁に沿って土師器甕29・30が出土した。

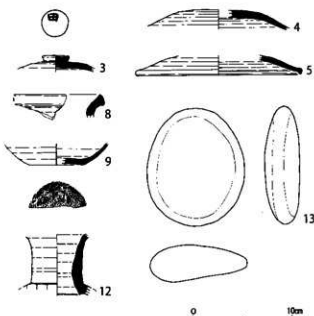
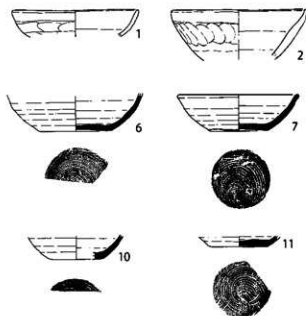
1~11は、土師器の環である。1・2は、半球形の環で、暗文土器から系譜をひく土器である。しかし、内面に暗文を施さない。3は、須恵器環蓋模倣環の系譜をひく土器である。4~11は、口縁部が内湾する環である。小型の4~7と、大型の8~11がみられる。12~17は、大振りの皿である。



4次第16号住居跡

- 1 暗褐色土 炭化粒子・焼土多量
非常に硬化したローム黄褐色ブロック少量
- 2 暗褐色土 焼土ブロック・炭化粒子少量 砂粒多量
- 3 暗褐色土 炭化粒子・炭化粒子の一部は層下層で陥没に堆積している
- 4 暗褐色土 黄褐色土ブロック多量

0 2m 1:50



第78図 4次第16号住居跡・出土遺物

12・15の口縁部は内湾するが、他は大きく外反する。

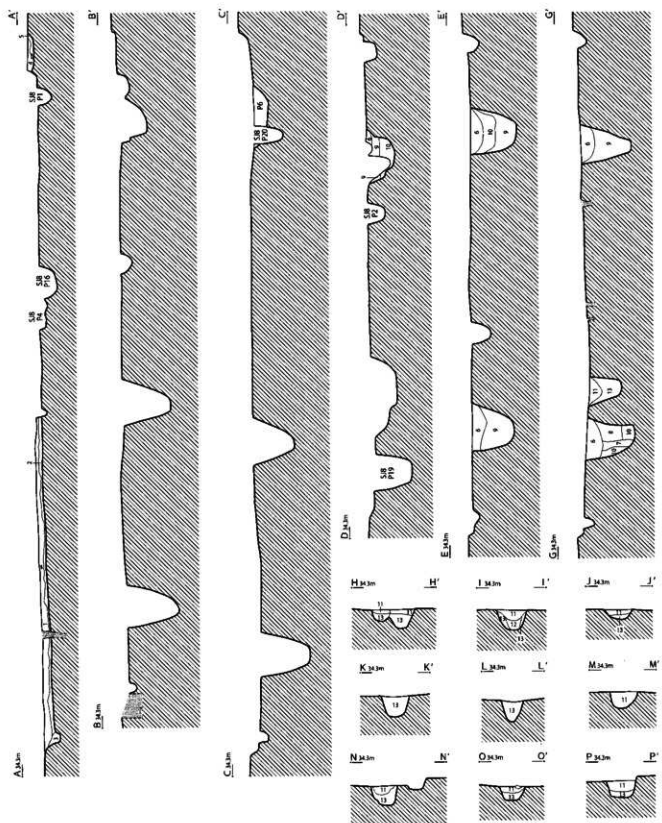
18～21は、須恵器の蓋である。18は、扁平な宝珠状の摘みが残る。19の摘みは、つぶれた宝珠状である。返りは、見込みの深いところをめぐる。22～28は、須恵器の環である。ロクロから糸切り後、底部の全面に回転ヘラケズリ調整を施す。

29～32は、土師器の甕である。29・30の器肉

はやや厚く、古墳時代後期の甕に近い。口縁部の伸びも小さい。31は、器肉をととても薄く作る甕である。32は、甕の底部である。他の甕との接点はない。外面には、カマドと接して融着した焼土塊がこびりつく。

33は、小型の甕である。器肉が厚い。

34～36は、編み物石である。34・36は砂岩、35は安山岩である。



第80図 4次第17号住居跡 (2)

第32表 4次第17号住居跡出土遺物観察表

番号	種別	器種	残存率 (%)	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	胎土	焼成	色調	備考
1	土師器	坏	80	11.3	6.2	3.6	角閃石・軽石	良好	にぶい褐色	利根川
2	土師器	坏	100	12.9	7.2	4.3	結晶片岩・石英	普通	褐色	小山川
3	土師器	坏	100	11.1	8.4	3.7	結晶片岩・石英	普通	褐色	小山川
4	土師器	坏	100	11.9	6.8	3.5	角閃石・軽石	良好	褐色	利根川
5	土師器	坏	40	11.9	8.6	(3.4)	角閃石・軽石	普通	褐色	利根川
6	土師器	坏	20	12.6	7.2	3.1	角閃石・軽石・石英	普通	にぶい褐色	利根川
7	土師器	坏	20	11.5	(7.8)	(2.8)	結晶片岩・鉄粒子	不良	褐色	小山川
8	土師器	坏	10	13.0		(2.8)	結晶片岩・鉄粒子	普通	にぶい褐色	小山川
9	土師器	坏	20	15.5	5.1	3.5	角閃石・軽石	良好	褐色	利根川
10	土師器	坏	10	13.7		(2.8)	角閃石・軽石	良好	褐色	利根川
11	土師器	坏	10	13.3		(3.1)	角閃石・軽石	普通	褐色	利根川
12	土師器	皿	10	14.5	(6.2)	(3.0)	角閃石・軽石	普通	褐色	利根川
13	土師器	皿	20	16.1	3.2	3.4	角閃石・軽石	良好	褐色	利根川
14	土師器	皿	50	15.4	6.6	3.6	角閃石・軽石・石英	普通	褐色	利根川
15	土師器	皿	50	15.9	11.0	3.9	角閃石・軽石・安山岩	良好	褐色	利根川
16	土師器	皿	20	15.4	9.4	3.6	角閃石・軽石・石英	普通	褐色	利根川
17	土師器	皿	10	13.9	(5.2)	(2.7)	角閃石・軽石・石英	良好	褐色	利根川
18	須恵器	蓋	5		(1.3)		角閃石・結晶片岩	不良	灰褐色	末野
19	須恵器	蓋	60	16.0		3.4	石英・結晶片岩	普通	褐灰色	末野
20	須恵器	蓋	30			(2.5)	石英・白色針状物質	良好	褐灰色	南比企
21	須恵器	蓋	10	(15.1)		(2.2)	石英・白色針状物質	普通	褐灰色	南比企
22	須恵器	坏	10		8.4	(2.2)	石英・結晶片岩	普通	明褐灰色	末野
23	須恵器	坏	30	14.4	(6.2)	(3.6)	石英・片岩・白色針状物質	普通	褐灰色	南比企
24	須恵器	坏	30	16.3	9.2	4.5	石英・結晶片岩	普通	明褐灰色	末野
25	須恵器	坏	10		7.1	(0.9)	石英・結晶片岩・片岩	普通	明褐灰色	末野
26	須恵器	坏	5		7.9	(0.9)	角閃石・軽石・石英	普通	明褐灰色	末野
27	須恵器	坏	5		(10.3)	(0.8)	石英結晶片岩	不良	灰褐色	末野
28	須恵器	坏	10		(9.2)	(0.9)	結晶片岩・白色針状物質	普通	にぶい黄褐色	南比企
29	土師器	甕	5	24.3		(9.0)	角閃石・軽石・石英	良好	褐色	利根川
30	土師器	甕	5	22.0		(6.5)	角閃石・軽石・石英	良好	褐色	利根川
31	土師器	甕	5	23.0		(3.3)	角閃石・軽石・安山岩	良好	褐色	利根川
32	土師器	甕	5		2.4	(9.8)	角閃石・軽石	不良	褐色	利根川
33	土師器	小型甕	40	12.6	4.2	14.6	角閃石・軽石	普通	褐色	利根川
34	川原石	編み物石	100	全長11.5 幅5.0 厚さ3.2 重さ270.6g			砂岩		灰白色	
35	川原石	編み物石	100	全長14.5 幅4.0 厚さ4.9 重さ404.9g			安山岩		灰白色	
36	川原石	編み物石	100	全長14.6 幅6.2 厚さ4.6 重さ764.2g			砂岩		灰色	

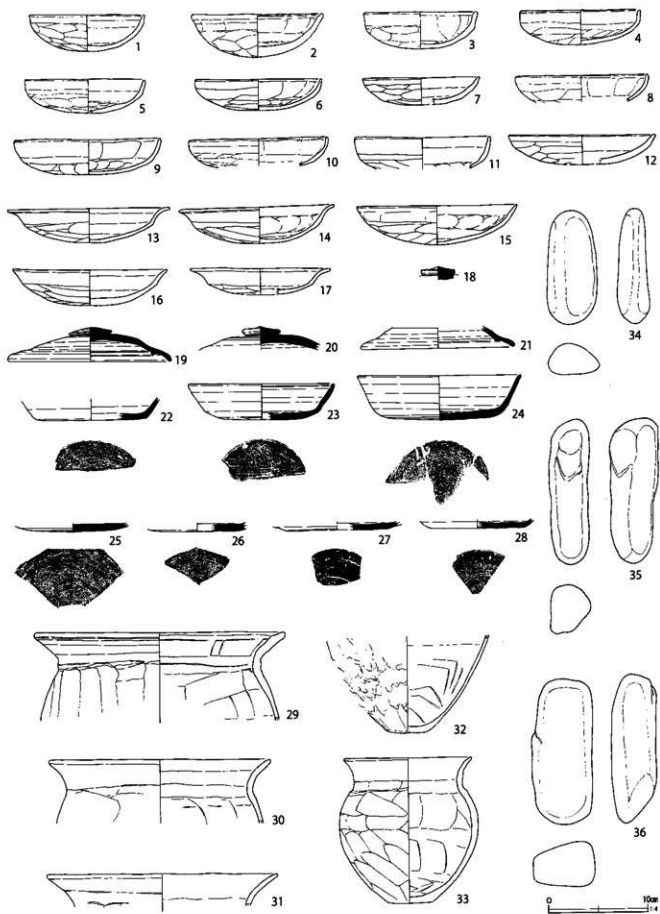
本住居跡は、皿沼西Ⅰ期、8世紀第Ⅰ四半期である。

4次第19号住居跡 (第82～84図)

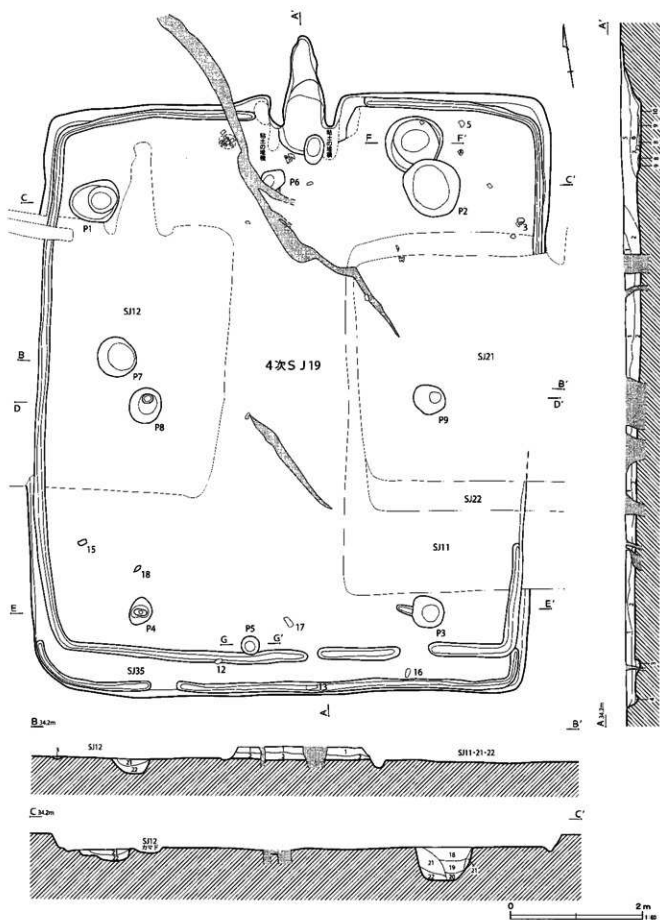
J-10グリッドに位置する。調査区の西側中央に検出した。4次第11・12・20・21・22号住居跡、第13号掘立柱建物跡と重複し、4次第20号住居跡より新しく、他より古い。なお、南壁が南に拡張され、4次第35号住居跡となった。埋没土が、液状化現象によって破壊される。規模は、長軸

8.32m、短軸7.54m、深さ0.25mである。平面形は、長方形である。長軸方位は、N-8°-Eである。

カマドが、北壁の中央に構築された。袖が長く壁内に突出し、煙道も長く壁外にのびる。煙道は、「ハ」の字形にすばまる。煙道は、燃焼部から緩い傾斜でのびていく。カマドの袖には、土師器の甕9・10が、倒置して埋設されていた。燃焼部の壁面は良く焼けていた。焚口は、ゆるい傾斜で



第81图 4次第17号住居跡出土遺物



第82图 4次第19号住居跡 (1)